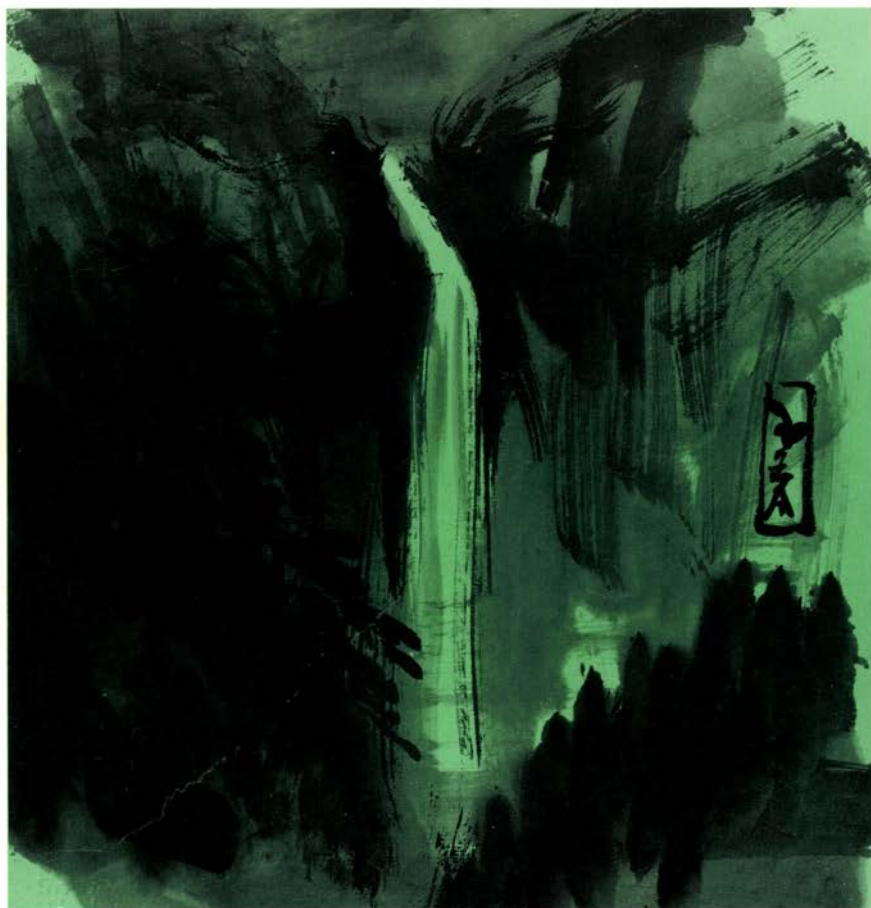


川柳塔

平成元年七月二十五日印刷
平成元年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七四七号



日川協加盟

No. 747

八月号

弓削駅前路郎氏句碑建立 40 周年記念

岡山県芸術祭参加

第41回 西日本川柳大会案内

○とき 平成元年9月3日(日) 午前8時30分開場

○ところ 岡山県久米南町下弓削

久米南町中央公民館 (JR津山線 弓削駅下車 徒歩5分)

~~~~~  
○兼題と選者(50音順、敬称略) — 各題2句以内 —

|   |   |   |   |   |     |        |
|---|---|---|---|---|-----|--------|
| 出 | 会 | う | 安 | 藤 | 富久男 | (高松市)  |
| 遊 | ぶ |   | 橋 | 高 | 薫 風 | (豊中市)  |
| 午 | 後 |   | 新 | 家 | 完 司 | (鳥取県)  |
| 住 | む |   | 浜 | 野 | 奇 童 | (久米南町) |
| 予 | 定 |   | 平 | 山 | 繁 夫 | (神戸市)  |
|   | 列 |   | 水 | 粉 | 千 翁 | (倉敷市)  |

~~~~~

○席 題 1 題, 他に特別題1 題

○兼題投句 各題2句以内、縦20cm、横4cm程度の句箋に1句ずつ
明記、裏面に雅号を書き、8月31日までに、(出席者は
当日受付)

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓 削 川 柳 社 宛

○会 費 出席 2,000 円 (路郎句碑のカラーテレフォンカード、昼食、発表誌呈)
投句 1,000 円 (発表誌呈)

○呈 賞 岡山県知事賞ほかを総合成績で

~~~~~  
※ 前夜祭を川柳公園で開催します。(19:00~21:00)

今年は「川柳まつり」として開きますので町民皆さんをはじめ、  
広く一般の方々の参加をお待ちいたします。(屋台店 多数)

主 催 弓 削 川 柳 社  
後 援 久米南町、ほか各種団体

## 熱烈感謝

### 西尾 栞

七月九日の受章記念川柳大会は、皆様様の温かいご心形で、素晴らしい盛大な大会にして戴きまして、感謝感激の外ございません。

茲に謹んで篤く御礼申し上げます。

各柳社の主幹の先生の御選や、日川協理事長山田良行氏並びに獅子友北畑金治氏の祝辞を頂戴し、錦上華をお添え下さいまして、何とお礼を申し上げてようしいやら、本当に有難うございました。

ご出席の皆様はじめ各位に謹んで厚く御礼申し上げます。

最も感謝致しましたことは、従来の結社意識を乗り越えて、ご出席下さいましたご温情、並びにご遠方の方は前夜からご宿泊下さいましたご芳情は、筆舌につくせません。ご出席下さるだけでも有難いと思っておりますのに、その節は過分のお祝いまで頂戴致しまして、重ねて厚く厚く御礼申し上げます。

昭和六十年九月の喜寿金婚の時のこともありますので、再三辞退致しましたが、遂にこんな盛大な大会におがましくも乗せて戴きまして有難うございました。

この度の祝賀宴は玄人の芸能人を入れず、川柳塔の同人、誌友の詩舞や舞踊、

きやらばく一座のアンコールにつぐアンコール、吉本興業から、もらいのかかるハワイアンギターとその踊り等々の盛り上り、川柳塔の和のパワーに今更ながら感激しております。出場の皆様様の企画、実演に心より厚く御礼申し上げます。

なお、当日の各ポストポストのご活躍の裏方さんのご苦勞に對しまして、衷心より感激して感謝しております。有難うございました。いくらお礼申し上げても申し上げきれません。

最後に皆様のご健勝とご多幸をお祈り致しまして、洵に粗辞でございますが、お礼の言葉と致します。もう一度、有難うございました。

座右の句

人恋し人わずらわし波の音

( 栞 )

私の句

北風に何も語らぬ風ぐるま

千 原 理 瑛

## 川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

熱烈感謝

福江島の娘

西 尾 栞 … ( 1 )

川柳塔 (同人吟)

黒 川 紫 香 … ( 2 )

自選集

西 尾 栞 選 … ( 4 )

■川柳太平記 (135) 川柳の群像 本田溪花坊

東 野 大 八 … ( 34 )

■連載 俳風柳多留廿六篇研究 (四十二丁)

黒 川 紫 香 選 … ( 36 )

水煙抄

月 原 宵 明 … ( 38 )

秀句鑑賞

同人吟

都 倉 求 芽 … ( 57 )

愛染帖

水煙抄

橋 高 薫 風 選 … ( 61 )

へ女性コーナー 茴香の花

小 出 智 子 選 … ( 62 )

## 福江島の娘

黒 川 紫 香

十五年ぶりの再会だった。もう彼女たちは娘から女になり、家庭の主婦として立派になっている。六月、長崎で日川協の大会があるので足を伸ばしたいと便りをすると、折り返して、是非来てほしい、何もできないが、自分たちで案内だけさせてもらおうという返事が届いた。

自分たちというのは、もう一人同じ年頃の娘がいて、私が最後の職場としてシテイホテルの女子従業員寮の寮長をしたころ、世話をした娘たちが各地にいる。常に二百人が住む寮生と寮長、そして寮母、お互いのコミュニケーションを大切に、親娘の絆のようになつていたから、娘たちに違いなかった。

だから福江空港に下り立つた私をいち早く見つけて、「お父さん変わんないのね」と温かい手で握ってくれたのは、十五年ぶりに会った千登子ちゃんである。その千登子ちゃんが先頭になって、用意したマイクロスパスに一行七名を乗せ、島内を案内してくれた。

切支丹の島、福江は先驅者の殉教と忍教が数々の天守堂と教会を残し、苦難を伝えている。入江の多い海岸線は写真に見るようで、

句評リレ― 柳楽鶴丸・平田実男・福本英子・宮口笛生……………(64)

「山」……………遠山可住選……………(74)

一路集「強い」……………川島諷云児選……………(74)

「雑巾」……………羽津川公乃選……………(75)

初歩教室「汗」……………阿萬萬的……………(76)

日川協長崎大会と五島の旅……………奥山美智子……………(86)

本社七月句会……………(88)

西尾 栞叙勲記念川柳大会……………(100)

柳界展望……………(101)

各地柳壇(佳句地10選/久保正敏)……………(102)

■七月各地句会案内……………(113)

■編集後記……………(115)

座右の句

君おもう熱もまじれる風邪の熱

(薰風)

私の句

繙帯の白さ甘える人が欲し

吉田 あずき

先ほどベトナム難民が漂着して話題を撒いた三井楽海岸は特に美しかった。

夜、民宿へ千登子ちゃんともう一人の陽子ちゃんをご主人とこどもを連れ、「祝い事があったので」と詫びに来た。千登子ちゃんはいしだあゆみ、そして陽子ちゃんは朝丘雪路に似ている美人である。二人は従姉妹同士で、結婚前と結婚後の苗字が入れ替わっていた。

「これでもうちら、海にもぐってウニやアワビをとってくるんよ」と、宿の料理に添えて出たウニとアワビは、特に新鮮で舌にとろけるように旨かった。

ともあれ十五年ぶりの再会で、お互いにホロリ一滴の涙をこぼしたのも事実で、福江空港を飛び立ち、玩具のようなYS機の窓から眺めた五島の島々は美しく、思わず「また来るよ」と叫ばずにいられたかった。

大会参加のためあわただしく戻った長崎の会場と泊ったワシントンホテルに、それぞれ数名の元ホテルの娘たちが子どもを連れて会いに来てくれた。その中に十年程前、水客君と長崎を訪れた時、ホテルを辞めて間もないみずほちゃんというのが、一日つききりで案内してくれたが、その娘も交っていて嬉しかった。「まだ寮長さんお若いわ」とお世辞でも嬉しい温味のある言葉と、それぞれ成長した娘たちを臉の裏に刻んで、間もなく長崎を後にした。



西尾 葉選

奈良市 長谷川 春 蘭

いつの間に建ちし銀行夏つばめ  
夏至の来て病棟早き夕餉どき

すかんばや飢えし暮らしの話など

新茶汲む夫婦湯呑も古はけて

五月雨や菓子の名にある京観世

まだ井戸を使う路地なりひとなさけ

米子市 野坂 なみ

文通のご縁が結ぶいい日和

プライドを落した春の特級酒

故郷の土の温みになく蛙

いつまでも友でありたい雪月花

さけられぬ溝で一氣に跳んでみる

残り時間も大事にしようこの絆

米子市 川 上 より子

たしかなる老いを告げるか蝸牛管

単身赴任絆のしみの洗い時

律儀なり噂話が帰り着く

童歌載せてる雲と仲良しに

母の膝過剰防衛脱ぎ捨てて

ああ絆 そはふるさとの星の下

笠岡市 松本 忠三

禪をしめたと表現が嫌ですわ

有合わせの袋に入れてお裾分け

心無い仕種が生んだ自動ドア

ああ言えばこう言うばあさんも元氣

氣にするな梅雨が早いが遅かろが

情実がからみわたしの負けですわ

松原市 谷垣 史好

生きている値打ちよ夏の掛布団

また一つ退路を遮断されて夏

骸骨が踊るあいつは義兄弟

風呂に水張りながら読むミステリー

膝の猫急にそいつが憎くなる

煮えたぎる油 北京は早や冬に

桜井市 岩本 雀踊子

六法を開いて逃げ道考える

鳩時計昨日と今日は妻が留守

尋卒の知恵が哀しい空回り

やさしい母がひとり芝居をしてくれる

親馬鹿になつていたのにフト気付く

屋台なら吞めるポケツの裸ゼニ

西宮市 西口 いわゑ

シャボン玉はかないものの美しき

いつからか身内の顔でいる人形

筋書きを変えてからよく眠られる

古書店で青春に会う雨の午後

沙羅双樹 一夜の恋の物語

風はみどり一円貨にも自負がある

鳥取県 川崎秋女

焦燥の日々よ仕事がかどらぬ

消費税慣らされてゆく怖さ

戦友と言う友がいる夫で

無に入らぬ詞が一つ梅雨に入る

風呂の湯が溢れる私のぜいたく

海荒れて明治の亡父を憶い出す

鳥取県 土橋 螢

わたくしの影から緑濃く深く

満員御礼昼のホテルの駐車場

乳母車押して煙草を吸っている

カーテンを開けると夏がまる見えだ

夏用のバスト整形する少女

死にたくないのだから歩いていきます

米子市 林 荒介

それぞれに立場があつて水の嵩

ローソクの尽きれば身内ちりぢりに

ふる里のははの墓標を見て帰る

風車 何時も隣にいる相手

待ち針の光りおんなを眠らせぬ

旅からは白紙に彩を重ねあう

平田市 久家 代仕男

青田風 宵の蛙は話好き

いたわりの心も少し初夏の風

河岸に来て風と小ばなししたくなる

近よれば背なに目がある鬼やんま

二級酒ではすみがついた安来節

豆の木の高さを測る下がり蜘蛛

今治市 矢野 佳雲

地図書いてくれたが手ぶらでも行けず

恩人の中に家内の好きな人

筋書きが狂うて君は人の妻

夫婦和合の秘訣聞いたがあきらめる

明日知れぬ身を足出して寝るアサリ

本気なら考えますと手を払い

米子市 林 瑞枝

隣国の吐息大きく洩れて来る

にんげんの弱さ奥歯は知っている

ときどきはジョークを詰める肩パック

満月よこの苛立ちを許してね

見飽きない貌でふつくら飯が炊け

オブラートに包んだ愚痴がほろ苦い

大阪市

西出楓楽

淋しくてつい直球を投げました

結婚難とは男のことよ蟬時雨

育児書の通り育てて背かれる

梅雨空へジョーク空しくこだます

心機一転ただ口紅をかえただけ

同い年つい採点が甘くなる

和歌山市

西山幸

耳よりな話をとんと聞かぬ耳

不快指数のなかの一円貨の重み

細すぎる小指でいつも飢えている

栗挾んだままの聖書の一ページ

老婆心 釘の頭を打ちなおす

身の程を忘れない日のビール瓶

豊中市

田中正坊

平和主義 男を信じすぎないか

六十七まだ若いとも老いたとも

自分史ももう終章に六十七

そっとしておいてほしいの鳳仙花

大柄の美女佇っている肥後菖蒲

びいどろのぼっぺんを買った白秋館

八尾市

高杉鬼遊

ひばり死す老夫婦そうめんを食う

鬼なんかいるものですか鬼が言う

歌を唄う男は箆を放り出され

身体ではお返しできぬ年になり

大臣をいじめる記事が面白い

不器用な影と一緒に生きてゆく

兵庫県

遠山可住

マンガ捨てた日から大人になって来る

生きざまの僕には僕の地図がある

孝行が長生きされ過ぎて困り

しょうぶ湯の香りほのかに日記閉す

金になる歩を敵陣へ打っておく

誰も見ていないわたしが怖くなる

弘前市

波多野五楽庵

花の季を敷きつめている津軽です

言い過ぎて申告洩れにされている

イデオロギー皺がだんだん深くなり

よもぎ風呂素朴な町に住みなれる

手打式多少の誤差は吞む覚悟

味方かと思えば敵になる手形

竹原市

小島蘭幸

雨の日も籠のうぐいす鳴き止まぬ

素うどんがうまい情熱家になりたい

幸福家族 個性は消えてゆくばかり

迷いなどなくて仏も裸女も彫る

雨が降っているので妻よコーヒを

二十九歳と書いているのは妻だろう

京都市 松川杜的

ティッシュ一つ空くじなしというセーブル

雀チyunチyun森の便りを持つてくる

大安も仏滅もない余命表

喜寿米寿 恋という字に年齢はない

星座占い乙女座を見ている

おばあちゃんポタポタ焼と猫が好き

松原市 玉置重人

勲八の歴史が重い父の皺

父の日の父吊皮にぶらさがり

ボーナスの噂冷房ききはじめ

足跡がないぞまだまだ歩かねば

情性ではないぞと思う靴すべり

二枚目の舌がばちばちもつれだし

豊中市 安藤寿美子

棺桶の中で自分を知るだろう

また役を引きうけちまった自己嫌悪

する事が山ほどあって雨が降る

食べていきますのか窓の蠅とり蜘蛛

シャボテンの花の赤さに目がくらむ

たたくだけたいて石橋渡らない

和歌山市 福本英子

庇いあう絆砂場のあにいと

海紅豆孕んで亡夫の忌が巡る

懺悔懺悔隠れクルスの島巡り

旅人と饒舌になる露天風呂

昨日と同じ道を選んで雨を行く

姿見にうっかり見せた旅疲れ

下関市 石川侃流洞

一杯のかけそば しみじみ福祉思ふこと

少し呆けて温い対話の中にいる

定例会議無駄な企画と思わぬか

百点の妻が時々魔女に見える

蛇口ポトポト悪魔が覗く原爆忌

癌が怖くて健康診断には行かぬ

倉敷市 野田素身郎

ロケを見ていてエキストラに駆り出され

無遠慮な電話がかかる通夜の席

汗淋漓妻子はフアミリーレストラン

妻のこと句にして妻の目が陰し

図書館の六法全書は真新し

堺市 中川滋雀

試行錯誤ついてくるなと言えぬ影

ラルレロ舌がもつれた小さい嘘

てのひらで覆う罪なら許される

通り魔と妥協をしたら楽になり

電話では言えぬ話にやけどする

奈良市 宮口笛生

田植すんだら温泉へでも行こう妻よ

米作りに執着のない田植する

旅先の竹輪がうまいワンカップ  
向う意気ばかりが強い敵の数  
山の空気蛇も百足も蚊も蠅も

伊丹市 榎谷寿馬

免状を取ってから妻急に老け

ご近所の通夜へ小さくなつて出る

桂林は無事か北京のニュース見る

釣鐘まんじゅが丁度歯に合う天王寺

寺町にフアツションがあり門構え

西宮市 林はつ絵

がむしゃらの月日に傷を置いてくる

満足をくれる自分を信じよう

たわいなく風船しばむ待ちぼうけ

おどり場で息整えてからのぼる

土の道踏みたく少し遠回り

八尾市 宮西弥生

昨日今日同じパターンのフライパン

神さまも許されましよう風の罪

足元が明るい青竹踏んでいる

住めば都母なる川に羽洗う

人を指す指で恋人抱いている

大阪市 本間満津子

思考ゼロ回転木馬下りられず

気晴らしにたくさん納めた消費税

地図にない径にも花は咲いている

風向きが変わってためらう白い杖  
風鈴のストレス窓を開けてやり

松原市 佐藤藤子

行脚僧もしやと思うほど似てる

遣りきれぬ心の空が澄み渡る

珈琲の底に潜んでいた殺意

お二人の写真シャッター任せられ

日照紫陽花 母はいつでも苦勞性

和歌山市 松原寿子

うわさ掘るひとさし指に鬱をみる

生れ変つて添うてゆきたい公文書

青春の扉が古い地図にある

逢う逢わぬ止り木ほどの安らぎよ

越えられぬ歩幅のなかで揺れ続け

倉吉市 奥谷弘朗

潮時を心得ている苦勞人

ほろ酔いで打ち切る酒にまだなれぬ

子の仕草親のつながり争えぬ

本心を伏せて流れに身をまかす

先頭を切るのは若い方がよい

大阪市 津守柳伸

好い噂ばかりが走る好い仲間

耳学問おんなに暇がありすぎる

一分の電話にすぎる闇の中

均等法ちよつと二泊のパスポート

鍼やいと糸目つけない酵素風呂

京都市 都 倉 求 芽

四季の国四季をハウスに壊される  
砂利を踏む静けさに酔う御所御苑  
新緑のエアポケットに昼の月  
卑弥呼論争美女なるが故の二千年  
はなしようぶ あじさい劣らず雨に媚び

倉敷市 稲 田 豊 作

浮き沈み沈んでばかりいる私  
そろばんに義理をはじいて吐息する  
試練だと胸張りピンチとは言わず  
定年制仕事の鬼もクビになる  
息子の出来棚に上げての嫁選び

藤井寺市 吉 岡 美 房

美男美女猫にもあつて貰われる  
絵馬堂に忘れたままの女傘  
ひたすらに寡黙瞑想通勤車  
デュエットの二人その気になって来る  
定年の日まで離婚を待つという

和歌山市 堀 端 三 男

肩書きを捨てると眠り深くなる  
娘の声が亡妻に似て来る血の絆  
亡母の齢まで生きたら二十一世紀  
悔恨のときが来るぞと森が哭く  
戦友会鬼軍曹も好々爺

堺市 高 橋 千万子

初ものの値段は聞かずたべるもの  
ブラウスを買ったびウソを言う女  
週休二日働き蜂の遊び下手  
辻褄の合わぬくすりを飲まされる  
夏の窓びつしやり閉めて人が住む

美禰市 安平次 弘 道

冷凍魚の目玉よ未練捨て給え  
踏絵ふんで踏んで少女が脱皮する  
致死量を見殺し悪魔が書く目盛り  
腹八分権利も八分丸く生き  
多数決白いカラスが喋りだす

岡山県 嘉 数 兆代賀

八月の雲がささやく敗けいくさ  
罪を犯した手でかしわ手を打っている  
ゆっくりと動き疲れたカタツムリ  
空気險悪とつぜん切り口上になる  
コピー氾濫わたしはおいとけほりになる

岡山市 川 端 柳 子

耳よりのお話総身の知慧で聞く  
すこやかな胃袋が視る白い皿  
人生案内いろはかるたで遊ぼうよ  
酒止めて無口な人をむき出しに  
子を想う親 親想う肩叩き

町田市 竹 内 紫 靖

緞帳のうしろはしやがむ御挨拶  
半白の陛下を天ちゃんとも言えず

学帽軍帽そしてスポーツ帽永し  
下級武家屋敷大事に世紀越す

母校あざやか手術後のコンタクト

竹原市

森井菁居

コーラスが好きな我が家の花畑

始発駅忘れて見てる地平線

群衆となるしか弱者すべが無い

ふるさとを訪うて童話を温める

参考にして年寄りへ逆らわず

高槻市

辻白溪子

退屈な車窓は富士も現われず

集合の合図へトイレから走り

支度する膳へ幹事がつきまとう

制服のひとりがちがう京訛り

おんなからチャンス作って嫌がられ

名古屋市

越村枯梢

そう言えば人待ち顔の月見草

四百四病全治しました棺の蓋

いまわの際に父の遺したありがとう

吸いすぎぬよう買いなされ喫みなされ

嫁不足街はギンギラギヤルの群

高知県

赤川菊野

敵に塩送ってからの策を練る

均等法男に子供生めません

暇つぶしするにもやはり金がいり

一人では淋しすぎます遠花火

真相を知ってどうなるものでなし

玉野市

小谷仙山

あきらめのつかぬ話に胃がいたむ

風当り強いそれだけ認められ

故郷の思い出ばかり溜めて老い

困ったこまったと夫が捨猫抱いて来る

話合いどちらも損はしたくない

岸和田市

植山武助

現役の頃に戻ると多弁なり

母の日へ父も便乗致します

医者からの電話へ妻がうろたえる

同病がこんなにもいる待合所

病院へ添いつ添われつ老夫婦

東大阪市

森下愛論

お点前のこころを見せる夏茶碗

そんな事知らぬ存ぜぬ二日酔

仁智信薄れて男軽くなり

愛情の鞭に馴染めぬ反抗期

いささかのおごり温泉の湯にのぼせ

八尾市

宮崎シマ子

夫の留守五勺の米の水加減

臍の緒が騒ぐ息子が恋をした

さくらんぼ娘が生んだ女の子  
返しに来た傘にあやめが添えてある  
散髪は三バーセントのびてから

神戸市 山口 美穂

美しく老いたい課題抱いている  
虹の橋渡って誤解と知りました  
枇杷熟れて過ぎし日の夢よみがえる  
贅沢な話やせ業がほしい  
テレビがひとり喋って老母の高軒

富山市 舟渡 杏花

人並みにわたしも使う胡麻すり器  
皿を割る度胸ないまま折り返す  
ペンペン草の屋根を動かぬ老いた父  
風と闘う自分の貌を子に遺す  
冷凍魚のまなこ渴いている旅路

松山市 谷 信夫

有難や友遠方より来て見舞  
万緑に老いも若きも包まれる  
犬抱いて自動車事故を眺めている  
よい眠り慈母観音の御胸に  
瘦せたおばさんと肥えたおばさん立ち話

羽曳野市 榎本 吐来

ボスにしておけば健気によく動き  
水割りを舐めて野心に遠くいる  
六十の靴音馬鹿になりきれぬ

鼻白むキッチン日本男児なり  
紫陽花の明日の色は読めぬまま

静岡市 渥美 弧秀

肥後守知らぬ鉛筆塾通い  
たまに行くTOKYOたまげることばかり  
テスト百点母の笑顔は孫のもの  
忍び寄る老い払いつつ歌に生き  
ソナタ弾く十指躍って満ちた朝

奈良県 田中 紀美代

あじさいに明日の夢聞く昼さがり  
傘させば童話に会える道がある  
男っぽい妻にしょっちゅう許される  
おしゃべりの妻が日暮れに又居ない  
あんまりに賞められ少々敵意抱く

米子市 小西 雄々

葬式の花輪ならべるにも序列  
手造りの豆腐が愛に浮いている  
止り木へ並んだ肩にある憩い  
銭別を度々もらい渡り鳥  
溝うめる言葉さがしに野を越える

米子市 石垣 花子

骨格も色艶も良い車椅子  
真相はばかしておいてやる意味  
桐の木よ一足お先に嫁ぎます  
父はもう鬼にはなれぬカゴメの輪

ヌカに釘打ちつづけてる土根性

米子市 青戸田鶴

あらためて父の背を見た里帰り

こだわりの一つを捨てて旅に出る

豆の蔓伸びて噂も古くなる

大根の花友だちがふえてくる

トンボ飛ぶ少し汚染になれたのか

米子市 田中亜弥

針の穴から噂が一つまた生まれ

夜明けの星が名残り惜しそな顔をする

元気ですか時々老母をかきまぜる

約束の川へお産に帰ります

肩書はないがカードの数はある

米子市 政岡日枝子

そろりそろりとたらい回しの風車

動かない風車のくせにでつかいぞ

ほんの少しの毒が薬に入れてある

褥り続ける仏の影に灯の影に

残された時間だ温い飯を盛る

米子市 寺沢みどり

喜びを空いっぱい産衣干す

陶まくら団扇の風がお似合いよ

手の内をカードの裏に気付かせぬ

果実酒のこころ安さへ気を許す

ダビングする約束かかえ眠れない

友を待つ笑い袋の口をあけ

味のある人に出逢った旅の町

一人の兄が旗の波間に消えました

うす味の嫁のタクトがありがたい

酔えなくてピエロになっている私

島根県 小砂白汀

労働を知らぬ金魚の拒食症

はがきにも切手貼れとは残酷な

耳鳴りがことさら過疎を深くする

クルマから見れば人間目ざわりな

葦切りの早口風の褪せぬ間に

島根県 堀江正朗

眼の高さバツと朝日のきた温み

盲人の宝の耳が聞き違え

失明を妻と埋めつつ道行きだ

指先へ魔法の彩で触れる花

夢積んで積んで盲人らしく生き

島根県 松本文子

出席と書いて迷いがまだ続く

目が痛むものばかりなり別れの日

青虫の意地美しい蝶になり

新しい身内に少し気を使い

只今とふるさとに言う山に言う

唐津市 田口虹汀

米子市 澤田千春

三桂は持ったが落ちぬ敵の城  
育つまで気長に待とう水中花  
了簡が狭く毎朝鏡拭く  
添い遂げてな お檣山の道険し  
放埒な夫へ闇夜の杜鵑

唐津市 浜本 ちよ

思い過ごしではなし地球熱帯化  
あきらめた出世有休フル使用  
朝夕に心を洗うお灯明  
不器用な母のセーター心着る  
セレモニ―最高のムード準備され

尼崎市 春城 武庫坊

赤い字の氷の旗が見付からぬ  
人間になりたい神が居るといふ  
神様の話聞こえぬ距離にいる

北京の乱

新中国の夢遠くなり学徒の死  
数世紀逆もどりした中国史

尼崎市 春城 年代

中国をおもひ（一句）

旅人として歩いた北京血塗られる  
仏ごころがそっぽ向いてるきのうきょう  
としよりの寝顔は見ないことにする  
花買いにゆく心弾んでならぬ日に  
嘘を許せぬそれもおごりかも知れぬ

永沢寺の花菖蒲園

夢二の絵をふと思ひ出すたたずまい  
ゆつたりとこころ沈める花の私語

長崎を訪う

キリシタンの祈りが染みている港  
思案してオランダ坂の石畳  
とある日へ思ひを寄せるネオンの灯

大阪市 江城 修史

昏れ残る父の日子らは遠く住む  
満ち足りた余生の人がこぼす愚痴  
明日知れぬ命を思う夜の底  
腎不全老父に重い荷がきしむ  
風化した絆がよぎる夜の底

大阪市 黒田 真砂

裏切りにすぐつけがくる回り椅子  
くされ縁づく夫婦にある歴史  
暗算が上手になった消費税  
言う事が胸につかえた更衣  
着るものに未だ好き嫌い老いの紅

大阪市 河井 庸佑

上に上あると知ったがもう退けず  
筋道を通せば傷つく人がいる  
愚痴言えば自分が負けたことになる  
石投げて味方の出方見るとする

尼崎市 奥山 美智子

これしきと無茶と勇氣をはき違え

大阪市

神夏磯 典子

ジャンプ傘心を決めるよう聞く

雑巾の強さは母の強さです

ひもじさに死ぬ国もあり世界地図

大物になるのを母はおそれてる

黄門のテレビ何事もない夜で

大阪市

古川 美津枝

再婚の気配さらさらはつとこう

坊さんに三べん出逢えた市場かこ

残忍で読むにたえない記事ふせる

金貸して袋だたきにあうお国

重箱の中でかしまし野党連

松江市

恒松 叮紅

燃えますよなどと女に脅かされ

自分史に一銭五厘の傷がある

中絶のテレビ見ている子なし妻

嫁きおくれが一人まじっている身内

ふるさとの誇り湖がある城がある

松江市

柳 楽鶴丸

欠落者です努力しています

煙草を喫って百まで生きてやる

頼りない身内が一番恐ろしい

五月病の原因と故郷宅急便

愛と恋の切符一生持つてます

松江市

舟木 与根一

限りなくひと恋しくてワンカップ

ボケ前兆笑い話が多くなり

隠居部屋つくる話なら急がねば

母の血を引く才能が父を抜き

代り映えせぬ内閣で梅雨に入り

旬のものの旬に恵まれ過疎に生き

毒草の匂えば匂うほど孤独

雑草の地味が野仏好きらしい

崩れるとわかっていても乗る砂場

太っても痩せてもはなれない悩み

夕映えがとてもきれいな外野席

才能があるふりをして肩がこる

捨て台詞さかなに酒を飲みなます

お月さま酒の相手を頼みます

じつくりと聞けば涙の出る話

言い訳を暗誦しながら月の道

外堀を埋めるつもりの手をにぎる

お祈りの向うにいつも陽がおちる

再会は素うどん食っただけでした

ホーホケキョいつも私は本音です

鳥取県

江原 とみお

鳥取県

田村 きみ子

般若心経上げてコーヒータイムです

人の世に生まれざんげの多かりき

小便小僧とっても好きな夏が来た

消費税入らぬタイヤキうまいこと

悪女かなちよこちよこ夫をいびつて

寝屋川市 江口 度

逆さにもつといたずらしくなる傘で

転動に魂胆のあるアデランス

まかしまかされびゅんびゅん回る夫婦ごま

年月を運ぶ役なら亀が良い

螢飛んで一息いれる磨崖仏

寝屋川市 稲葉 冬葉

地球儀を回し流血を見せつける

正眼に構えてもカミソリの刃だ

百八の煩悩を盛るわたしの器

無言電話にいい声をあげました

五尺切る母方の血が騒ぎ出す

寝屋川市 岸野 あやめ

母の日と父の日すらもいそがしい

在りし日を偲ぶ卯の花腐しかな

忍一字化石になってゆく女

懷手妥協を知らぬ父無口

子離れの意外に上手い女親

姫路市 人見 翠記

古里の新茶が届く友の無事

生活のリズムを乱す孫帰省

初咲きの花を供える日の心地

敬える人ありて自分を高くする

襖絵に和上の心なごむらん

箕面市 坪田 紅葉

絵の中の里の小川で芹をつむ

つばつて着たファッションにくたびれる

丁寧な挨拶をする下心

通院に明け暮れ用事ためたまま

ひとときを絵筆と遊ぶ利休梅

高石市 浅野 房子

バラ園に一人夕日と立っている

また工事文句たらたら迂回する

あちこちに絆作つて攻められる

一日のノルマに追われただ歩く

家出した猫に裏口開けてある

出雲市 吉岡 きみえ

お陽さまとともにわたしもフル回転

体調がいいので毎晩のんです

輪の中に入れるとさわぐ蛙の子

ひとりぼっちが好きで仲間になれぬ蝶

穏健で入れ歯がくがく鳴らしてる

出雲市 園山 多賀子

暗示にのりますわたし単細胞

一介の女風情がペンに病む

努力也人間本来無一物

さよならをすんなり言えぬ胡蝶<sup>しやが</sup>花の花  
紫陽花も六月の雨氣を許す

和歌山市

垂井千寿子

闘病の氣力は自分にもらいましょ

星の位置變つてミシン踏み止める

出る釘にならず緑の風の中

サングラスの心なんかは知れている

生命線ばんやりして来た日のひがみ

高槻市

河瀬芳子

後姿の肩の辺りにある縮図

報われずまた神様とすれ違ふ

矢のような帰心を抱いたまま老いる

好きだからとても無口になるのです

対岸の火事が飛び火をしてきたぞ

大和高田市

岸本豊平次

孫の守りついて走れぬ神経痛

しきたりと家風につくす玉の興

薄物を重ね着にして梅雨の冷え

タイガース勝っても負けても大見出し

筆順も読めればよいと無視される

宝塚市

丸山よし津

出棺へお世話になった人の数

ハガキ常備札状すぐにしたためる

賞状を飾り老舗の味落ちぬ

野良猫の意地なんぼでも殖えてやる  
寝ころんで人間を見るパンダ

有田市

松井かなめ

闘病いち年光陰矢の如し

手錠の指ダイヤが光っているテレビ

和やかな会話がもれてくる垣根

つんばなの咲く山惜別して嫁ぎ

愛の鞭などともわりがうるさ過ぎ

倉吉市

野中御前

マルクスに酔った日もある日記帖

あたたかい息をしている薬の家

北風に小便小僧とぼしてる

蘭の花蝶のくちづけまだしらず

樹齡百年森のなかでは中年よ

海南市

三宅保州

言い出せぬままホテルまで来てしまふ

分厚目の手紙を開ける胸騒ぎ

過去帳に百姓一揆伏せてある

合唱に不協和音のある国歌

付和雷同 他人の靴を履いている

松原市

小池しげお

洋館の隣を睨む鬼瓦

割箸を割ってちよつぱり惚れている

クリームがじわつととけたそんな恋

花道の方へは行かぬ父の靴

まじないを電話で母に聞いてみる

羽曳野市 吉川 寿美

入退院馴れた手順がもの哀し

残り火を燃やすものありベン先の

断ち難い過去がつまった小抽斗

お先棒担いでいるのはチンドン屋

姪 事故死

哀しみて曲ってしまう棺の釘

竹原市 岩本 笑子

もどり梅雨空梅雨人生ままならぬ

知りたがり屋の双生児にさっさと服を着せ

もうグチも慣れてきました手のギブス

幸福なふりして夫のシャツを買う

同姓同名きつと貴方もいい人よ

和歌山市 内芝 登志代

嬉しい時哀しいときに買う着物

わが城で耳かき爪切りみな手元

遺産などなくて喪服の座がなごむ

平和だなあ瘦せたい人が多過ぎる

和歌山市 牛尾 緑良

素通りが出来るやさしい風になる

政治生命そんな正義が見あたらぬ

父の背ももう上げ底になっている

捨てたくはないけど過疎という静寂

和歌山市 桜井 千秀

句読点一つ一つの息づかい

やり切れぬ下手な芝居の後始末

天秤棒で売りに来たので買いいしめる

いっさいがっさい処分したなら広い部屋

和歌山市 後藤 正子

乱筆の自問つづいて微熱あり

思いきるようにたまごを割っている

さまざまな景色おんなの眼に映す

風の彩さがして坂の途中まで

和歌山市 福井 桂香

胃に残るものみな青し柿若葉

アジアンタム揺れて娘の洗い髪

青春は今 熱き涙のある限り

霧ながれしはし未来へ立ちすくむ

和歌山市 神平 狂虎

風の一生僕の一生青芒

遠い昔に還ろう雨の中駆けて

海岸通りに愛のかたちの雨が降る

竹落葉はらはら琵琶は胸で鳴る

岸和田市 原 さよ子

子をあやす息子は父の顔になり

お日さまを見れば洗濯したい母

馬鈴薯の宅急便は北の友

松山の旅館で

湯殿にも子規の句掲げてある風情

和歌山市 山川 克子

喋らねばよかった一言抱いて酒  
棒に振るつもりで参加した結果  
炎え上る恋に制限速度など  
周波数乱れて心見透かされ

和歌山市 青枝 鉄治

田植歌聞けない苗にある不満  
古里の川は校歌のまま流れ  
和解酒しんそこ美味いとは言えず  
平凡な市民でいいさ踊りの輪

唐津市 仁部 四郎

某月某日リズム狂わぬ救急車  
遠吠えの犬も明日の計を持ち  
名案を考えている三列め  
明朗なお人と嘘を封じられ

唐津市 久保 正敏

五月雨に包みが重い陶器市  
密室でタライ回しの首捜す  
安全パイ握り喚問席に立つ  
責任を終えて気儘なりール竿

唐津市 浜本 義美

次の次の次まで読んで首を替え  
定年の汗が売れない職探し  
今日を生き明日へつなぐ薬飲む  
退けどきのナース口紅濃ゆくひき

唐津市 山口 高明

盆過ぎの寺から麻雀パイの音  
胸を打つ話は街の隅にある  
断崖の上で手を取り合って泣き  
マンションという鳥籠に居るわたし

唐津市 筒井 朴竜

初孫が抱ける爺婆上京す  
孫泣けば直ぐ抱く婆の癖を諭し  
爺の腕に柔孫貰ろて五月晴れ  
強い子になれと武者絵や鯉のぼり

大阪市 北 勝美

梅 辣韭 今年も漬けて喜寿の幸  
金余りニュースと年金裏はらに  
同窓会揃った顔はみな羅漢  
父の日の父は無い髭剃っている

大阪市 藤田 頂留子

真言を上げて頂く慈悲一つ  
本命はおねだりだった耳掃除  
電話ないおかげでローンもありません  
良い人も結構居てはる投書欄

大阪市 吐田 公一

失意あり有頂天あり影法師  
院長が好物食べやという怖さ  
かあちゃんの天気気になる山男  
相談へ母の結論揺がない

大阪市 大塚節子

紫陽花に自分の心を見すかされ  
さやさやと現世は知らず水芭蕉  
花吹雪胸の薔は秘めたまま  
まつり寿司今年は口が二人増え

大阪市 井上白峰

背信の部下に貰った処方箋  
酸欠の部屋で相談まともらず  
言い出した口へ突き刺す白羽の矢  
他人ごと責任の無いアドバイス

大阪市 渡部さと美

ドライブインはつと幌馬車駅に似る  
男やさし酸味の消えた夏みかん  
青梅は初夏の宝石掌にのせて  
ラッキョウの白さは梅雨雲の雫

大阪市 町田達子

逃げ道が欲しい紫陽花雨を待つ  
嬌声がシルバースhirtではしゃいでる  
久びさの息子若さを置いて去に  
爽やかな余韻レモンの香が揺れる

大阪市 板東倫子

八割はオバタリアンの演歌ショー  
千円の時計も同じ時刻指す  
停退の年齢が政界では若手  
日本軍より非道いと中国人が泣く

島根県 西村早苗

いらだちを静めてくれたのはコケシ  
胸がどきどき言うことを忘れさせ  
あぜ道を歩いて初夏の大神楽  
ここで笑うと冗談となる言葉

島根県 堀江芳子

紫蘇の香につられて飽きぬ冷奴  
お出かけの靴は光った音をたて  
探し物追う夫の指追うている  
本当に知りたい事に蓋をする

島根県 榊原秀子

落し穴はまる私にあきれる  
ライバルに何故か情けをあげるひと  
田植唄うつぎは今が真つ盛り  
皿洗い情性でやっているような

島根県 錦織文子

いつわりを聞く耳持たぬ若葉風  
吟会へ憂さを忘れた喉がある  
薬屋根もしつぽりぬれている平和  
真実の味方は私の影法師

島根県 藤原鈴江

未だ未だ命が惜しいカテーテル  
何となくほのぼのとして来た家の風  
いつからか恩師の姿住みつけり  
たわむれにその手触れるなバラの花

島根県 松本 はるの

神様のいたずらだった誕生日

そう言うが終日子守してごらん

汗だけで眼鏡はくもったわけでない

梅雨冷えの心やすらぐ五色豆

島根県 北川 民子

病院の受付白百合など置くでない

草いきれ脇役なりに生きてます

昼も聴くわたしの里の時鳥

ぐつたりと充電してます高枕

岸和田市 福浦 勝晴

年金という太いめの命綱

謙譲の美德発揮で立ち通し

百までは生きにや嘘だよふざけるな

失業のあしたへ続く海の青

岸和田市 清野 こう

お役には立たぬが数の中にいる

子に涙見せたくなくて顔洗う

はめられた花に取り出す花ばさみ

父の日の相談している娘の電話

岸和田市 島崎 富志子

茶柱を今日の私は信じたい

上出来の造花へせて匂いなど

特選ツアー老人ばかりの顔がある

泣けるだけ泣いて恩師の墓を去る

岸和田市 古野 ひで

明日から心機一転髪洗う

深呼吸してから受ける重い役

ささやかな贅沢を買うさくらんぼ

目に涙溜めてる母には勝てませぬ

米子市 菅井 とも子

この顔が役立つならば貸しましょう

飛ぶまでの苦労知ってる竹トンボ

ベッドから見れば息子は頼母しい

退院が出来ぬ夫の誕生日

米子市 光井 玲子

ライラックの香りに想う遠い人

ポシェットの中も知ってる友がいる

子に残す分相應の兎小屋

五人目の孫も又もや桃太郎

米子市 茂理 高代

腹話術覚えて愚痴は呑み込める

白兎煽てられれば軽くのる

ワッハッハと小指の話出るおとし

キリキリと縄が回って生き難し

米子市 小村 てい子

朝晩の髪に情けの要るいくさ

生き甲斐の視野にこぼれる雪月花

黒一色でシック獲得したつもり

一長一短浮世の世辞よつねならむ

今治市 越智 一水

内職へせめてみどりの窓を開け

さわやかな風がオシャレに吹いてくれ

太陽と遊ぼう魚になってみる

水飲んでひろしまの日に水を知る

西条市 片上 明水

植付けが済むと四角に村がなる

ふるさとは地蔵の数が増えただけ

田に水が入ると村長旅に出る

救急車呼ぶダイヤルは囲まれる

高槻市 川島 諷云児

ポケベルに今日のノルマを急かされる

年金で三度のメシが食える幸

美しい嘘で固めてある祝辞

喝采は無いが続ける猿芝居

大田市 藤田 軒太楼

比較にはならぬと比較されていた

年金を余生のかてに日々是好日

生甲斐は川柳作句孫の守り

賞め言葉連発相手を煙に巻き

羽咋市 三宅 ろ亭

三猿主義はどうかなの足りず

明治から平成までの埋木よ

そっと積む善ならそっとそっとおく

せっぱ詰ると醜態演ずるは人

鳥取市 両川 洋々

影武者の秘書を大臣飼ひ慣らす

平和説く鎧現けば核が見え

吞めば泣く生涯でした亡父を恋う

デマ一つ信じる鬼を胸に飼う

宇部市 平田 実男

印刷の札状金釘流に負け

仕合せは座れば孫が膝へ来る

飼犬に噛まれ傷より痛む胸

七人の敵より恐いお母ちゃん

仙台市 川村 映輝

健康は何にも勝る化粧法

禁煙は何時でもできますまだ止めず

新聞のデタラメ珊瑚礁に見る

審議する能力ないから吠えるだけ

大阪府 坂口 公子

笑うけど放り出せない趣味いくつ

診察のある日は素顔送迎車

指定席誇り高きと言うとれず

背なの線牽制し合っている夫婦

神戸市 仲 どんたく

紫陽花の変化を誘う糸の雨

人形が箱の狭さを主張する

お茶漬の味で過ごしている夫婦

足並みを揃えてむかで逃げてゆき

西宮市 奥田みつ子

老鷲に熊野古道を行く歩幅  
田満な家庭のバラがよく匂う  
聖書開くと空気が少し澄んでくる  
完全主義無駄な努力が多すぎる

岡山市 井上柳五郎

雑草の命奪う酬いか肩が凝り  
網戸あけ五月蠅い蠅を逃す父  
プラカード稚拙の文字にある怒り  
政財官きつい汚染を江副菌

岡山市 花田たけ志

せん定に齡を忘れて高あがり  
孫なでて敵は本能寺におわす  
琴線に触れると心がこだまする  
疑惑劇主役が出ずに幕になり

岡山市 小林妻子

またしても亡父の小言のようになり  
昼めしは地下足袋のまま父の型  
癌だったそうかとそっけない他人  
金がいる一寸つんばになっておく

岡山市 岩道博友

舌足らず冷たい冷たい話にす  
年金を比べ合ってる立ち話  
一仕事手伝いましょうと父の日に  
老人へ薬は食事の膳に添え

岡山市 千原理瑛

ちっぽけな位置だが母は耐えている  
ロボットのような亭主で妻ピエロ  
開き直って雨に討たれている花よ  
妬心などかけらも無くて女です

岡山市 矢内寿恵子

裁かれる愛よカラスが青くなる  
女をつづる私を綴る一行詩  
性凝りも無くヒマワリの夏の刑  
かな文字に情が埋まる誤字当字

岡山市 池田半仙

感情に振り回されている誤解  
愚痴言わぬ茶の間明るい笑い声  
南天の箸で無病を期待する  
田植機が朝星見るを忘れさせ

鳥取市 森田熊生

小説のようにきっぱりやめられず  
エンピツで書くと自由に話せそう  
大の字で眠るふとんが干してある  
ランドセルと土曜日の靴よく弾む

鳥取市 林露杖

外孫に妻を奪られた厨ごと  
単車駆る七十二歳風は夏  
溜息をついて唸って美術展  
楽焼の少し歪みもある温み

鳥取県 土橋 はるお

ライバルが外車のボロに乗って来た

隣の花をこっそり剪った事もある

後家さんが歩けないほど酔っている

友達の古手と見合いさせられる

鳥取県 谷口 次男

金はなく地位も低いが親友だ

花信じ老母は花に話しかけ

黒い腹輪切りにしてもつまらない

降るほどの哀惜浴びて黄泉の旅

鳥取県 羽津川 公乃

家相など言っても居れぬ兔小屋

雪月花わたしは酔ってばかり居る

飛び越えた出世コースにあった毘

湧き水が豊富この村捨てられぬ

熊本市 永田 俊子

人生を変えた小骨のある科白

なにげない言葉からもらった道しるべ

哲学者の顔して魔鶏売られゆく

米にまつわる情け大事に米洗う

静岡市 永倉 僕川

惜しくない命と言えば嘘になる

悪かった男の意地が言わせない

何もなくとも妻が居る宝物

貸した金祖母は忘れぬ記憶力

静岡市 蘭田 模沓

日本を箱庭に見た空の旅

旅で買う土産の地酒空にする

焼鳥屋の棟に雀が巣をつくる

汗だくに分厚い嫁の布団着く

倉吉市 渡辺 独歩

公認を外され寝刃を研いでいる

家伝薬ときにお医者も買いくる

君だけと言う歯車の噛む相手

日の丸の旗を踏絵にせぬように

倉吉市 渡辺 菩句

待っていては来るはずがない福の神

女三四郎から手ほどきを受けている

あの鳥たち方言で鳴いておる

ポチの家僕なら青い屋根にする

出雲市 久谷 まこと

口実も効き目がうすい三回目

世間の目どうせ冷たい色メガネ

善人と言われ仮面の幾山河

星祭り親子の対話筒抜けに

出雲市 河原 恵美子

一徹が花のドラマに教えられ

マニキュアを塗り替えてみるため息と

ななめには絶対渡らぬ毛虫ども

コットンに着がえた君の強かさ

和泉市 西岡洛醉

才能はそこまであととはぼろが出る

握る手に汗も湧かないお歳です

いい音で鍵はきつちり妥協する

通勤車女史という顔眠りこけ

奈良市 天正千梢

他人の霊呼んで千円とるイタコ

金の指輪を両手にはめて霊を呼び

津軽十萬石しだれ桜は今盛り

盲いしイタコ如何なる行を積み来しや

八尾市 鷺見章

外面如菩薩未だ見ぬものに妻の夜叉

キャッチボール受難の鉢を置いて消え

ベランダの風に娘の柔道着

これしきの雨は走らぬランドセル

寝屋川市 宮尾 あいき

狂わしく花恋う蝶よ梅雨に入る

かりの命誇らかに咲く壺のバラ

裏庭でひっそり咲いて散ったバラ

七十八まだまだすてたものでなし

姫路市 丁坪 サワ子

裏金の方が資産の議員さん

コツコツの意欲失くなる億ブーム

善人の仮面が一倍疲れさせ

七夕の笹へロマン吊るした昔

寝屋川市 柴田英壬子

あのころにその優しさが欲しかった

戸をびっしょんずっころばしも新茶好き

幸薄い姉弟が会う三河駅

お遍路の旅までとっておく一円貨

柳井市 弘津柳慶

謄写版の匂いも過去のものとなり

子も孫も揃って権利主張する

責任は取るが代議士やめません

記憶には御座いませんと白々し

大東市 土岐トク子

山中の湖底に眠る日月潭

緑ヶ丘校舎変らず一高女

往年のきね唄なくて高砂族

衛兵のロボットのように身じろかず

東大阪市 崎山美子

仲間にもなれず独りも生きられず

割烹着の母が素敵にみえる朝

おとなりが素敵に見える日の渴き

天地無用心ずくしの荷がとどく

高知市 北川竹萌

樺太は見えず宗谷の風的大海

幸福の礼文島話に深い霧

浴衣では出られずホテル寝るとする

札幌の一期一会の柳友だ

藤井寺市 福元みのる

羽曳野市 佐野白水

団交に勝つには堅い椅子が良い  
子ら皆が勝手に喋り母無言

金の釜で沸かしても水は水  
余部の菩薩の像へ春の雨  
(足立美術館)  
(余部鉄橋下)

校長が去ると一気に喋り出す

淋しさに浦島ここで箱を開け  
春かすむ橋立ててもよし股のぞき  
(浦島神社)  
(成相山傘松公園)

返無きは諾と認むとあり慌て

吹田市 栗谷春子

それぞれに気儘が見えるこの暑さ

笑顔のまんま言いたいことをいいなはる  
輝きを今ローソクの独り言

そばつゆの秘訣いまだに間違える

たんぼの種は信じて翔んでゆく  
ナイーブな心は秘めてオバタリアン

ゴミ集めの後から蝶蝶白く飛ぶ

今日は敵昨日は味方嫁しゅうと

見覚えの鳩が窓から見舞客

禁煙を停煙にして崩れそう  
どろんこに住んでも蓮の花である

茨木市 井上森生

広島県 藤解静風

金色のバツジ デカ過ぎ光り過ぎ

グルメとて異国情緒とロマンスと

薫風に佳き日誓いの夢のせて (祝結婚)

定退へ一息ついた手弁当

底冷えに播種の粃まで出びかえる

亡祖母の仕種思い浮べて麦を打つ

新調の服着て顔を上げられず

和歌山県 天満三千代

黒石市 相馬一花

巣作りのつばめの根気見せられる

逆立ちが恥ずかしくなる適齢期  
傷口を共になめ合う夫婦仲

叱られて居てもお腹空いてくる

現役で大根一本買いに行く

ホームラン虹を眺める顔になる

場違いな虹が立ってる別れ際

富田林市 松本今日子

守口市 羽原静歩

栗良平氏の「一杯のかけそば」を読んで (二句)

どん底のかけそば人間とりもどし  
坊さんの説く性善説は隙だらけ

四十九日 仏もそろそろ呆けはじめ

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

河内長野市 井上喜醉

履歴書へ新人類の丸い文字  
ヘルメット脱げばミラーで髪をとく  
思い出の渚で恋の星が降る

七尾市 松 高 秀 峰

黙ってる父が一番嬉しそう  
煮つまった頃に會長顔を出す  
夫婦でも本音は少しだけ残す

加賀市 細呂木 魯 木

大穴は狙わず地味に凡夫生き  
親に似て成りもせぬ高望み  
背の低い劣等感も口八丁

諫早市 原田メイシユン

核心に触れられ総理ばやけてる  
米審にいためられても粃を蒔き  
隊長も杖にすがって戦友会

出雲市 板 垣 夢 酔

缶詰の猫でネズミも大手振る  
釣り糸に原潜かかる白昼夢  
ポケットベル柩へ入れてまで酷使

出雲市 石 倉 芙 佐 子

あの日から沈んだまんまの渡し船  
背鰭まで冷えきっている片想い  
浮き草に縋るしかないあめんぼう

出雲市 小 玉 満 江

抜け道を猫よ教えてくれ給え

ふるりの母はだんだん小さくなる  
身内にもおしやべり雀が居て困る

出雲市 小白金 房 子

青虫も過去はかたらず蝶で舞う  
田園を愛す男の腰手拭  
還暦は野良着姿で撮るカメラ

大阪市 中 西 兼 治 郎

贈りもの受けて汚れた金バッジ  
すぐ本音言うあの人はお人好し  
へりコプター空かき回すように飛び

大阪市 富 岡 温 子

気掛りな受話器にのこる娘の台詞  
大げさに啖呵を切ったダイエツト  
茶柱が今日の予定を変えさせる

大阪市 北 山 悟 郎

戦争は人生の道草かも知れず  
一徹が妻の小手先に操られ  
反省に手足もがれて動けない

大阪市 宮 下 と し

名工に問えばポツリと来る返事  
町工場火花で伝票読んでいる  
寝たきりに置きかえてみる自分自身

大阪市 塩 田 新 一 郎

自民党の皆様毒消しやいらなかね  
北国に春を残して走り梅雨

土を出てなにぬねのーとゆく蚯蚓

大阪市

山田 妙子

免許取り夫が血圧上げている

試運転末っ子だけが横に乗る

トムソーヤ竹やぶまでは気がつかず

大阪市

横山 為子

お似合いとお世辞に言うた後遺症

歩こう会息もはずんで河川敷

町内に叩かれ役の杭がある

大阪市

神保 拓生

信玄の秘湯にギヤルの顔浮かぶ

お遊びのゲートボールでもめてます

ナイターを安楽椅子で観る余生

和歌山市

細川 稚代

舞いもどる葉書一円足りません

矢車草堪能するほど咲いてくれ

念押せば医者是不快な顔をする

西宮市

瀬尾 六郎太

窓々に屋根より低い鯉幟

釣り談義眼の輝きで腕を知り

甲子園春夏があつて季節感

富田林市

片岡 智恵子

せわしさは眼鏡掛けたりはずしたり

一杯のかけそば渡る虹の彩

風見鶏 風と遊んでばかりいる

無になって子供のくにへ帰りたい

両方がよいので返事困ってる

小細工にあきて自然にあこがれる

弘前市

真喜内 實

雨だれの音にも歌の丸太小屋

土曜日のゴキブリ様も酒好きか

ストレスを高い軒にして放つ

十和田市

斉藤 昴

少し笑つてとシャッター押して行き

紙コップのコーヒー出され賛成論

人間が好きで教師をしています

五所川原市

加藤 彩人

妻逝つた日からほとけの瞳にひかれ

大物の発言雑魚は啞となる

雑兵の家系手のたこ遺伝する

和歌山県

寺田 裕美

モルモットやつと外泊ゆるされる

待っている猫へ骨までしゃぶれない

しくじった足に汚名はきせられぬ

姫路市

大原 葉香

マンションの一階耐えることばかり

ひと時の満腹に酔う鯉のぼり

お早うの笑顔でまらい朝が明け

姫路市

中塚 遊峰

新開 千代女

散る花を惜しむ思いのまわり道

怪我をして五指それぞれの有難さ

「落人」に似ぬ華やかさ小唄会

豊中市 上田 登志実

ビルラッシュ嘗ての我が家呑みこまれ

悟つてゐるつもりがまたも迷い出す

梅雨しとど妻はいとわず趣味の会

豊中市 辻川 慶子

出席の丸を大きく夏の宴

菖蒲園思い出ひとつ甦る

イミテーション私に似合うくすり指

鳥取県 清水 一保

カロリーは問うまい愛を喰べて居る

恐妻ということにして飼育する

長距離のランナーにやる年金だ

鳥取県 さえき やえ

へそくりでにんまり咲かす花がある

花しようぶ じさまばさまに会いとなる

生涯の友には金を貸しませぬ

岡山県 二宗 吟平

犬が吠え鮮魚の車通りぬけ

吸いがらの置き場常客きめている

双葉より芳し隣の児の笑顔

岡山県 山本 玉恵

美しい嘘にはほほ笑みあげましょう

うれし涙の案じて居るボトル

田植づかれの背なへ一声ほととぎす

寝屋川市 平松 かすみ

八月の雲よ昔を語ろうよ

野球と相撲情熱かけて名を広め

兄弟が逢えば基盤が持ち出され

寝屋川市 堀江 光子

沿線のみな似たような街となり

同じ名にふと思ひ出す遠い人

あじさいについ誘われて袋路地

羽曳野市 田中 隆二

散歩して一円玉を拾ってくる

千切絵の島に忘れた母の鈴

そして夏 春に別れた人想う

松原市 北野 久子

蜘蛛膜下出血で手術して

健康になりたい今日もリハビリー

意識ない月日をたどる回復期

髪の毛が伸びたら逢いたい人がある

島根県 石田 清泉

持ち上げてまた落とされてドンになり

波静か人間不信のシジミ貝

四捨五入から遁れて帰った一円貨

広島県 田村 新造

金魚掬う二の腕まぶし夜店の灯

糸切れた風呂酒屋で引っかかり  
ふるさとの土は裸足によくなじみ

箕面市 椎江清芳

溜息と愚痴も詰め込むのし袋

金運はよいと易者の虫眼鏡

へそくりを亭主ちよこちよこ小出にする

堺市 柿花紀美女

一日の老いのリズムで日が暮れる

ふる里の駅に知り人誰もいず

助走いらぬ子へ嬉しくも淋しくも

吹田市 茂見よ志子

齡聞いて負けたと思う顔の艶

門口で神説く奉仕しつこすぎ

すぎた遠慮に水くさいなと思う

竹原市 信本博子

愛の毬歯止めの効かぬ弾みもつ

バイブルを開いたままに人を恋う

赤風船優しい風に身を任す

境港市 細木歳栄

ひまわりの強さが欲しいひなげしよ

慰めの言葉をもらう空が晴れ

優しさか意気地がないのかためらいか

米子市 白根ふみ

慕うてる人の仕草になってくる

川の名をたどると身内ふえてくる

おにぎりは竹の子皮が大好きだ

一口も呑めない梅酒念入りに

エプロンを付けて落ち着き取り戻す

ひやくねん生きてやります女の意地で

和歌山市 田中輝子

父の力走だまって作るお弁当

赤ん坊が産まれてからというものは

切り札はあるが情けも持っている

静岡市 安本晃授

何もかもしゃべった後の晒し首

熟年のほころびを縫う妻の針

ひと時を善人にされ肩が凝る

川西市 松本ただし

長生きのひとつに辛抱入れておく

ドングリを比べる尺度持つてない

胃を剪れと言われてハイが出てこない

東京都 吉川一郎

人間も山河も汚染して平和

病状を重くしていた薬づけ

言い分がたとあるから貝になる

倉敷市 田辺灸六

人生航路風で平和な妻の舵

ちよっとだけ言ったつもりが勇み足

岸和田市 芳地狸村

裏庭が隣の猫の散歩道

悪役の素顔はきつと三枚目

和泉市 岡 井 やすお  
深々と頭を下げて舌を出し  
近いから歩きなはれとタクシーに言われ

和歌山市 山 田 高 夫  
空徳利倒す男の負けいくさ  
一病を宥めすかせる梅雨の鬱

河内長野市 植 村 喜 代  
なるようになれまだ甘い事考える  
その時は上の空にて父思ふ

米子市 金 山 夕 子  
赤を着る元気できて飛べそうだ  
ふるさとの童話に妻はよみがえる

大阪府 松 永 すすむ  
赴任地の夫の部屋がどうも変  
風鈴をシャワーのあとの贅ときく

茨木市 堀 良 江  
まんが読みふける男のネックレス  
言わなきやよかったほろ苦いコーヒー

鳥取県 津 村 八重子  
カタカナの文字にドラマの浮きしずみ  
岬の灯亡父の思い出消さぬまま

島根県 小田川 智重子  
消し忘れと思ったガスの点け忘れ  
ゴミ置き場までの運動しています

奈良県 宮 川 ことじ  
赴任地へ土旺夫人の足軽く

挨拶は祖先に逢った朝仏

豊中市 吉 田 あずき  
情熱に燃える瞳はコンタクト  
窓明けて音も包みも人の世や

豊中市 一 瀬 福 一  
子の宿題は父の無学を攻めてくる  
憎い人一番好きな人のくせ

守口市 森 川 まさお  
剽軽な顔になりだす鬼瓦  
筈の尻の張ってるのを選び

守口市 結 城 君 子  
さみどりの樹々を渡った風の音  
隣国の礎くずる音を聞く

弘前市 小 寺 花 峯  
翔んでいた女の着地に水溜り  
太陽に向って素顔取り戻す

鳥取県 乾 喜与志  
空気の中に生きている死んでいる  
菖蒲湯にひたり吾が家の風雲児

岡山県 松 本 元 江  
一日を色鮮やかに咲くあやめ  
はかなさを言うては夢を追いつづけ

岡山県 直 原 七面山  
手を振って師を送り  
杖を手に故里を訪い

# 自選集

正本水客

米澤 暁明

8階のその上にある大浴場  
湯疲れへつつじの色と鯉の色  
たこ会席つぎつぎ章魚が楽しませ  
砂丘遠望ラッキョの花を話題にし  
湖の伝説を聞いている鰻

工藤 甲吉

月 原 宵明

もやもやが残る東京・永田町  
どろどろの世の中にいて溺れかけ  
フルムーンの時代を情けなくひとり  
蟻歩く毀誉褒貶を考えず  
自画自賛誰も共鳴してくれず

有働 芳仙

山 内 静 水

父の日へ写真の父を描いて出す  
肩書の比重に迷うイロハ順  
老いらくの恋カサカサの手を重ね  
人生観ここらで変えてみたらどうや  
平成元年内憂外患揺れ動き

テレビ体操何で男は出さないの  
生き甲斐はまだ外泊を許される  
山を仰ぐときさやくことが多くある  
見舞客の方がやせて弱そうなの  
雀びよんぴよん病室の窓たのしませ  
そのかみの部下銀髪で現われる  
栄転の椅子は軋んではかりいる  
ラチもない冥想ばかり春の宵  
コンパクト女の戦意たたみこむ  
ひよつとこの面をはずして旅終る  
殊更に父の日などどこそばゆし  
師と仰ぎすこしエッチをおっしゃって  
一人抜き二人抜きこれから登り坂  
忙し忙しいんぐりまんぐりまだ動け  
口にごそ出さんが内のおかみさん

野村太茂津

八月の天にけじめを食わされる  
八月のけじめは足して二で割らぬ  
八月の雲は流れて甦る  
灼きついた面影夢できつと逢う  
中国の東北訛り忘れない

大矢十郎

北京広場ああ同胞の弾で死に  
夫婦して来た用件が眠らせず  
定年後の自由は起きたい時に起き  
造幣局に意地あり六十四年貨  
大臣の本音明日はどうあろうと

水粉千翁

地の涯ての海のはじまる島を呼び  
花の色こころ真白く語りかけ  
耳打ちへこっくり午後のはたと子と  
そよ風にうなずいて咲くとき愛し  
断腸の思い失うものなきや

藤井明朗

米寿までこころはもえる句は燃える  
男なら艶ばなしぐらいあつてよか  
母の味上手に嫁の味にする  
多難なおつづく宇野丸浪荒し  
自分だけ幸せ祈り落ちぶれる

本田恵二郎

錦鯉自慢の柄を競い合い  
手も足も舞うが首だけまわらない  
ボクちゃんのお帰り尻尾がちぎれそう  
大都会に迷え迷えと囁かれ  
言葉尻ゆうゆうせまらずつかまえる

小出智子

よく解る雀に餌をやる気持  
空っぽの箱ならたんと持っている  
おばあちゃんの顔がほころぶプチマト  
せんたくが済んだと洗濯機が知らす  
なにはともあれ仏壇に灯をともし

小林由多香

二の舞をさせない撤消しておく  
反省の涙は二度とこぼさない  
お祝いの花に妬みの香が匂う  
禁煙をふと父の日に考える  
神様に聞いてもらえらるまで拝む

八木千代

肺二つ今日のいのちは今日に吐く  
昨日のことで今日いちにちを走りまわる  
今日を逃がせば鳴らずにしまう今日の笛  
握りしめねば今日のものなど逃げてゆく  
てのひらをどうにか守る今日が済む

長崎五島を訪れる

黒川 紫香

旅行図の通り福江の島が浮く  
ちやんづけで呼ぶ長崎の女と会う  
十五年ぶり再会の手を握る  
殉教の島で平和な陽を仰ぐ  
とりたてのウニとアワビでもてなされ

五島へ行く

藤村 女

小さな島小さな哀しみをもてる  
哀しみを沈めて海の四季の色  
聖書は苦手人間に完成はない  
藪入という日本語がなつかしい  
影二つ月の雫に濡れている

児島与呂志

気心の知れてる酒をつぎこぼし  
痛む足庇うと満州国がある  
君の見たままの暮しでいる夫婦  
あの人もこの人もいるページ繰る  
また背のびする噂が気にかかり

金井 文秋

借地権などは知らないつばめの巢  
利子引上げもたいした事はない貯金  
元氣してます医者とは縁を切れんけど  
死なんでもよいのと言う他人様  
ファッションに凝っているのは男の子

二十五回忌記念

## 水府忌句会 (番傘本社8月句会)

とき 平成元年8月6日(日) 12時開場  
ところ 四天王寺本坊

大阪市天王寺区四天王寺1丁目11の18  
TEL 06(771)0066 (代)

ただし、JR天王寺、または地下鉄天王寺から  
北200メートル

あいさつ

遺族代表

岸本 吟一

宿題

「手帳」

加藤翠谷選

「紳士」

森中恵美子選

「人間」

岩井三窓選

「時事雑詠」

広瀬反省選

「頃」

橘高薫風選

「広告」

磯野いさむ選

各題

2句・しめ切り13時30分

席題

なし・投句拝辞

会費

500円

。昼食は駅周辺ですませてご出席下さい。  
。四天王寺へ参拝・拝観ご希望の方は早目にお越し下さい。

番傘川柳本社

TEL 06(361)2455

川柳太平記

(135)

川柳の群像

本田 溪花坊

東野 大八

感謝状

本田溪花坊殿

貴下ハ永年ニ亘リ川柳ニ関スル古書珍籍ノ蒐集並ニソノ研究ニ没頭サレ愛蔵千余卷ニ及ビ種類ノ多様整理ノ完璧貴下ノ右ニ出ル者ナク然モ柳多留百六十七篇ノ発見ヲ始メ正系本ノ確立等斯道ニ貢献スルトコロ多大洵ニ柳界ノ至宝ト謂フベシ 本日茲ニ第一回川柳祭ヲ執リ行フニ当リソノ功績ヲ讃ヘ深甚ナル感謝ノ意ヲ表ス

昭和十八年五月五日

日本川柳協会大阪支部長

岸本水府 印

「溪花坊は明治二十三年十月大阪生れ。本名本田敬之助。その名に因んでの柳名である。

家は商家であつたらしいが、川柳への関心は十五、六歳の頃、小島六厘坊が選者をしてゐる大阪新報柳壇にはじまる。六厘坊主宰の『葉柳』田野村朴念仁主宰の『滑稽文学』などを読み、古川柳文献に注目、初代川柳関連の古文獻蒐集に執着を深め、一種の古川柳文獻渉獵マニアになつた（字和川木耳書簡）。

大正十三年一月、溪花坊は柳誌『大大阪』を発刊。古川柳研究を中心にした川柳誌を手がけた。同誌は六十二冊を出し昭和のはじめに停刊し、季刊誌『川柳国』を数冊手がけている。『大大阪』誌のなかには竹久夢二の色摺木版画を表紙に用いたもの十冊、カットに使つたものの六冊があり、これらは夢二展のたびに出品され、広く話題を呼んだ。

『大大阪』誌には、福田山雨楼、井上万三が同人格でいた。山雨楼の柳名は溪花坊が名づけ親である。この誌が出た年、麻生路郎は『川柳雑誌』を創刊しており、しばらくして山雨楼は川雑に移り、路郎の片腕と目されるまでに活躍する。刀三も川雑同人となつたが、後に河野春三、林田馬行らが興した川柳使命会の新川柳畑でよく知られている。

溪花坊といえ、柳多留百六十七篇を昭和二年に発見したことで柳界にきこえているが、彼が熱心に寄稿していた森鷗外主宰の『三味線草』に「紙魚の余話」（昭14）と題してつぎのように書いている。

「川柳と狂句の古書を専念蒐集したのは、私が個人誌『大大阪』を出していた頃が最も絶頂期といえる。ちょうど大正から昭和の初年頃である。関東大震災の翌春、神田の村口書店で俳風柳多留を四十三冊発見購入したので柳書を買った最初である。（中略）

その頃の大物として、飛騨高山上木家所蔵の俳風柳多留初篇から百六十七篇までの全揃を高山で入手、その帰途、中央堂店主と偶然にも同じ列車に乗り合わせ、喜び合った一幕は、彼の古書談義の一つ話になっている」。

溪花坊は浪華柳多留の開祖素行堂板倉松鱈

に強い関心をもち、この開祖が飛騨高山の出身で「松鱸翁、狂句末流に席を連ねたりといえど川柳正系を尊重し、多くの文献著述を後世に遺した功績は川柳史上没するわけにはいかない」とあって、この浪華川柳の大先輩の地をたずねた折、図らずも柳多留百六十七篇発見という大金の射止めたわけである。(注)筆者は問題の百六十七篇は、松鱸の戯作文献ではないかと内心未だに疑義を抱いているが――略)

浪花坊の名でいま一つ世に知られているのは、大阪造幣局中庭に建つ桜の通り抜けの道ぞいにある川柳句碑である。

大阪に花の里あり通り抜け 浪花坊

この句碑を「花の里塚」と時の清野真造造幣局長が各付けた。この除幕式は、昭和39年4月4日に花吹雪の中で催されている。この句碑を前にして、造幣局サロン・オーケストラ作詞・作曲の「通り抜け音頭」が発表されたほか、サクラにちなむ数々の曲が演奏され、浪花坊先生生涯の一大イベントであった。

造幣局の南門から北門までの約六百米の通り抜けは、今も大阪市民の春の最大名物行事になっているが、造幣局泉友会発行の『通り

抜け』誌に、往時の清野真造局長がつぎのように寄稿している。

「私が造幣局長になった時、四十年間も文字通りの薄謝で局員に川柳を教えにきて頂いている本田先生のことを耳にした。そうだ、先生に一句ものして頂いて構内に句碑を残そうということになり、早速お願いしたところ、大変喜ばれ快諾を得た。したがって何を書いて頂いてもよいと先生に御一任した。生え抜きの大阪っ子であり、永いつきあいである本来的職員以上に造幣局員になりきっていた本田先生は、あの名句が極めて当然の如く生れ出たところ縁といえは、句碑の台座の石こそ数奇を極めていた。

造幣局創立当時その敷地内に藤堂藩の蔵屋敷の贅を尽くした庭に名石があつたが、それが淀川べりの局長官舎の庭を飾つたものではよいが、昭和20年の大空襲で官舎が焼失、長い間野ざらしになっていた。三十八年頃は硬貨不足の増産体制のための工場の拡張、病院の新増築等で、この大石が邪魔でどこかへ処分しようという寸前に、この石を台石に思いつかれ、由緒ある局構内生え抜きの石は、かくて風前の灯の命が台石となって甦つたわけである。除幕式には中馬大阪市長も参列され、

そのことから天満橋から造幣局南門に至る舗装が、中馬市長の格別のおはからいで昼夜兼行で実現したのである」。

通り抜けのサクラは七十八種類(品種不明十二本あり)四四〇本、その大半が里桜で、植物学的にも大変な研究の大宝庫である。最も多いのが「関山」で、明治初年からの里桜の名桜東京荒川堤の名桜に比肩する。昭和十五年から翌年にかけて、当時の中村重喜造幣局長夫人の俳人の中村汀女が、桜吹雪の中を句帳をたずさえてよく歩いていたという。

「私の大阪交通局の『川柳大阪』の句会には、浪花坊先生が七回も出席され、先生の川柳に関する貴重なお話を拝聴いたしました。

浪花坊先生からお便りも頂きましたが、小さい文字でハガキ一枚に原稿紙三枚分ほどの分量でありました。官有地に官費で市民の句碑があるのは造幣局の先生の句碑だけだと思います。懐しくもエライ川柳の老先生でありました(児島与呂志)。

昭和62年8月6日、九十六歳の長寿で死去。花の里塚こそ浪花坊の顕彰碑である。

★次回回は「森田若人」

# 誹風柳多留廿六篇研究 (四十二丁)

石田 晋一・南 得二・小野 真孝  
 本多 正範・石田 成佳・大屋 六郎  
 八木 敬一・鈴木 黄・多田 光

故岡田 甫

## 715 三番叟共をならへて高砂や

南「三番叟」は、最初、手初め、芝居の序幕の前に三番叟を舞うのでいう。本句の場合には習い初めの意。

謡曲の初心共を並べて、師匠が「高砂や」とやると、声を揃えて「高砂や」と鸚鵡返しに習っている情況句か？

本多「句意は礎のようなことか。主題句は能狂言、即ち「翁」の三番叟であり、「高砂」や「翁」の脇能であるから、本句は能狂言の縁語で結んだ句作である。

八木「劇場の句とも解せられ、謡の師匠が習い初めの連中に高砂を教えるとも解せられる。句意はつきりわからず。

多田「はつきりしない。

## 716 鹿の昼寝を埋むほど八重が散

南「奈良を代表する神鹿と八重桜を組合せて鹿の昼寝を埋むほど八重桜が散るとの字義通り。

八重ざくら鹿の昼寝の上へちり 四六 6  
 八重桜鹿が勇んで花がちり 一〇九 42  
 多田「賛。

## 717 けちな呉服屋勝手ながら茶を運

南「大店呉服店では、見世の一隅にお茶の道具が一式用意されていたのだから、小さな小売呉服屋などでは、一々小僧が台所に行き茶を汲んで来たのであろう。

つづきまして能天気茶番よふ 一五 25  
 一ぱいの茶にらんがしい呉服店 一五一 28

## 多田「賛。

## 718 御立身目出たくへりし虫の声

南「目出度くへりし虫の声」とは、虫の鳴く場所、閑地（草地）の減ったことを、つまり手狭な屋敷の増築を意味することになる。

御屋敷も武鑑も間口広く成り 四五 22  
 御立身糸瓜畠へ水を盛り 一一四 32  
 よしきりのねぐらをあばく御立身

一三八 9

## 多田「賛。

## 733 五月やみあやめハ本ンのさぐり題

南「探題」とは、歌の会などにて各種の題をくじ引等で分け取って歌を詠むこと。

本句は、『源平盛衰記』頼政と官女菖蒲の

前の故事を詠んだもの。

同じ装束、同じ重の三人の中より菖蒲を選び出せとの御詠に頼政が、

五月雨に沼の石垣水こえて

何れがあやめ引きぞわづらふ

と詠んで御感の余り菖蒲の前の御手を取って給ったとのこと。

句意は、五月闇にあやめの題は、右五雨の

歌が菖蒲の前を探り出した、元々の意味での探り題であるとの意か。「五月」に対して「菖蒲」、そして「闇」に対して「探り」で縁語、

「五月雨」は単に縁語仕立の上で、五月雨を「五月闇」としたものであろう。

頼政に普べて置いて煩らわぜ

御はうびに下さりながら手をとらせ

八木「五月闇」は、梅雨のころの夜のくらさ。また、その暗やみ

頼政が菖蒲の前を探り出した故事を、歌から五月雨・五月闇——あやめもわかず、と掛けた句作であらう。

多田「八木氏説贅」。

734 すき通ふるから召たまふ緋の袴

南「衣通姫の句。衣通姫は衣を透き通す美しさであるから、それでは困るので下半身に緋

の袴をはいていられるのであるとのこと。

くらやみへ衣通姫は穴をあけ

石田成「贅」。

緋の袴めさぬとみんな透通り

緋の袴召さぬと玉がすき通り

多田「贅」。

735 おめかけはいづれの緒よりたかしらす

南「川柳辞集」に、「いづれの緒」は琴の

異称とあり、例句に本句があつて、その注は「琴は不得手」とある。で、本句は、お妾は

琴を知らないということになるが、別に、「いづれの緒」は、お妾は下賤の出生で、氏素性がわからないという意が含まれているのではないかと思います。

御立身いづれの緒よりしらべけん

八木「句意がもう少しはつきりしない。この「緒」は「膳の緒」にかけて、どここの膳の緒

から生れたか分らない、どここの馬の骨か分らない、位の意を琴を知らない、ということにかけている句か。

何れの緒でも一曲と嫁をせめ

多田「礎解プラス八木氏のように考えています。した。

736 瑠璃の桜も咲さうな所也

南「上野は江戸における花の名所であり、此の中堂、瑠璃殿のあたりが最も花樹の多い所。

瑠璃殿ハ花の浪間のしんき楼

瑠璃殿をせり出スやうな花盛り

上野の山は東都鎮護の靈山で、その殿堂は瑠璃殿と呼ばれ壮嚴である。瑠璃殿を取りまいた桜はまるで瑠璃の花でも咲きさうな所であるとのこと。

石田成「贅」。

瑠璃色もさだかに見へぬ花曇

多田「贅」。

737 俄雨女房ハ梨子の花を出し

南「太田道灌の山吹の里で俄雨にあい、賤女より蓑のかわりに山吹の花を差し出された故事を踏まえた句。

古歌など知るよしもない不風雅な女房が、

山吹の花よりもっとつとり早く梨の花を差し出して、俄雨に雨具を貸すのを断った、或は断つたであらうとの意。

山吹よりも手廻しハ梨子の花

手廻しハ山吹よりも梨子の花

多田「贅。私もつけ加えること「梨」。

（完）



黒川紫香選

浜田市 中尾 まゆみ

不意ではない逢えた余韻が掌にあふれ

花リボン深くかわる人のため

君の名を書いて心に灯を点す

行間にわたしを埋めて封をする

鳩一羽掌に休ませて対話する

熊本市 宇野 昭代

さりげない余白に好きの二字が見え

大の字に寝て雨音を聞いている

縁談が来ると父さん黙り込む

胃ぐすりを手放せません苦労性

ピンピンと小言がひびく二日酔

今治市 野村 京子

夜が好き目尻のしわが消せるから

ざんげするつもりはないが花の寺

自尊心捨てて耳鳴りやみました

くちなしの匂いへ続く窓が好き

煩惱を女がたたむ蛇の目傘

長岡京市 木本 如洲

春の椅子余生に温いことを言う

太陽に感謝まずしい蒲団干す

誘われて春の嵯峨野の藪をゆく

人ひとり許して雨に濡れている

生涯に喜劇を知らぬ男の死

八尾市 高杉 千歩

ただいまヘカレーが匂うママがいる

妻の伽ひととき忘れ絵具皿

おいでよに心をこめてペンをおく

お隣もエアロビクスという秘密

旧姓を呼んで六十路の食べ歩き

尼崎市 的場 十四郎

丸腰に気負いの鉢は向けられぬ

幸せな風で今宵も幕を引く

憎い子は一人もない洗濯機

正直な時計は過去を振り向かぬ  
励ましがとても上手な古時計

名古屋市 藤井高子

三叉路で三つの知恵を持てあまし  
昭和史に原爆とある碑の重さ

どこまでがお面か判らなくなった  
この世とは右往左往をするところ  
Gパンでいささか齢にごまをする

富田林市 池森子

赤いバラ求めて流転する女

ルンペンにも主義主張のある暮らし  
留守番は不要盗られるものがない  
澄みきった青に少し疲れてくる男  
あなたの席にバラを活けてから負ける

鳥取市 小谷美つ千

あの日からおんな強気の反旗振る  
そつとメモ渡されころときめかす  
気まぐれな男に鈴をつけておく  
燃え尽きた男を待っている港  
喜寿という父の白髪はほんものだ

広島市 流奈美子

野良猫が仔猫を連れて訪う青葉  
鍋を研ぐ雲の早さを追いながら  
お供えへ自分の好物ばかり選り  
対岸が見えて素直になりました

神からの伝言板を読み忘れ

熊本市 大川幸子

負けた理由感心しながら負けている  
無駄口を叩いて女上機嫌

グラスの底で揺れてる下心  
御仏が目を開いたら困っちゃう  
社交辞令そんな笑顔につき当る

島根県 高野律子

老農の鍬に休みのない暮し  
雨の日は雨の仕事が母を待つ  
ずる休みしたい日もある石地蔵  
程々の遠慮わきまえ丸く住む  
火吹竹そんな昔もありました

静岡市 沢田きん

母さんの目がまんまるい團児の絵  
新鮮な空気がほしい水中花  
誤解ですなどと上手な逃口上  
指切りの小指はずれた佻しい日  
耐え忍ぶ女の胸に涙つば

京都市 松川芳子

見そこなうなど父の優しい目が睨む  
電話口ペコペコ下げて嘘も言い  
惚けたなと思うが馬鹿になりきれず  
コーヒータム二人のゆとり取り戻す  
旅の味うまいと食へ歩く

和歌山市 堀 畑 靖 子

書き出しがいつも同じになる手紙

泣き顔を見せて親しみ湧いた部屋

色気より食い気男を憎めない

反省の材料ばかり溜まる箱

泣いた目を隠してくれるサングラス

大阪市 上 田 柳 影

宿命とあきらめている母の皺

花あかり憂いをすこしずつ解す

真剣に歳考える雨の音

身綺麗にして老醜と相対す

勇気などいらぬ流れに乗って生き

西宮市 秋 元 て る

浴衣地ののれん小さく老母の部屋

姉妹かと聞かれ機嫌の良い浴衣

猫嫌いの姑が来る事猫に言い

病気の妹を青森に見舞う

子も孫もある妹だが放つとけず

どう嘘をつき通すかを打ち合せ

吹田市 井 上 照 子

髪切った時の決意が実を結ぶ

メルヘンの島は花まで歌うたう

ワイン手に理屈いっぱい並べてる

親の脛かじりマンションから通う

一物が胸にあるから口ごもる

京都市 木 村 たけし

花のない花瓶と共に二月病む

手作りのケーキを焼いて積木つむ

裏山に何焚く煙か春香る

星の数五百かぞえて子に返る

裏切れぬ坂に踏絵が置いてある

出雲市 岸 桂 子

海綿に水ふくませるポータス日

コーヒを二人で飲んだだけの人

張子虎どう愛しても首を振る

頂点の花にも花の迷いあり

一円貨音なき音も聞こえ出す

久留米市 鶴 久 百万両

逆縁のはなしは読経すんでから

無駄な青春でもなし特攻隊の頃

結婚の条件父のようなひと

忍の一字がどこまでつづく倦怠期

富士登山還暦祝って妻も子も

藤井寺市 高 田 美代子

長い髪切る決心に目をつむり

初デート アイスクリームとけてます

指ずもうだんだん本気になってくる

今度こそ言おうと思うさよならと

どの子にも平等に書く母の文字

伊丹市 山 崎 君 子

今日も雨つぶやくママと洗濯機

母の日は老母が一番動いてる

湯の町で同期の桜炎えている

ジャンボくじ妻子の夢も共に買い

鳥取県

西 浦 小 鹿

懸命に生きる素顔が美しい

手作りのパンで始まる日曜日

長い道のりに友達いてくれる

遮断機が降りてさよなら言いました

静岡県

柳 沢 た ま

言にくい事は封書で書いて出し

家中の笑いで埋まる退院日

がんばれと亡夫の声で目が覚める

につこりと遺影はいつも守り神

尼崎市

尾 宮 弘 治

まだ粥の妻とベンチで子を語る

カレンダー土曜の午後が空いている

みごもって来ているらしい膝の猫

拗ねた子が親の布団にもぐり込む

米子市

小 塩 智 加 恵

飛びとびに読んでめでたし桃太郎

広からず狭からずいる老いの家

進物も来なくて靴下買いに行く

くやしさを残った奥歯かるくかむ

出雲市

金 森 知 恵 子

死角から意外な球が飛んでくる

二拍子の乱れちぐはぐする夫婦

見栄切ったあとの始末はまた私

土壇場で真の器量が問われてる

和歌山市

山 口 三 千 子

露払いさせて後から来てくれず

数えてはくれたが座る椅子がない

横車押して冷たい目に出会い

国豊かになって人情薄くなる

兵庫県

森 脇 和 子

艶っぱい話の好きなバラの園

遺影から愚痴の出そうな雨つづき

お人好しだけが持つてる丸い笛

補聴器へ甘い言葉が届かない

熊本市

北 川 一 進

交差点飛び出して来た盗難車

開会の宣言鳩が合図する

「お行儀良いネ」言われ正座も崩されず

石垣が斜め斜めに坂の道

熊本県

岩 切 康 子

一言が多い返事に口を閉じ

佃煮の母の旨味へ挑戦し

失礼を詫びる受話器の声低し

コーラーの一気に弾く淡白さ

和歌山市

森 茜

千羽鶴北の序曲を思いだし

和をたもつ寡黙な席がひとつある

不意に風 傘はくるりとアン・ドウ・トロワ

通過駅父が迎えてくれそう

十和田市 阿部 進

ホイホイと育てた娘持て余し

署名簿がみんな味方と限らない

疑いを持たぬ小犬がしっぽ振る

手袋のままの握手は信じない

枚方市 山崎 彩子

花咲いた散ったでスリルない日記

アカシアの香が思い出をたぐりよせ

兄の忌に今年も濡れて沙羅双樹

宰相はまたも酒屋の御曹子

尼崎市 野瀬 昌子

登ってもまだ上がある雲の峰

どくだみの花物憂げな梅雨晴間

脇道へたまにそれたい朴念仁

オールドミス男嫌いをいいわけに

堺市 船越 重子

イヤリングよう似た話聞き流す

知ってても知らんふりして聞き役に

なんとなく似た者夫婦で臺がたち

よい事は父似にするともるくゆく

酒田市 永澤 裕子

買い込んだ若気を悔いる不用品

姑さんと呼ばれ鏡に落ち着かず

夕映えに幸せと思う旅二人

逆境も試練と言いい切る強い人

摂津市 木下 道子

ビー玉も子どものけんかも消えた路地

せかせかと動く歩道も歩かされ

浴衣着て堅い話を持つてくる

盆すぎて踊り疲れた浴衣干す

西宮市 松本 一郎

峠から見ればわが町ビルラッシュ

ナツメロにわが青春のときめきが

退職金預け銀行もう来ない

円卓で会議は丸くおさまらず

岐阜市 渡辺 杏村

まだ夢でうなされているキノコ雲

父さんは別の予定の夏休み

宿題を山ほど持つて行く田舎

西瓜よりアイスクリームほしい孫

鳥取市 西村 黙光

飽食を嘆き雑炊懐しむ

田畑を潰し先祖へ背を向ける

花鉄決断力の鮮かさ

消しゴムで消えてしまった淡い恋

河内長野市 大西 文次

浮気する心配ないと見られてる  
そんなええ株ならあんた買いなはれ  
籠の鳥遊んでいても食べられる  
ワコールの肌着で包む燃ゆる胸

東予市 小山 悠 泉

真直ぐな父は私の道しるべ  
初夏の風切って集金やって来る  
孫の声聞きたい妻の長電話  
頼るのは結局夫婦だけと知る

熊本県 高野 宵 草

先生せんせいと医者追いまくり  
坊やにも看板読めたそば・うどん  
友情の便りの文字がかすみがち  
やっと咲く牡丹に雨傘さしかける

砂川市 大橋 政 良

酔って候回転木馬止らない  
ばんやりと過した午後の時間割  
定年の首です離職票を吊る

その裏でスリルを待っていた平和

島根県 菅 田 かつ子

捨てられた仔猫よしばし去りかねる  
風みどりたこ焼屋さんもうとうとと  
そよ風へ我が家の大将ねむりこけ  
いい事がありそう今朝の花の色

川西市 野村 静 雄

神前でまだ考えている不逞  
人生の深さが違う師の言葉  
きっちり薬を飲んで不安がり  
借りる方一言多いなと思う

尼崎市 鈴木 良 征

悪税を粗大ゴミから巻きあげる  
そろそろ峠辞職願いがまだ書けぬ  
二杯目のコーヒー飲んで妥協する  
いつも孤独で後悔ばかり先走る

貝塚市 池田 寿美子

浮雲と気球の夢は別々に  
バラ園に軽い吐息が風に乗る  
それなりにアンテナ張って翺びたとう  
価値観を揃えて倅せ守り抜く

尼崎市 山田 保 蔵

花吹雪ひとりはぐれてみたくなる  
記念にと貰った時計動かない  
ドンと西行したら浄土あるそう  
飾らない心が温い孫の文

鳥取県 太田 幸 枝

何ごととも真似て中流階級の旅  
下手なのですがカラオケが好きやから  
晴天の隣も洗たく機うなり  
あじさいの陰でひっそり炎えつきる

守口市 森川 春 子

怪談を聞いた峠を賑やかに  
旅行券貰った子等に土産買つ  
左手の腕相撲にも齒が立たず  
足元のしつかり老女の舞姿

枚方市 森 本 節 子

傘乾くまもない今年の五月雨  
万緑にうつる鏡の蒼い顔  
爪見せて病後の娘のいい笑顔  
いつからか挨拶合つて市場かご

鳥取県 中 瀬 さつき

振り切つた遠慮に一寸未練あり  
ひた向きに丸く生き抜く友といふ  
残り火を燃やしつづけて農守る  
マンシヨンの窓開け放す梅雨上り

鳥取県 前 田 嘉津江

歳月が孤児の糸口風化させ  
郷愁に浸ると地酒ほしくなる  
活火山地下の不満を噴き上げる  
ほのぼのと紅茶一杯肩を寄せ

岡山県 富 坂 志 重

こつそりと逢つた余韻でねつかれず  
カラフルな薬に命あずけてる  
言うだけは言つておこつと受話器取る  
思い出は遠くなるほど美しい

米子市 新 正 子

問う闇にやがて答える母の鈴  
雨の日がうれしいハナエ・モリの傘  
手にいつもジョーカーを持つ友がいる  
火の酒をあびて忘れた過去がある

尼崎市 木 下 義 嗣

夕立に知らぬ女を傘に入れ  
山の子に海を見せたい夏休み  
母の日に宅急便のカーネーション  
約束を邪魔するように雨が降り

尼崎市 中 澤 向 西

子守唄子猫も膝に乗ってくる  
困つたこと相談しなと里の母  
赴任地の朝を知らせる鳩時計  
底抜けの笑いに仮面少しずれ

尼崎市 明 壁 敏 之

娘が嫁ぎ電話のベルがはたとやむ  
意地悪い奴が隣へ越してくる  
オルゴール古い童謡聞いている  
誘われて買った馬券が穴をあて

尼崎市 吉 永 伊三郎

予定より式を早めて岩田帯  
包装紙延ばし畳んだ亡母を真似  
今だから言える聞いている裏話  
ぼちぼちでんなど商人頭が低い

大阪市 亀 井 円 女

亡母の居ぬ部屋の広さよわびしさよ  
我儘ですが涙はたとございます

開けるまで夢を持たせる福袋

うつの日は小犬の目まで悲しそう

岡山県

後安 ふさえ

好きだった亡母の命日木の芽あえ

浄土から友が夢で逢いに来る

それぞれのドラマが終る団地の灯

妻の呼ぶ声で迷路やつと抜け

寝屋川市

宮崎 菜月

初めての仲人朝から落ち着かず

神様も律気なお方お礼あり

ふるさとの自慢の景に席譲り

関関同立ブランド志向の受験生

鳥取市

岩原 喬水

口止めをされたと孫が来てしゃべり

人形のように見合いはかしこまり

こっそりとカード占う恋に燃え

愛媛県

八塚 三五島

年金でのんびりせよとほっとかれ

さんざめく頂上みんな山が好き

金がないわけではないがコップ酒

徳島市

宮武 まつ女

黙々と四季の匂いの花時計

母さんの強さ父にも欲しい背な

言い勝って淋しく揺れる立葵

和歌山市

田中 みね

プレゼント友からせしめる誕生日

目を瞑ることも覚えて処世術

兄嫁に甘えて老母は子に帰り

枚方市

中山 おさむ

別行動しばらくひとりだけの風

娘時代をむき出しにして里帰り

音痴にも音痴のリズム田端節

兵庫県

酒井 靖子

愚痴るほど孤独の穴が埋められず

本心に背いて今日は無駄を買

口車気安く乗って火傷する

大阪市

尾崎 黄紅

雑兵の集い本音の旨い酒

薬にもならぬくすりを飲んでいる

占いで生きる手相の占い師

佐賀市

古川 一徳

失言の波紋弁解重くなる

因習に波紋を投げた少女の死

金持の話はケチの美学かも

和歌山市

前田 美子

巣立つ子をいつまで追つてる影法師

ほんとうの心に触れた失意の日

年甲斐も忘れダンスにこり始め

大阪市 吐田純子

地球儀を回せば映る孫の顔

気強さをかくす女の泣きぼくろ

小銭入れ重たくなった消費税

寝屋川市 太田藍子

制服に色気が少しこぼれ出し

明るさでチーム支える人気者

良く言えば生まれたままのお人柄

鳥取市 松本伊都子

競りにゆく牛の別れた曲り角

ひよこりと訪ねる老母の手の温み

ぎっしりと苦楽背負って生きつづけ

高槻市 芦田静江

撫でられて強がりを知る丸い背な

小犬ころころ応挙の襖春になる

甲羅干し亀の平和を信じよう

鳴門市 八木芳水

お喋りの途中へお茶が仲間入り

残り火の話どこまでホントかぬ

泣き声で駆けつけさせる電話口

兵庫県 西脇富美

ライバルが辞めて私の腕にぶる

思いっきり緑のシャワーで汗流す

口下手が賞めて素直になつてくる

岡山県 土居ひでの

つながれた位置でサイコロ振らされる

サングラス替えて出直す朝が好き

環境庁地球が喘いでいるのです

吹田市 山本希久子

CMにうっかり乗った無駄遣い

来年の花博をみる券を買ううまいはず六甲の水と書いてある

岡山県 牧野秀吉

朝の蜘蛛そつと逃がしてはたきかけ

若葉風袂に入れて散歩道

花菖蒲行儀正しく客を待つ

伊丹市 小熊江美

三世代仲良く住まう瓦屋根

共稼ぎいたわる文が添えてある

生き甲斐が私の世界の中にある

鳥取県 乾隆風

峠からはるか向こうの海を描く

おにぎりをしたらきれいに手を洗う

お坊さまのおためごかしを見せよう

大阪府 島路太郎

のど仏喜んでいる新茶かな

年金のくらしに甘え夢がない

大志などないが陶土を梅雨にねる

唐津市 中村順子

父の日の父を見舞った嫁一人

五月雨の木の葉の裏の青蛙  
城下町堀を埋めたり濡えたり

広島県 森川 拔智

短気ではない怒る癖がついただけ  
枝豆が出たのでビールもついて来た  
よその子が私の頭なでにくる

寝屋川市 井上 すみれ

恩師の告別式に

嗚呼亜鈍先生今神の御名  
瀬戸海を遠くに住んで山から見  
晴れやかな声を迎える花鋏

岡山県 森下 正子

ささやかな思い遣りが幸を呼ぶ

夫婦なら楽に渡れる丸木橋

古希が来てまだ降りる駅見つからぬ

京都市 小林 英子

角砂糖ゆっくり溶ける雨の午後

口紅も変えて嬉しい久し振り

忘れぬ人と出逢ったバスツアー

新潟県 高野 不二

笑ってる写真でニュースになるつらさ

補聴器が雑音ばかりつかまえる

米作り嫌って捨てぬ米の味

羽曳野市 福田 満洲子  
のんびりと出来ない主婦のつゆ晴れ間

長生きをしてたらビデオで会えるのに  
ためらいを捨てて集団癌検査

十和田市 阿部 喜久江

亡き母に見せてやりたい晴れ姿  
薫風に心の窓をそつとあけ  
菜の花に出逢って蜂が忙しい

島根県 山根 峰雪

リハビリの努力嬉しい退院日

珍客に一人戸惑う妻の留守  
集会に灰皿いらぬ人が増え

岸和田市 岩佐 ダン吉

万策尽き旨い話に乗ってみる

酔い醒めに夢も萎んだ男です

紫陽花が天気予報を聞いてます

岡山県 福原 悦子

自己採点妥協してから甘くなる

これからが人生靴の紐を締め

あせらずに話す気楽な老夫婦

大阪市 川原 章久

山吹の蔭に緋の愛宕道

売らんかな毛生え薬の勇み足

子は正直真っ赤に塗った父の顔

鳥取市 近藤 秋星

春の宵何か浮かない顔で来る  
故郷を訪えば螢が飛んでいる

梅雨入りを母もテレビで知っている

河内長野市

岡崎実

星空がきれい二人は歩くのみ

血と汗を流す男で人気あり

人気ある先生家で粗大ゴミ

鳥取県

今本早苗

鬼の居ぬ間に鬼の部屋そうじする

花言葉母の岬に置いておく

鼻歌のでる横顔をながめてる

大阪市

今西静子

情報網私の素性盗まれそう

職人の酒には女などいらぬ

愛されて人形の顔汚れてる

静岡市

西村千代

酸欠へ金魚の泡が目立つ夏

古里に母がいるから泣きに行く

外人も浴衣で踊る平和な世

豊中市

三宅つえ子

釣橋を渡って脈をたしかめる

咲き切れぬ花の命に贈る水

長らえて手を引かれてるベレー帽

島根県

松本聖子

荷造りを終えておいしいお茶を飲み

余生とやあわてて手習い始めたり

電話口孫と思えぬ声になり

京都市 渡辺圭坊

くちなしのとてもうれしい白い花

さるすべり雄弁に何語るのか

純潔の印でつぼうゆりの白

熊本県 増田一乗

同じ距離おいて逃げてる霧の帯

新任の上司が頼る生字引

旅疲れ兎小屋でよみがえり

藤井寺市 中島志洋

夏の恋育ててくれた海の砂

才女と呼ばれその気でペンをとり

ネオン街また道草がしたくなり

岡山県 伏見すみれ

へそくりという切り札に助けられ

土居耕花氏を悼む

大原の里に巨星一つ落ち

やすらかに浄土に眠る奴風

静岡市 久保きぬ

目的があって止まらぬ万歩計

耳打をされて弁解重くなり

後継ぎの嫁に合せる老夫婦

宇部市 中村三良

貧乏ゆすりが止んで地球が動き出す

歌ったまんま孫と童話の里に寝る

割り箸にも論理が在って割りそびれ

茨木市 藤井正雄

夜業終え結露の窓を拭いておく

友逝った知らせ長文にする日記

母が出てちよっとつまらず電話口

堂々と漫画を読んでいる大人  
いつまでも目の無いダルマふびんなり  
うれしい日無言の父に酌をする

鳥取市 森山豊子

新緑のしずく袂が染まりそう

寝た振りで妻の小言を聞いている

冷奴今日も老女の膳に乗り

一日とおけぬトマトの熟れぐあい  
何日までも元気でいてと来るカード  
反対の肩へも重い役もらう

和歌山県 西口忠雄

共稼ぎパントマイムで朝を出る

増産と減産いうのは同じ人

耳寄りなはなしへ運ぶ寄生虫

母の日に嫁手作りの心くれ  
小刀で削る鉛筆個性持ち  
つばくらめ耳をかすめて雨期近し

岡山市 中嶋千恵子

ここいらで夫に焦点合わしとこ

びくびくと巧い話に乗ってみる

磨かれた個性がキラリ光るとき

無為無策重石になって余生かな  
光るもの何もつけずに逝った妻  
目覚めたら今日も私は生きていた

鳥根県 加本義良

呑み干したコップの底にある野心

その次を心得ている妻の顔

反論のマイクやたらと大きすぎ

一輪をつけて雑草見直され  
禁煙の効果入歯が白くなる  
才覚はあれど行政蝸牛

(前月分) 松江市

泉佐野市 大工静子

鳥取県 市村京子

サハラ砂漠に涙の壺を乾しに行く

ひろしと書いた砂文字風が消しました

後向いたら味方の夫がいなかった

母の日に遙か彼方の花届く  
アルバムにしがみ付きたい人がいる  
封切れば友の倅せ孫ひ孫

静岡市 小木久子

相田市 中塚礎石

やさしさが閉ざした心開かせる

無防備に見えてとりつく隙はない  
自信持つと女素敵になつて行く

鳥取市

美 田 旋 風

猫のそば眠った振りが板につき

噛み合わぬ暮し若気のつけが来る

近くまで来たというのに電話かけ

出雲市

高 橋 きよし

手真似までしては続ける立ばなし

乱筆で友の手紙はすぐ分かる

走り書き母の手紙はなつかしい

鳥取県

木 下 芙 葉

寝たきりの薬頼りに明日を生き

逝った父母海より深い恩思い

嫁った娘が客で来る日を母は待ち

静岡市

宇 佐 美 寿 美

ブランドの水着が似合うしなやかさ

朝顔を数える孫に陽が優し

ラブレター書く鉛筆はことば溜め

豊中市

村 上 とく子

城跡に登り夕日を見て帰る

お裾分け好きなお皿が返らない

スイッチがふえてとまどう母一人

唐津市

山 口 ふさ子

柿の葉の日一日と大人びる

来る季節路傍の花に教えられ

虫の知恵死んだふりして生き伸びる

岡山県

大 石 あすなろ

接点がどこかにあつて切れずいる

夕やけを並んでみてる凡夫婦

茜雲田植日和になるだろう

岡山県

後 安 江 山

あせつてもあせらなくても時流れ

そして雨あなた矢張り雨女

過去は皆笑い話になるゆとり

旭川市

朝 倉 大 柏

噂もう立たなくなった淋しがり

日記また昨日のことに触れている

大物の兆し堂々嘘も言い

藤井寺市

武 部 敦 子

下駄箱に定年の靴せまくいる

強い嫁弱い姑と綱を引く

陰口を言えばその人肩たたく

寝屋川市

河 合 時 弘

掌に受けて香りたのしむ一番茶

杜の顔になつて机も広くなる

青春を埋めた葉月の長恨歌

大阪市

榊 本 路 児

老いたとは思わぬ足が追い越され

狭い庭ごちゃごちゃと植えられる

玄関に下りて話がまだ続き

直売の墨書大きく茄子胡瓜

静岡市 増田 扶美

老夫婦肩を寄せ合いいちご詰め

手を挙げて麦笛の子にこたえてる

鳥取県 美浦 美代子

迎え火で帰ってほしい仏待つ

文人の部屋乱雑でよく稼ぎ

弾むマリ届かぬ塀を越えたがる

吹田市 西岡 豊

街角の善意の笑顔採血車

父の日に派手なアロハのプレゼント

熟年の愛はやさしくおおらかで

芦屋市 根来 敬

結局はうまくおさめて年の功

敵方に悲運をかこつ友がいる

白旗を出す喧嘩などするものか

岡山市 福原 辰江

もう止そう明日につながる夢にかけ

左遷も椅子もどこ吹く風と鎌をふる

噴水の向うに彼女が見えかくれ

鳥取県 幸家 單車

農をつぐ子に嫁さんが来てくれぬ

嘘のない暮らし貧乏しています

こつこつと老化の音がしのびよる

流山市 神田 治

自腹切る何かいいことあるだろう

偏差値へ口出しはせぬパパの過去

新聞は見ぬことにする血のにおい

松江市 豊田 巡歩

年金がそれでも僕を力づけ

鮎を釣る故郷の川をテレビから

老いらくの恋をヨシキリ嘲笑う

島根県 今川 三津江

物忘れ茗荷のせいにしておこら

扇風機炬燵同居の過疎に住む

橋出来てロマン消えゆく渡し舟

鳥取県 石谷 美恵子

なつかしい友の癖字が旅誘う

西陽さえ望めぬビルの底に住む

疑問符がつのり心は貝になる

静岡市 青柳 金吾

流行のように議員が辞職する

海外をやめて飛鳥の里に行く

長生きをするのか此の頃よく眠る

鳥取市 萩原 美雪

主婦のするぜい沢などはたかが知れ

ときめきが欲しいまだまだ女です

ギリギリの線で妥協の印を押す

大阪市 清水 利武

制服を着れば仕事の鬼となる

いい腕があるのに只今失業中

米子市

服部 朗子

井戸端へ鶴呑みのデマを持ってくる  
こつそりと手塩の花がさらわれる

東大阪市

大平 太一郎

満ち足りて感謝忘れてなお不満  
程々の欲で気長に八十路越え

大阪市

堀口 欣一

東海道こんな綺麗な川もあり  
婦警さんどれもリンゴのような頬

伊丹市

猪原 石莊

人のよさ何もそこまでもとあきれ  
床屋から精一ばいのぼくが出る

大阪狭山市

桜井 莊次

自由だと錯覚してる金魚鉢  
気楽さが何よりですと里の親

静岡市

浅子 まつゑ

旅に出て我が家の天気気に掛り  
山の湯の旅情に浸る外は雨

神戸市

岩田 信義

自画像の余白に花を画き加え  
雨だれに相槌打たせこぼす愚痴

岡山県

杉本 伊久栄

児の夢を満たしてやりたいホタルの灯  
ひと時の梅雨の晴間の花菖蒲

和泉市

中川 楓

後半の勝負どころで息がきれ

泉南市

坂根 流水

マスコミの怖さマスコミ気がつかず

兵庫県

奥野 テル

酌み交わす猪口から本音ころげ出し  
悩んでたヒント雑談から拾い

鳥取県

鈴木 芙美

湯舟からドドイツうなる平和なり  
海ないで海女の暮しもいま盛り

鳥取県

久野 野草

下り坂歩幅を狭くして生きる  
美しい人の日傘が行く日和

鳥取県

山根 八重

花びらがひとつこぼれた散歩道  
青虫が紋白蝶となる日記

大阪府

清水 絹子

老い二人たっぷりいれる朝のお茶  
孫の声半分きいてみな承知

堺市

井上 たかし

嫁叱る時だけばけていぬ姑  
仲人の上司左遷でけつまずく

岡山県

江口 有一朗

太陽の嘆きフロンガスの穴  
権力の壁の厚さにあるもろさ

るんぺんも英字新聞よんでいる  
仲直りしてから明かす胸の内

南国市 窪田和広

目覚しをセツトしてから寝つかれず  
したたかに生きる女の細い指

鳥取県 伊吹富恵

亡母の帯昔の折り目そのままに  
鈍行に人の情けと里の香と

広島市 名和喜一郎

特上の寿司それぞれの前にある  
きつちりと位置を守って瀬戸の島

岸和田市 三輪通彦

子育てが済んでカルチャーへ弾んでる  
背のびしてローンに追われている夫婦

姫路市 谷清柳

横這いの蟹は頑固に自己主張  
幕あいのコントにちよつと顔を出し

泉佐野市 真崎浪速子

言い勝ってやがて無口になる対話  
とも綱を投げて港に歌があり

堺市 神原文

道端の思わぬ史跡歩を戻す  
そのうちに会いましょうとは良い加減

八尾市 片上英一

お葬式の矢印そらを指している

流れ星お願いごとが多すぎて

青森県 木村喜峰

郭公も鳴かずに帰る過疎の村  
また被害カラスの知恵に追いつかず

島根県 梅木梅園

幸せな苦吟畑へ句帳持ち  
人柄はだまっけていても座が和む

静岡市 大石たき

仲が良く娘のような嫁姑  
金持ちで後継ぎも無い老夫婦

富田林市 浦田トシエ

姑の部屋生きるが如く常夜灯  
久方のあざみに会いし墓参り

豊中市 滝北博史

母の日に贈ると父が礼を言う  
より添ってみたらナフタリンの臭い

田辺市 染道佳明

そうじさばりましたと先生から電話  
好奇心でしかつかタバコが吸いたくなる

米子市 小西五十鈴

たくましい甲羅のような手で生きる  
顔なんてどうでもよいと負け惜しみ

青森県 荒田つる

古古米になるとも知らず穂を垂れる  
冬休み終えて津軽は雪の中

静岡市 丹羽定次

気の合った相手で口も軽くなる  
ガタゴトとカバン鳴らして下校の子

静岡市 三浦つね

年重ね日記空白多くなる

消費税一円玉が忙しい

鳥取県 西原艶子

あこがれて少し恋して師を仰ぐ

新築が並び我が家は古くなり

寝屋川市 北岡波留吉

弁舌を巧みに使う出世欲

街角を曲がると女甘えだす

青森県 波ただお

風紋を漣無情に消して行く

山やまは緑の衣裳で若わかし

今治市 渡邊伊津志

海峡に眼がある如し蝶渡る

メロン割るそこから母と子の世界

島根県 川津幸夫

立話 車くの字に通り返け

安心の余生たくまし野良仕事

羽曳野市 麻野幽玄

持たされた鍵が家路を急がせる

目覚めれば朝刊が有る枕元

倉吉市 橋本さつき

シーソーのバランス崩れ友が去る  
振り向けば遠い昔にかかる虹

八尾市 向井しづ子

どうしようもないダダっ児で一つ屋根

犬みたいひもを預けている安堵

鳥取県 山内芳江

奥の手を早く出し過ぎ負け戦

無理をしてボロ出し笑い種になる

藤井寺市 菊地繁男

発車ベルまだ来ぬ一人へ首が伸び

女房に小説書くわとおどかさ

東大阪府 岡田寿美礼

大阪に引越し親身の世話になり

病む窓にすすめにちゃんと励まされ

唐津市 浜本治幸

ほろ酔いで帰る我が家に鬼が待つ

肩書を外した友と屋台酒

大阪府 家村高雄

羨ましいと言われる程の女房もち

どの会にもヘンチキリンが一人いる

鳥取県 黒田くに子

級友の一人が逝った流れ星

父の日の嬉しい酒へ父子酔い

豊中市 みきわきみ

あじさいの鉢と小雨に濡れさせる

堪えに堪え本音を吐かず去って行く

川西市

田中喜俊

糠づけをたんと漬けこみ息子待つ  
大学は遊ぶところと勘違い

倉吉市

青砥菊枝

赤ちゃんも大好きな声聞き分ける  
要領の悪い自分を持て余す

出雲市

森山健歩

なあに大丈夫酒で消毒しています  
出不精と出たがりそれでも夫婦です

橿原市

西本保夫

同情して手を差し延べる人も居る  
結論から言えばはつきり負けている

岡山県

平田たけよ

青空に水車がまわる稲育つ  
明日のこと明日に任して今日を消す

唐津市

野田旭恒

老僧の箒を止めて教え説く  
顔と声昔変らぬ友と逢い

鳥取市

前田一枝

祝い酒何度呑んでもようまわり  
太陽を追って笑うた花もある

堺市

近藤豊子

保育園母にとどかぬ歌があり  
満席を確かめている楽屋裏

鳥取市 武田帆雀

縁側をいっぱい開けて嫁が来る  
外孫が膝に飛び込み茶をこぼし

倉吉市

田中八太郎

御馳走に不足はないがあるじ下戸  
飛び降りてホームで煙草吸いました

島根県

岩田三和

ひばりの巣じつと見守る母子です  
おっとりどこに住んでも出雲人

八戸市

島田昭治

立小便よくぞ男に生れけり  
金で無い倅せもあり笑い声

静岡市

山中竹野

葛藤も越えて金婚たどりつき  
久闊を両手でがっちりあたためる

富田林市

加藤ミツエ

中一の孫嬉しい事言ってくれますの  
方向音痴いつも誰かを頼ってます

唐津市

福島紀一

大輪のバラを咲かせる妻の術  
病める身にざくろの朱が目にしみる

和歌山県

岩崎瑞穂

かたくなに和食志向の傘寿爺  
器量だけ望んだ嫁に悔いのこす

大阪市

平井露芳

口開ける練習もして治療待ち  
菖蒲にもマスク要ります排気ガス

岡山市 河野青銅

月世界うさぎの地図が消えてゆく  
淋しさは三百六十五連休

寝屋川市 豊福路子

母の日に名湯めぐりも届けられ  
山並みに遠巻きされて熱い旅

鳥取県 武田照女

名水に人の心が映り澄み  
歳月の中で減じる罪と罰

豊中市 額田明吉

花菖蒲賞でる夫婦の睦じさ  
瞑想にふける平和の夢破れ

島根県 兒玉幸子

峯寺から眺める下界初夏の色  
人生はこころの健康語り合い

大阪市 山北三三三  
(婦人教室)

故里の菜の花を売る百貨店  
雨だれもやがては石に穿つ穴

奈良市 井上大

山陰今哀しみ本線日本海  
長老も半分ほしい棚のモチ

高知市 山崎一求

蛇にまで追い掛けられる色男

オーナーと思った人はアルバイト

大阪市 平山登代

内緒のはず夫の入院知れわたり  
しょうぶ園あちこちを観て飽き足りず

弘前市 肥後和香子

恋しさが爪の先まで蟬にする  
蟬の声二人の距離を鳴きしきる

豊中市 小林一夫

閃光の中に冷たい神がいた  
抱擁へことさら淡き昼の月

静岡市 大村正雄

第六感五黄の寅をびたり当て  
六道の辻で出逢えば皆汚職

兵庫県 倉垣恵美

だらしない私があるひとり留守  
蝸牛 孫はとつくに帰ったよ

文部大臣奨励賞

祈ることばかりで母は老い給う

東京都 伊藤正紀

川柳大賞

いつかいつかと男は飽きず樹に登る

埼玉県 須田尚美

### 第13回全日本川柳大会の受賞句決定

— 同人吟

## 秀句鑑賞

— 前月号から

月原 宵明

### 蛸螭の身軽うらやむ蝸牛

久家 代仕男

殻を背負った愚鈍な蝸牛ではあるが、好きな時にいつでも動き、絵になり歌になる。一方、身軽でも夜しか歩けない蛸螭、塩でも撒かれたものなら命がなくなる。他所の飯はとかくうまい、と言われる軽い風刺も……。

### 捨てようと言わない亡母の杖

谷垣 史好

我家にも両親の使った遺品が物置に沢山ある。捨てても焼きもならない。しかも身体の一部とさえ思ふ杖、今更どうしようもないでしょう。だびに付す時、持たせてあげていたらと後悔しきり。亡母の容姿が大きく浮かぶ。雨しきり緑に染まる音だろう。

堀江 正朗

今回の六句全部心を打つ句ばかりである。草木に降り注ぐ雨の音、それが緑に染まる音と切り切れるのは、正朗さんの澄みきつた心

眼と特殊な感覚から生れたものである。もう少し優しくおしとあやめ咲く

春城 年代

桜は勇ましい男性、梅は賢い女性、あやめは純日本のな淑やかな和装のおんなです。雨に濡れた優しいあやめの姿を借りて、比喩が心憎いばかりに効いているし、話しことばの柔らかさが心地よい。

### 絵にはなる女でお嫁にはなれぬ

舟木 与根一

言うなれば実用向きでない女。絵になる女とはうまく言ったもの。あるいは与根一さんの周囲に居られるかも知れぬ。春宵一刻は杖の空想で、絵になる女を探し求めようと。気に入らぬこと言うたかと妻に問い

矢野 佳雲

「あんなこと言えば誰でも怒るのは当たり前」と妻、「本当の事言っただけなのにももの言われん」と主人公。落語に登場するような真面目人間、決して嘘はよ言わぬ。この後暫くは夫婦のいざこざが続くことでしょう。

### 万緑のふるさと削りまた削り

浜本 義美

政治の目玉として産業経済の開発に、高速道路やパイパスが計画され、惜しげもなく故郷の緑が犠牲になってゆく。政治の陰に農・漁民が泣いている例が多い。私も体験しておりますので実感あり。

### 大正の父の形見に巻脚絆

恒松 叮紅

過去の不幸な戦争の犠牲者は大正生れが中心だった。苦難に満ちた一生であり、そのかみ兵であつた父の形見は飯盒と巻脚絆で、すでに飯盒は傷付き金目廃品となつたが、カーキ色の巻脚絆が五十年の昔を物語っている。朝刊を配る子供の顔知らず

菅井 とも子

足音などで朝刊を配達しているのは、少年だと思つて、中学生か小学生か。ある朝なんとなくその子に会つて、有難うと言つてやりたく、まだ見たことのない少年の面影を浮かべてみる。女性ならではの情の句。

### 思想なきおんなバーゲン買い漁る

福浦 勝晴

バーゲンの山を崩してゆく、すさまじい手の躍動と眼の動き。「思想なき」と言われても致し方がない。このひとときこそ、衝動の快感に浸るしあわせである。

### 追ひ抜いて男が女が確かめる

丸山 よし津

### 窓際で爪と鼻毛がよく伸びる

坂根 夢酔

### 聞かれたら明治生れに御座候

渡辺 独歩

### 恐縮の度に眼鏡がずり落ちる

桜井 千秀

以上は川柳塔でないとお目にかかれぬ、ユーモアと笑いと軽妙さの効いた句である。

# 愛染帖

## 橘高薫風選

豊中市 三宅 つえ子  
傘の滴も情けとおもつ車椅子  
島取県 江原 とみお  
白旗も赤旗も持つ車椅子  
寝屋川市 江口 度  
旗印に表裏があつたとは迂闊  
旅の終わり汽車だんと速くなる  
消えゆく自然にかまきりとて立ち向う  
夏空飛んで見たからラムネ玉  
和歌山市 後藤 正子  
樹の下で魚になった夢を見た  
室温に戻してからのためご焼  
枚方市 森本 節子  
千手観音寺には寺のお商売  
ホータルコイ蜜袋も咲きました  
今治市 月原 宵明  
人間の弱さは神へ鉦太鼓  
翔ぶ女都わすれは好きでない  
平田市 久家 代仕男  
野放図に生きて妻子に頼られる  
忽然と消えるわたしをふと思つ

唐津市 浜本 義美  
にんげんの動物めいてくる末期  
大海に果てし流木よ茜空  
島根県 小砂 白汀  
兵のこと忘れ原潜浮上せず  
島取県 新家 完司  
銃など持つから撃つてみたくなる  
こころの中の弱いところに雨が漏る  
作業着のままで夕陽を浴びに行く  
伊丹市 榎谷 寿馬  
わが青春は中国に在り北京  
衣替え半年の悪脱ぎ捨てる  
大阪府 西森 花村  
雲の大きさ雲より小さいもの知らず  
午前午後腹の減り様に癖があり  
寝屋川市 堀江 光子  
偽ものの壺に白ばら毅然たり  
饒舌に陶酔境のイヤリング  
和歌山市 桜井 千秀  
明瞭な答えてどこか味気ない  
賢女ぶる貴女お疲れ出ませんか  
米子市 沢田 千春  
月見草ゆれてやわらかく荒野原  
神様の鞭に突然目がさめる  
羽咋市 三宅 ろ亭  
世の動き等差級数らしくなる  
消費税とても上手に払うピエロ  
米子市 光井 玲子  
千羽鶴祈りのあとも飛びたてぬ  
宝塚市 末次 真  
棺桶に未公開株隠れるな

鳥取県 土橋 螢  
おんなじことを考えるお茶を飲む  
米子市 川上 より子  
恋の文書いている間の草の乱  
鳥取県 近藤 秋星  
初恋を人は不倫の恋と言つ  
和歌山市 堀畑 靖子  
ラブゲーム開始机の色は黒  
和歌山市 神平 狂虎  
狼は私しかり雨を視る  
和歌山市 田中 輝子  
つきつめて君の優しき手を嫌う  
青森市 工藤 甲吉  
汝我津軽に生まれ津軽弁  
米子市 林 荒介  
土鈴鳴るははの形に家がある  
高槻市 河瀬 芳子  
胡桃割る音が終日亡母の部屋  
米子市 八木 千代  
飛んだのはわたしのでのひらの蜜  
和歌山市 古久保 和子  
百吹いて夢百生まれシャボン玉  
名古屋市 藤井 高子  
にぎりめしのような御世なり昭和とは  
堺市 高橋 千万子  
寸借詐欺の手みやげおいしかった事  
広島市 名和 喜一郎  
葬式に雪一つない道を行く  
倉吉市 田中 八太郎  
カンナ屑一重で塔婆になるところ  
和歌山市 西山 幸

さくらんぼ甘く酸っぱい消費税

名古屋

越村 枯梢

今日も無事に暮れました似非紳士

西宮市

奥田 みつ子

賑やかに集まりひとりずつ帰る

倉吉市

渡辺 菩句

絵はむかし火をおこす木であつたとさ

岡山県

矢内 寿恵子

閉じる眼にみんなやさしい仏たち

美面市

椎江 清芳

どの靴を履いても父は追い越せず

大阪市

山北 三三三

故里の宅急便に波の音

有田市

生島 美美子

ちぐはぐな話声する雨の中

堺市

近藤 豊子

お遊戯のつづきのように掌を合わせ

兵庫縣

遠山 可住

おぼはんの強さ断固として庶民

出雲市

森山 健歩

離れ座敷梯子を外す会議かも

愛媛縣

八塚 三五島

にせ物の方が世間を喜ばせ

橋本市

岸本 木魚

連休日ロボットさんはどうなさる

茨木市

堀良 江

選んだ後で本命にめぐり会ふ

今治市

渡辺 伊津志

一杯に開くと蛇口腹を立て

米子市

政岡 日枝子

沖のさわぎに潮は巻き込まれたようだ

沖繩の旅

大阪市

渡部 さと美

傲慢な柵延々と基地ばかり

中国を想う

尼崎市

哀れやな旅に見し人今如何に

川西市

野村 静雄

一生を添う気で祝詞聞いている

羽曳野市

田中 隆二

珈琲で別れ話はしたくない

島根縣

榑原 秀子

やはり又便り書くしかない想い

守口市

森川 まさお

同じことなら酒屋で道を尋ねよう

黒石市

相馬 一花

サラ金に美人が一人殺された

廿日市市

森川 抜智

消費税散髪のばす癖をつけ

熊本縣

高野 宵草

魚毫りながらぼつりと消費税

米子市

林瑞 枝

自分で自分へ拍手出来たらしいね

大阪市

塩田 新一郎

カストロロフィーいつかは黒い陽が昇る

和歌山市

山川 克子

逃亡のふたりが座る禪の寺

倉吉市

青砥 菊枝

赤ん坊寝かせバージロード踏み

兵庫縣

倉垣 恵美

虫けらの秘密は確と守りぬく

米子市

新正 子

プールでは泳げて海で泳げない

和歌山市

森茜

たちあおい咲いた便りが浜辺から

大阪市

町田 達子

逃げ道が欲しい紫陽花雨を待つ

豊中市

辻川 慶子

濃あじさい女系家族とつづがなし

京都市

木村 良二

われに似て起伏激しき保津下る

和歌山市

福本 英子

二尺指し持てば背筋がしゃんと伸び

伊丹市

猪原 石莊

次に見たときは消えてる窓の船

堺市

神原 文

心ない見舞達筆邪魔になる

吹田市

西岡 豊

目覚ましが力尽きたととてくさる

寝屋川市

豊福 路子

タンポポの葉書にかけぬ憂いごと

大和高田市

加藤 松次郎

日まわりの小さな花の五月晴れ

堺市

山本 半銭

ええ日和瓜もなすびも花をつけ

弘前市

波多野 五楽庵

蛸の木魚の音に似てかなし

萩屋川市

岸野 あやめ

爪摘むに眼鏡かけたり外したり

豊中市

田中正 坊

群衆の一人一人に顔がある

和歌山市

青枝 鉄治

化粧した男の唄う反戦歌

大阪市

神夏磯 典子

小糖雨燃える二人に頼りなし

西宮市 松本 一郎  
美しく老いるに淡い恋もする

和歌山市 牛尾 緑良  
相応の鋳型にはまる妻と僕

唐津市 仁部 四郎  
仕出し屋をママさんバレー買い占める

唐津市 山門 タミ  
抽選にもれて家だけ見て帰る

八尾市 片上 英一  
霊柩車うごくコウモリ散つてゆく

仙台市 川村 映輝  
審議せぬ議員が又も立候補

豊中市 江口 明光  
バナナなら一房買えるコーヒー代

富田林市 片岡 智恵子  
ストレスを溜めて義理の手膝に置く

鳥取県 谷口 次男  
弁当はしっかり汗をかいてから

茅ヶ崎市 山下 元孝  
乱丁は表紙を代えても直らない

姫路市 中塚 遊峰  
野良猫がのぞいて通る独り者

町田市 竹内 紫鏑  
狼が来る来るといふ社の上司

大洲市 米澤 暁明  
今日からは片肺飛行のお守り役

岡山県 松本 元江  
牛追った亡父が田に立つ雨の中

喜屋川市 宮尾 あいき  
さすがさすが孫すぐ眠る子守唄

和泉市

岡井 やすお

岸和田市 三輪 通彦  
医療費の伸びと長寿が背くらべ

河内長野市 岡崎 実  
採算がとれぬとレールめくられる

弘前市 真喜内 実  
正論へ冷たい風がふきよせる

米子市 金山 夕子  
勝負にはこたわりませす勝ちました

砂川市 大橋 政良  
真つ白なページで慕うお月さま

倉吉市 市村 京子  
うずくもの一つ抱えてまだ独り

喜屋川市 平松 かすみ  
猫の目着く燃えて貴方を捜します

岡山県 富坂 志重  
一言が私の出来るボランティア

笠岡市 松本 忠三  
からっぽの頭やさしく待つまくら

岡山市 川端 柳子  
口だけは達者じいさんばあさんも

岡山市 福島 紀一  
サクランボ孫へ童話がころげ出る

茨木市 井上 森生  
孫たちに朝顔の種蒔いておこ

唐津市 山門 幸夫  
ほほえみのアーウーはじじへのこにちは

宝塚市 丸山 よし津  
母の日はこ機嫌さんす子沢山

吹田市 栗谷 春子  
欠点を隠さず芸の彩とする

吹田市 栗谷 春子  
階段の足音若しつらやまし

東京都 吉川 一郎  
このところ白髪も染めず老い加速

西宮市 門谷 たず子  
生きざまを誇れる父の木が茂る

奈良市 井上 大  
親ガメがこけても子ガメ上に乗る

唐津市 野田 旭恒  
解剖した蛙の顔の哀れなり

十和田市 阿部 進  
蛇口から愚痴がこぼれる倦怠期

岸和田市 芳地 狸村  
立呑み屋十年振りの友が居る

姫路市 大原 葉香  
地球から見れば何でもない話

豊中市 中塚塚三丁目12-15  
投句先 千560

橘高薫風苑(ハガキに3句)

## NHK川柳募集

課題「暇」 選者 橘高薫風

締切 8月10日

投句先 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

ラジオセンター 川柳係

発表 8月27日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

水煙抄

## 秀句鑑賞

—前月号から—

都倉求芽

太陽はいつも味方でいてくれる

藤井高子

地球の生い立ち、地球上のすべての生物、みんな太陽あつての今日である。適当な温度も気候や天候の配分も太陽の偉大な効果。古代から太陽信仰は世界各地に受け継がれている。それを味方と感じた句主には、名古屋地方の伊勢湾台風は、もはや一つの試練として消化されているでしょう。

縄跳びへ入っておいでよ孤独さん

中尾まゆみ

子沢山、赤電話、縄電車。もう最近では殆ど見かけないこれらが、各地の句会で相変わらず、日常茶飯事のように登場する不思議を感じていたが、この若い作者はその轍を踏まずに、躍動する縄跳びとされたのは、さすがだと思います。

なまけ癖ついてしまった全自動

大川幸子

洗濯、皿洗い、炊飯器、なんでも全自動になってしまった今日。句主はなまけ癖とおっしゃっているが、こうして川柳に精進され、四句目の消費税唯一のプラス面を見つめておられるのを見て、立派な家庭の主婦であると確信します。

行楽の流れに乗って旅に出る

小谷美千秋

永年、行楽のお客様のおかげでメシを食べてさせていただいてきた小生にとって、この句のようなことは、まずなかった訳ですが、連休のニュースに行楽の流れの渋滞や洪水を見ると、シーズンオフの旅しかできない小生には、別の世界です。しかし、子どもたちの学校時代を想い出すと正直、この句が羨ましくもあります。

ふるさとへ向いて食べてる柏もち

池森子

大きな柏の葉で包んだ柏餅。葉をめくるとふるさとの香りがひろがって五月晴れの風もふるさとかから吹いてくるように思える。桜餅や椿餅の葉の中にはビニールの物が現れ出しました。柏餅だけは、本物で通してもらいたいものです。

花もい若葉もいいな犬とゆく

山崎君子

犬にとって餌をくれる者と散歩に連れられる者と、どっちがあるがたいのか。作者は多分、両方の世話だと思つて。それも今はやり

の缶フーズではなく、手作りで、散歩も自転車ではなく、連れ立って歩く。だからこそ大と一緒に、四季を楽しめるのでしよう。

母の忌やあの日と同じ雨の音

流

奈美子

雨嫌いだつた母上、その母上の亡くなられた時も、また、ご命日にも雨が降る。しかし、その雨のおかげでまた面影が甦って感慨にひたれる。

境内を奈良線が行く藪椿

木本如洲

百万都市の中を、単線電車が藪椿すれすれにガタゴトと行く。京ならではの風情を、さりと句にされる手腕には、脱帽のほかありません。

悪役は皆引き受けて長女なり

秋元てる

男は結婚するとないていは嫁はんの傘の中に入つてしまふ。そこへゆくと、女性も世帯を持つても親の面倒、実家の行末に何かと氣をつけて、事あるごとに跡とりの尻を叩く。悪役と言いつつ作者の手柄に好感が持たれます。

立替えて何時も損する消費税

松川芳子

後世に必ずや悪税の名を残すであろう消費税。ウチ税ソト税なんて極めて不明瞭な制度は、本当に気の弱い者にはツイエケナイ!

## 荀香のむ

小出智子選

億のつく金笑い話にしてしまう

空振りの元気のあるがましとする

揺り椅子に母の老後が定まらぬ

妻の胃で発酵してる忍一字

子供の頃から先生になりたがり

伴せなことに朝湯が沸いている

スイッチをこまめに切ってきらわれる

亡き母と語り合ってる衣替え

光る星みんな集めて宴せん

新茶淹れながら凡日を省みる

精一杯あとは野となれ山となれ

消しゴムのあとがあるからいらしい

病気だと思つてあげることにする

天安門どころではない事が起き

欲しい時黙つてお茶の出る怖さ

人形の瞳は何か言いたそう

誘うとき吃つてしまう癖があり

バラの花百本だまされてみようか

けつたいな私が写る大鏡

大阪市 日阪 秋子

寝屋川市 岸野あやめ

寝屋川市 稲葉 冬葉

兵庫県 倉垣 恵美

大阪市 鈴木 節子

岡山市 川端 柳子

和歌山市 西山 幸

和歌山市 田中 輝子

尼崎市 春城 年代

松原市 佐藤 藤子

大阪市 田中 弘子

米子市 新 正子

鳥取県 西原 艶子

堺市 近藤 豊子

鳥取県 市村 京子

羽曳野市 福田満洲子

詩にも絵にもならぬ私のひとり言

わらべ唄さびしい人を呼び止める

お隣の預かり物が臭い出す

どん底でおぼえた強さバネにする

雨の日は雨に演技をする女

友だちもみんな淋しい街に住む

ふくみ笑いをじつとみつめるモディリアーニ

七十五日過ぎたか風も風いどくる

あきらめる強さもあつて独り住む

菖蒲一本 女系家族の湯も丸し

わがままを言える仲間と夏に入る

ウインドの自分にハッと胸を張り

深呼吸胸から鬼が逃げてゆく

ハウマツチあなたの愛を値踏みする

飛躍する一歩手前で踏み外し

人の裏ようやくみえてきた風野

こんなはずではなかった夫婦きり

友達と幸せの度を計り合う

秋に花咲いてほしいと土いじり

今にして考えている名前負け

紅一点山の空気もはなやいで

祝い酒隣の妻が袖をひく

いましめて心の中の虫が飛ぶ

悪税に一矢選挙に迷わない

潮時に杭を一本打つておく

岡山県 山本 玉恵

和歌山市 森 茜

堺市 小西 小雪

岡山県 富坂 志重

八尾市 宮西 弥生

米子市 青戸 田鶴

八尾市 向井しづ子

和歌山市 山口三千子

大阪市 津守 柳伸

名古屋 藤井 高子

吹田市 栗谷 春子

堺市 高橋千乃子

富田林市 藤田 泰子

鳥取市 小谷美つ千

出雲市 石倉美佐子

米子市 光井 玲子

米子市 金山 夕子

大阪市 神夏夏典子

堺市 船越 重子

寝屋川市 井上すみれ

和歌山市 内芝登志代

米子市 小塩智加恵

米子市 服部 朗子

八尾市 高杉 千歩

米子市 茂理 高代

蚊取り器もひとり暮らしに馴れてくる  
雑念を捨てて童の輪に入る  
一服のお茶へ荒立つ語尾しずめ  
ふる里へ貰いに帰る柿の種  
みなちがう地図持つて居るユートピア  
霹靂よ盲の母の眼がひらく  
ベタ靴とげんまんをして旅ごころ  
想いのたけを角のポストへ吐いてくる  
春の宵肩書すてた日のながさ  
物分かり良すぎ淋しくなってくる  
風はみどり少しうす目の京の味  
わだかまり心のすみでまだ解けず  
横文字がやたらに多く困り居り  
こっそりと合わせてみる割れ茶碗  
景品の良い方へ行く子の使い  
さからつてみてもやっぱり雨おんな  
母さんの声がしそうな山の駅  
仏壇にまだ母の日の贈りもの  
思い出も日傘も褪せて捨てきれず  
温い手を求めて桃は流れ着く  
戦争を共にくぐった両隣  
リラの花 薄い化粧がよく似合う  
お向いの風鈴夏の音になり  
したい人一杯居るのに役がくる  
そんなこんなで旅行靴に縁がなし

|    |       |      |       |      |       |     |       |     |       |     |       |     |       |     |       |      |       |     |       |     |       |      |       |     |       |    |      |      |       |      |       |     |       |     |       |     |       |     |       |     |       |     |      |       |       |     |       |     |       |
|----|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|----|------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|
| 堺市 | 桜沢あかり | 和歌山市 | 湯浅 由梨 | 寝屋川市 | 宮崎 菜月 | 米子市 | 政岡日枝子 | 大阪市 | 本間満津子 | 西宮市 | 林 はつ絵 | 米子市 | 白根 ふみ | 高槻市 | 河瀬 芳子 | 藤井寺市 | 武部 敦子 | 西宮市 | 奥田みつ子 | 枚方市 | 森本 節子 | 和歌山市 | 前田 美子 | 有田市 | 生馬英美子 | 堺市 | 神原 文 | 和歌山市 | 福本 英子 | 寝屋川市 | 平松かすみ | 有田市 | 松井かなめ | 大阪市 | 板東 倫子 | 吹田市 | 茂見よ志子 | 竹原市 | 信本 博子 | 大阪市 | 堀 いくの | 米子市 | 林 瑞枝 | 河内長野市 | 植村 喜代 | 大阪市 | 山田 妙子 | 大阪市 | 上江洲勝子 |
|----|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|----|------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|

チームの和保つタクトは乱せない  
魚がしの相場昨日の風が上げ  
親子でも言うてよい事悪いこと  
幸せを逃した手相じつと見る  
余命表 畑につるしてしたたかに  
スーブことごと女がひとり充ちる刻  
植え終えた安堵を包むかしわ餅  
風みどりころころと児ら駆け回る  
宝にも重荷にもなる孫が増え  
ホアグラにならぬあしたをたしかめる  
綻びた愛を繕う子の寝顔  
老いらくの恋ひっそりとあたためる  
吹っ切れぬ悩み抱いてる小糠雨  
叱られる始めて触れた姑の温み  
花菖蒲いっぱい咲いて忌が巡る

ゴシックの一句目。先頃騒がれた竹藪の大金事件。その後は知る由もないが、まさに笑ひ話であった。今はまだ記憶に新しいが、時事吟であるだけにこの句のおもしろさが忘れられてゆくことを惜しみます。二句目。価値観の違いと言おうか、さり気なく表現されながら若い人達との考え方の違いを知らされました。三句目。主婦にとって衣替えというのは大変な作業ではあるが、お母さんの形見のものなど出てきたりして、亡き人を偲びながら一日を費やしてしまう。女性ならではの句



# 投句先

〒544

大阪市生野区勝山南1―18―10

小出 智子（ハガキに3句）

# 句評リレー

五月号から

柳 楽 鶴 丸  
平 田 実 男  
福 本 英 子  
宮 口 笛 生

瞬きをせぬ孫が居り侮れず

松 本 忠 三

鶴丸 四、五歳くらいの時は、何にでも興味を示すものです。じつと見つめる可愛い瞳を裏切らないように。

実男 この孫は、鶴丸さんの言われる四、五歳よりも幼いかも知れません。リクルート関係議員にも、こういう孫がおればよかったなあと思います。下五を少し工夫されたらと思います。

英子 瞬きもせずに、じつと見つめている真剣な子供の瞳に出会ったことがあります。心の中まで見通されているようで、私は「侮れず」がこの句にびつたりだと思いますが。

笛生 句そのものについては、英子さんに

同感です。せいぜい満一歳くらいだと思えます。私の孫もこの夏で二歳になりますが、もつと言葉が出ません。こちらの言うことはよく分かっているのにしゃべれない。瞬きをせぬが、しゃべれないに通じているように思う。侮れずはオーバー過ぎるのでは。秀作とも思わないが。

鶴丸 皆さんの言われるように思ってもみたが、私はむしろ片言でも話のできる孫が、ただ何もしゃべらずに真剣に見ている瞳を想像する。

実男 笛生さんの言われるように、このお孫さんはしゃべれないと思います。見られている人は、あまりいいことをしていないようです。そのように解釈すると、句に深味が増してきます。

英子 痛いところを瞬きもせず見つめられ

ては大人もたじたじ、純真な子供心に傷をつけるような事はできないと思われたのでしょうか。しゃべれる子、しゃべれない子、どちらでもじつと見つめる瞳が悪を許さないのでは。笛生 しゃべれる子、しゃべれない子云々の意見もあるようですが、分かっているのか分らないでいるのか、瞬きもせずにある一点を見ている孫の姿に、一瞬、何かひやりとしたことは確かで、ひやりとしたことを侮れずと結んでいる。これで良いのではないか。

エレベーターの別れあつさり垂直に

林 瑞 枝

鶴丸 別れは積残しだと思ふ。エレベーターだからあつさりが生きている。

実男 積み残しよりもラッシュ時の別れではないかと思ひます。時間が来れば閉まるドア「垂直に」が混んでいることをよく表現していると思ひます。

英子 船の別れは何時までも切なくて、飛行機はアツという間に、そんな思いからの瑞枝さんの句で、心にすつきりとした別れを「垂直に」とされたのではないでしうか。

笛生 面白い見方だと思ふ。垂直ににユーモアがあり、垂直が生きている。

鶴丸 心にすっきりとした別れと英子さんは言われるが、そうすると「あっさり」がひ

つかかる。ラッシュユだから積み残しがあるので、こたわることはない。アアアアと言っているうちにスーと垂直に。ユーモアのある句

実男 英子さんの言われる飛行機の別れは想像もしませんでした。別れはやはりエレベーター内で、「垂直に」は混んでいるので言葉だけが、会釈だけの別れだと思っています。

英子 皆さん、ラッシュ時の句と受け止めていられるのでそうかなあーと思いますが、もう少しドラマのある句のようにも思えてなりません。あまり考えすぎかしら。いやみのない良い句と思います。

笛生 あつという間の別れであったことは確かである。エレベーターを持って来たところ、また、エレベーターだから垂直にとしたのであろう。物足りない別れがうかがわれる。

おふくろにしばらく会ってない土筆

小島 蘭 幸

鶴丸 簡単に考えるとそうかと思つし、こたわると土筆がどうしてもひつかかる。結論が出ればなんだと苦笑するかも。

実男 故郷を離れた子どもたちを土筆に置

きかえたのだと思う。早春にだけ出る土筆、土の中で春を待っている土筆、会えばきつとほのぼのとした会話になるでしょう。

英子 土筆と聞くだけで、明るい春の川の土手から故郷、そしておふくろさんまで、夢が広がりますね。元気にしていってくれるかなどと実男さんの言われるとおり、ほのぼのとさせて頂きました。

笛生 土筆に温みを感じられる。そうだーペンおふくろさんに会って来ようと思う。

鶴丸 表面的では、皆さんの言っておられるとおり。でも核家族の現在だから、いっそう温みも感じます。昔ならごく普通で、こんなにまで感じなかったでしょう。生活は苦しかったけれど昔はよかったナ。高度成長が憎い。

実男 どなたも土筆から温味を感じられ、安心しました。人間として春だけでなく一年中、人に土筆の温味を感じさせるようになりたいものです。

英子 もう皆さんのご意見のとおりです。こんな温い句に出会えると嬉しくなっています。政治人事に頭を痛めている先生方へ一服の清涼剤にお聞かせしたいと思います。

笛生 郷愁をひしと感じさせられる。土筆がこの句の命でもあり、文句のないいい句だ

と思う。

下駄の緒が切れても祖母の南無阿弥陀

久家 代仕男

鶴丸 信仰心の強い祖母、茶碗が割れても不吉な予感とか、虫が知らせたとか、南無阿弥陀を口の中でばそ言っている姿が浮かぶ。

実男 下駄の緒と言っても、今の若い者にはなじみが薄いと思います。下駄の緒から恋が芽生えた時代もありました。「祖母」を「老母」とした方がより読者をひきつけるのでは。

英子 鶴丸さんの言われるとおり、可愛い信心深いおばあさんを連想します。鼻緒からの恋では古すぎるかも知れませんが、この場合、下駄、祖母、南無阿弥陀、で良いのでは。私も年齢かしら。

笛生 年老いた母の様子が有りありと出ている。祖母、老母、私はどちらでも良いと思う。南無阿弥陀がよく効いている。

鶴丸 この祖母は、事故を見ても、動物の死骸を見ても、南無阿弥陀と手を合わすだろう。句は古い。

実男 明治生まれと思われるおばあちゃん南無阿弥陀でストレス解消。いつまでも達者

で長生きして下さい。

**英子** 本当にこんなおばあさんが少なくなりました。カルチャーに旅行にと、お忙しい毎日を過ごされ、ポツクリ寺は今も大勢のおばあさんたちで大繁盛と聞いています。南無阿弥陀仏の心を忘れないようにしたいです。

**笛生** 南無阿弥陀仏が面白い。ちよつとしたことにも喜びと感謝に生きているおばあちゃんが良い出ている。下駄の緒ではなしに、他の何かを持って来た方が良いようにも思う。下駄の緒は古い。

## 買物の味を覚えたお父さん

内 芝 登志代

**鶴丸** この句は平凡なようだが、下五がお父さんで佳吟。単身赴任で覚えた買物の味、辛い反面、楽しいドラマを想像する。

**実男** このお父さんは六十過ぎ、買物のほとんどが台所用品、やりくりに興味を覚え、晩酌の肴も適当に籠の中へ。「市場籠母より父の手へ馴染み」という句を思い出しました。

**英子** 核家族のサラリーマン家庭、登志代さんはお孫さんの顔を見に行かれて、若いお父さんの甲斐々々しい姿を句に、「味を覚えたお父さん」が何とも楽しいです。

**笛生** 私も時々、スーパーへ買物に行く。

特価のちらしも見えておく。玉子の安いのもなかったし、消費税三パーセントも払って一円玉の価値にも触れている。男が買物籠を持つてうろうろしている姿は、あまりほめたものでもないが、句意はよく分かる。

**鶴丸** 私も老人や共稼ぎのサラリーマンと思った。一人暮らしの老人なら、実男さんの言われることも分かる。メモ片手の若いお父さんや、家族と生活している老人には、よほどでないかぎり味は分からないと思う。私は二重生活で経費増を承知の上、将来を夢見ながら健康や経済を考えて料理をつくることで、買物の本当の味が分かると思う。責任が誰にあるかだと思います。

**実男** 英子さんの核家族は想像しにくありません。定年でもまだまだ若く粗大ゴミとして扱われたくなく、買物を奥さんやお嫁さんに頼まれ、そのうちに興味を覚えたというふうに解釈したい。私もそろそろ定年が近くなつて来たせいいかも。

**英子** 皆さんに一人反対するようですが、近くで見ている登志代さんから、つい楽しいお父さんを連想してしまいます。買物の味はアクセサリーから衣類・食品まで幅広くとりたいのですが、如何でしょう。ショッピンクを

## ふれあいの祭典ひょうご 89 「川柳祭」 作品募集

題と選者 (各1句・1題5人共選)

井床 芦 蘭 島本 原 爽 介

和 田 光 代 赤 松 隆 男

「荷」 去来川 巨 城

かなもりかず枝 中 村 東 角

濱 邊 稻 佐 獄 平 山 繁 夫

「会う」 石 井 冬 魚

ト 部 晴 美 坂 本 須 磨 代

春 城 武 庫 坊 藤 本 静 港 子

一、〇〇〇円(定額小為替)

各題別に便箋を使用。別紙に住所・氏名・年齢・性別・職業・

電話・大会出欠を明記

〒662 西宮市六湛寺町一〇一

一一 西宮市民会館内

西宮文化振興財団「川柳祭係」

8月20日(当日消印有効)

兵庫県知事賞ほか

発表大会 10月29日(日)午前11時開場

西宮市なるお文化ホール

「森」泉比呂志 「包む」黒川紫香

「水」池田南岳 「球」 広瀬反省

当日の題

楽しんでる若いカップルも多くなりました。

**笛生** それぞれ想像させてくれて、句意はよく分かるが、はつきり言うて秀句とは言えないと思う。句材が悪いのでは。

## 何色を着ても影法師は黒い

小谷 仙山

**鶴丸** 黒いのは当然。色があつたら大変だ。私の句に、「流行を着ても同じ影法師」がある。

**実男** 「何色を」を人間の「正と悪」の方に解釈すると、句に深味を増します。同じ黒でも見る人が見れば、悪の方の影法師にはそれなりのかげりが見えて来るものです。

**英子** 難しいですね。さりとて詠まれているように見えて、なんぼでも深くとれますね。皆さんのご意見をお伺いしたいです。よろしくお願いします。

**笛生** 鶴丸さんの言うように、影に色があつたら大変なことである。この句そんなにむずかしく考えることもないと思う。素直に詠んでいる。

**鶴丸** 「何色」を「正と悪」と言われるとなると悪であろう。それならなぜ、影法師は黒いと言いつつたのだろうか。笛生さんの言われるようにむずかしく考えることはないと思う。

**実男** そんなに深く考えなくても言うことにしなすけますが、それでは作者の意に添わないのではないでしょう。

**英子** 一巡してご意見をお聞きしても、ま

だ戸惑っています。でも素直に詠まれていられるのかも知れませんね。作者の意は他人になかなか伝わりにくいのです。ごめんなさい。

**笛生** 影法師に色があつては驚きだが、その影法師の黒に、美しく着こなしているひとつひとつの色が、はっきり写し出されていると思う。影法師に腹立たしさを覚える気持ちをうまくまとめている。

## 老いて我平成の世に押し出され

柿花 紀美女

**鶴丸** 政治不信、消費税に苦しめられてる年金生活者、愚痴も不満も一緒に「押し出され」とは皮肉。

**実男** 上五の「老いて我」に少し固さが感じられます。「老いてなお」ではどうでしょうか。下五の「押し出され」も一考を。

**英子** 大正、昭和といろいろな時代を過ぎてこられた紀美女さん。「平成の世に押し出され」とはなんと川柳的な楽しい表現でしょう。「我」に固さを感じますが、「老いてなお」とすると暗くなるように思います。如何でしょうか。

**笛生** ついに平成まで生きのびた老齡化社会を皮肉っているようで、押し出されはあき

らめか、それともうれしきか。私はうれしいと思ふ。まだまだ長生きして下さいと言いたい。

**鶴丸** あきらめも嬉しさもあると思う。開き直って楽しく生きて下さい。

**実男** 熟考すると、「押し出され」は川柳的な表現だと思います。上五と中七を入れ替え、「平成の世に老いた我押し出され」にしてはどうでしょうか。

**英子** 平成と年号が変わっても、お元気で潑刺としておられるお年寄りの代弁のように思えてきました。まだまだ若い人に負けな心意気を皮肉られたのかも。楽しいと見られた皆さんのご意見に賛成です。

**笛生** 実男さんは上五と中七を入れ替えたらと言われるが、私は原句の方が良いと思う。私には好きな句である。

## 西日本文字放送作品募集

題「反対」 森中恵美子選

3句 締切 8月15日

ハガキに明記の上、左記へご投函下さい  
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

# 暑中お見舞い申し上げます

川柳塔社常任理事会

理事  
副理事  
長

常任理事

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 小 | 川 | 河 | 河 | 神 | 金 | 榎 | 岩 | 板 | 野 | 西 | 黒 | 橘 | 阿 | 西 |
| 出 | 島 | 内 | 井 | 谷 | 井 | 本 | 本 | 尾 | 村 | 田 | 川 | 高 | 萬 | 尾 |
| 智 | 諷 | 天 | 庸 | 凡 | 文 | 吐 | 雀 | 岳 | 太 | 柳 | 紫 | 薫 | 萬 |   |
| 子 | 云 | 笑 | 佑 | 郎 | 秋 | 来 | 踊 | 人 | 茂 | 宏 | 香 | 風 | 的 | 栗 |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 吉 | 宮 | 宮 | 松 | 藤 | 吐 | 春 | 辻 | 玉 | 谷 | 田 | 高 | 塩 | 里 |
| 岡 | 園 | 口 | 川 | 井 | 田 | 城 | 置 | 垣 | 中 | 杉 | 満 |   |   |
| 美 | 射 | 笛 | 杜 | 一 | 公 | 武 | 白 | 重 | 史 | 正 | 鬼 |   | 小 |
| 房 | 月 | 生 | 的 | 二 | 一 | 庫 | 溪 | 人 | 好 | 坊 | 遊 | 敏 | 路 |

# Y F C文化センター 川柳セミナー

|   |   |    |   |   |   |
|---|---|----|---|---|---|
| 西 | 坪 | 岸  | 大 | 浅 | 人 |
| 尾 | 田 | 野  | 塚 | 野 | 見 |
|   | 紅 | あ  | 節 | 房 | 翠 |
| 葉 | 葉 | やめ | 子 | 子 | 記 |

## 高槻川柳サークル 卯の花 一同

事務局 高槻市宮田町3丁目8-8 川島颯云児  
電話 (0726) 96-2765

## サークル 檸檬

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 藤 | 田 | 松 | 片 | 新 | 池 | 大 | 楠 | 友 | 橘 |
| 田 | 形 | 本 | 岡 | 開 | 尾 | 澤 |   | 碇 | 高 |
| 泰 | 美 | 今 | 智 | 千 | 登 | 三 | 美 | 雅 | 薫 |
| 子 | 緒 | 日 | 恵 | 代 | 美 | 四 | 子 | 子 | 風 |

# オーエスケー川柳会

代表者 大坂形水

〒540 大阪市東区南新町 1-13

電話 (06) 941-8015

# 川柳ねやがわ

会 員 一 同

(事務局) 寝屋川市春日町 9-9

高田博泉

# 川柳大坂

大阪市交通局互助組合文化部川柳部

部長 平井孝始

責任者 中原比呂志

編集 高須賀金太

お 暑 う ご ざ い ま す

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 河 | 笠 | 茂 | 奥 | 竹 | 藤 | 川 | 小 | 菊 | 辻 | 松 | 阿 | 黒 | 正 |
| 瀬 | 嶋 | 見 | 山 | 内 | 村 | 島 | 池 | 田 |   | 川 | 萬 | 川 | 本 |
| 芳 | 恵 | よ | 美 | 花 | メ | 諷 | し | い | 白 | 杜 | 萬 | 紫 | 水 |
| 子 | 美 | 志 | 智 | 代 | 女 | 云 | げ | さ | 溪 | 的 | 的 | 香 | 客 |
|   | 子 | 子 | 子 | 子 |   | 児 | お | む | 子 |   |   |   |   |

## 南 大 阪 川 柳 会

毎月句会は19日です

気軽にお越し下さい

参 会 者 一 同

暑中御見舞  
申し上げます

京 都 塔 の 会

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 松 | 松 | 都 | 山 | 小 | 高 | 渡 |
| 川 | 川 | 倉 | 田 | 林 | 沢 | 辺 |
| 杜 | 芳 | 求 | 葉 | 英 |   | 圭 |
| 的 | 子 | 芽 | 子 | 子 | 栄 | 坊 |

暑中お見舞申し上げます

## 城北川柳会

城北川柳会住所

〒544 大阪市生野区中川東一―二―九

吐田公一

電話(06)七五―五七一九

## 東大阪川柳同好会

会長 カタ 片岡 湖 風

会員 一同

暑中お見舞

申し上げます

## 熊本川柳会

黒田 有働 芳仙 鶴田 謹爾 北川 一進 高野 宵草 永田 俊子 宇野 昭代 大川 幸子 岩切 康子

山

遠山可住選

負け犬の臉に青い故郷の山 大柏  
あの山に登れたらなと思う古い 一枝  
暮れなずむ檜が見えてる露天風呂 落児  
古里の山と対話をして飽きず 有一郎  
山好きは山の方から呼び寄せる やすお  
山の絵を掛けて安らぐ僕の部屋 輝子  
大学に席置き登山ばかりする 三千子  
立ったまま山に登れるロープウエー 吟平  
檜山が嫌いな姑の世話をする 艶子  
山よりも高く翔びたい親子鷹 清柳  
ぼた山に汗と涙を積みあげる どんたく  
山一つポートタウンが喰いました 高雄  
ふる里に山があるから残る父 秀峰  
宝くじ当てて富士山買うつもり 京子  
山奥で父の頑固な炭が焼け 芳仙  
故里の尖った山に励まされ 呼風  
昔の話すると悲しい山になる 静子  
山の向うに会いたい人が一人ある テル  
かつら橋渡れば炎える山男 宵明  
天山が茜に息吹く朝を駆け 朴竜  
山の端にきてから月は名残りする 恵美  
冬山の息子へ保険かけてある 重人

おにぎりがこんなに美味しい山登り 鉄治  
河童橋穂高は白い夏衣 夢酔  
下りてからほんとうの山見えてくる 保州  
相づちを打つた山がなくなる 諷云  
八月の山で蛸焼売切れる 笑風  
一歩ずつ登った山を転げ落ち 裕美  
山一つ越すと背伸びがしたくなる 雄々  
死ぬことをやめて山を降りて来る 静歩  
父がくれた山で小さな借りがあり 早苗  
素晴らしい山は黙って登らせる 一保  
幾山河しあわせらしきものに会う 柳子  
興安嶺によく似た山のある車窓 新造  
ひと七日ぶらり山から降りそう 曉明  
友ありき山ふところの古き里 正坊  
山で死んだ仕合せ者へ石を積む 雀踊子  
佳  
ふる里の山には父の樹が繁る 元江  
名山にわざわざ煙草吸いに来る 島  
軒しのぶ山の雪を掌に受ける 和子  
チェンソー何時かは山に裁かれる 寿美  
諍いを消して富士山夕映える 弧秀  
人  
いつ起きるのですかうちの休火山 正子  
地  
やまびこを連れて嫁いだ山がある 小鹿  
天  
山ほどを語り尽して夫婦かな 緑良  
軸  
肩書きはみな捨てました山の風

雑巾

羽津川 公乃選

タオルから雑巾になるおちこぼれ だし  
雑巾で電気掃除機拭いてやる 保洲  
雑巾もたまには降ってくる団地 美代子  
雑巾が溢れた酒を吸っている 秋人  
盗み聞き雑巾同じところ拭き 柳五郎  
雑巾の仲間とコップ酒が合い 軒太楼  
雑巾を固く絞れる老いの幸 勝美  
腹いせに雑巾素手で絞り切る 艶子  
洗濯機で雑巾洗うきれいい好き 達子  
雑巾がけだけ先生にはめられる 三千子  
雑巾にするボロがない新家庭 正坊  
雑巾の乾く間がない子沢山 諷云  
雑巾のように使える部下がいる しげお  
雑巾がけをしている宿の親父さん はるお  
雑巾を絞り引越し片が付く 高夫  
雑巾が女の過去を絞り出す 宵明  
雑巾をかけ廃校へ左様なら 佳雲  
雑巾が乾いたままの隙間風 芳江  
雑巾が縫える私のソーイング 正義  
雑巾に縫ぎ当てていた祖母も近き 正子  
雑巾の悲哀がわかる宮仕え 白光子  
寿美

佳

軸

42

## 選

佳

軸

佳

軸



冷汗の句もありました。

裏切りへ冷たい汗が背中這う

もみ消しているのに消えぬ脇の汗

スビーチがとぎれ冷汗ばかり出る

(すっぱ抜くスビーチ冷汗感じつつ)

そして汗を知らないお金句も：

汗知らぬ息子農地を金に換え

親の汗ハワイで流す子の平和

汗の金夜の巷で右左

(汗知らぬ金が巷で酒となり)

汗のないお金にどんでん返しあり

政治家は汗せぬ金で汗をかく

汗かかぬ人間弱くなるばかり

(汗かかぬお金に政治腐敗する)

また、ローカル線での旅の一コマに

風鈴で汗も和んだ陸奥の旅

無人駅みどりの風に汗吸わせ

山登りやレジャーの句もいただきました。

汗いっぱい夢いっぱい初登山

休日家族で登山良い汗をかき

(ハイキング後ろの方ほど汗をかき)

山登りこんなに汗をかこうとは

(山登り齢だと気付く汗を拭く)

コンサートなどでも

顔の汗歌手熱唱のなお続く

コンサート見てるだけで汗をかき

清柳

隆雄

富恵

サワ子

時弘

数彦

しづ子

義

織

明吉

美英子

和香子

ミツエ

信一

露芳

義

喜与志

明吉

喜代子

すみれ

サワ子

明吉

喜与志

ハガキに5句以内

(アンコールへ汗も拭わずまた唱う)

デートの汗が冷えきつた月の道

(デートした汗冷えきつた月の道)

ご馳走さんです。ではいつものようにもう

もうの汗を。

賞められて嬉しい汗が滲み出る

(賞められていてもやっぱり汗滲む)

朝刊を受けとる汗の少年に

(朝刊配る少年の汗目に残る)

金剛杖汗が吹き出す鈴の音

(同行二人杖握る手に汗滲む)

磯風に汗吹きとばす大漁旗

(大漁旗汗かきながら迎えに出)

作業衣の汗に再就職の顔

(再就職の作業衣やたらに汗が出る)

ぎりぎり間に合い会で汗をかく

(遅刻常習それでも汗をかいて来る)

苺摘み孫に持たせる母の汗

(苺ハウスで孫に持たせる汗をかき)

汗染みた衿は知ってるまた畳む

(汗染みた衿にも母の香が滲む)

汗染みた母さんの帯捨てられぬ

(汗染みた母さんの帯捨て切れず)

吉野ヶ里望遠鏡も汗くもる

(遺跡発掘木簡洗う人の汗)

この鉄路我が若き日の汗憶う

子の作文冷汗をかく参観日

タレントの汗ＣＭを待ちきれず

ブロンズの像が汗かく人いきれ

報われぬ汗調整の青田刈

激辛に油の汗を出す平和

二人の子軌道に乗せた寡婦の汗

とも角も流れに添った汗を拭き

夢えがきガラス細工の玉の汗

名優の化粧は顔に出さぬ汗

弁解の相手の汗を見る余裕

メス揮う医師の額に玉の汗

蛙取りランドセルまで汗がしみ

車椅子汗をしずめる夏帽子

蟻の私語お前は汗が足りないよ

悔いのない汗です今日も有難う

病床の亡父の冷たい汗を拭く

横断歩道汗滲ませてる松葉杖

以上で終了ですが、誌上に発表される時と

作句の時の間にずれがあつて迫力に欠けたよう

うですね。ではまた来週を期待しています。

◆ 題「味覚」 8月10日締切(10月号発表)

「地味」 9月10日締切(11月号発表)

「湯豆腐」 10月10日締切(12月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

ハガキに5句以内 阿萬 萬的

喜与志

一耕

保夫

勝美

一乘

治

照子

ひさ子

美恵子

保夫

みね

圭坊

由梨

つえ子

美代子

菊枝

艶子

和子

喜代子

すみれ

サワ子

明吉

喜与志

喜与志

喜与志

喜与志

喜与志

# 山柳塔わらやま

——1989 盛 夏——

橋本市・紀水川柳会・岩倉天彦  
由良町・川柳ゆら・寺田裕美  
岩出町・川柳岩出・岩崎瑞穂

## 暑中お見舞い申し上げます

五月二十八日、市制百周年記念協賛和歌山市民川柳大会を催しましたところ、地元は勿論のこと、紀伊半島南端から大阪近郊や遠く京都・奈良・尼崎からも多数ご参加下され、二百名を突破する大盛會裡に終了させていただきました。

心から厚くお礼申し上げます。  
何分にも不行届な点多々あり、何卒おゆるしのほどお願い申し上げます。

なお当日は多くの方々からご芳志を賜り、多大なご支援を頂きましたことを深謝申し上げます。 一 同

暑中お見舞い申し上げます

## 翠洋会

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 橘 | 高 | 山 | 阿 | 井 | 稻 | 上 | 上 | 奥 | 片 | 北 | 栗 | 坂 | 清 |
| 高 | 杉 | 根 | 山 | 上 | 本 | 田 | 田 | 田 | 上 | 田 | 谷 | 本 | 水 |
| 薫 | 鬼 | い | み | 照 | 凡 | 佳 | 登 | み | 英 | 綾 | 春 | 仙 | 絹 |
| 風 | 遊 | つ | よ | 子 | 子 | 秋 | 志 | つ | 一 | 子 | 子 | 郎 | 子 |
| 末 | 園 | 寺 | 中 | 西 | 藤 | 藤 | 古 | 堀 | 堀 | 松 | 横 | 米 | 渡 |
| 次 | 田 | 井 | 西 | 出 | 井 | 村 | 川 |   |   | 江 | 山 | 田 | 部 |
| 真 | 文 | 東 | 兼 | 楓 | 正 | 宏 | 美 | 良 | 光 | す | 為 | 恭 | さ |
|   | 子 | 雲 | 治 | 樂 | 雄 | 子 | 津 | 江 | 子 | す | 子 | 昌 | と |
|   |   | 郎 | 郎 |   |   |   | 枝 |   |   | む |   | 美 | 美 |

い  
ず  
も  
川  
柳  
会

|    |    |    |     |     |    |     |     |     |     |    |     |     |     |     |    |    |     |     |     |
|----|----|----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|
| 園山 | 園山 | 杉谷 | 島   | 小白  | 小玉 | 黒田  | 久谷  | 岸   | 金森  | 金村 | 大野  | 伊藤  | 岩井  | 石倉  | 石飛 | 板垣 | 板垣  | 尼   | 久家  |
| 良子 | 栄  | 流石 | 重昭  | 金房子 | 満江 | 桜水  | まこと | 桂子  | 知恵子 | 青湖 | しま子 | 寿美  | 元之介 | 芙佐子 | 水煙 | 草丘 | 夢酔  | れいじ | 代仕男 |
| 小西 | 鐘築 | 藤原 | 福岡  | 竹内  | 豊田 | 舟木  | 恒松  | 吉岡  | 山本  | 藤井 | 藤原  | 原   | 藤東  | 梅野  | 竹治 | 高野 | 高橋  | 高見  | 園山  |
| 雄々 | 京子 | 富恵 | 芳枝  | 寿美子 | 巡歩 | 与根一 | 叮紅  | きみえ | 朱紅  | 晴月 | 河南  | 独仙  | 清子  | 悦朗  | かし | 律子 | きよし | 鐘堂  | 多賀子 |
|    | 滝口 | 渋谷 | 渋谷  | 渋谷  | 奥田 | 千田  | 佐々木 | 新崎  | 浜野  | 大田 | 中川  | 村尾  | 藤田  | 槻谷  | 堀江 | 堀江 | 西村  | 松本  | 勝勝  |
|    | 峻生 | 妙子 | 由紀子 | 久代  | 勝子 | 久栄  | 裕   | 弁次郎 | 肇   | 美磯 | 幸一  | 孝太郎 | 太楼  | 一葉  | 正朗 | 早苗 | 文子  | 湖楽  | 湖楽  |

# 川柳展望 主宰・時実新子

季刊 120ページ

雑詠出句 10句

誌代（年間） 4,800円

〒563-01 大阪府とよの町ときわ台3-4-17

天根夢草方

川柳展望事務局

電話（0727）38-1845

振替神戸 5-49710

## 姫路 川柳化粧櫓の会

暑中お見舞申し上げます

平成元年 盛夏

吉保大大北松松増丁越釣中植

原西江原山浦浦田坪田 塚村

紅岳秋葉越大輝とサみ遊遊客  
ワつ遊

月詩月香山鷹月し子こ光峰子

# 川柳塔とつとり

会長

池田秀和人 岩田喬水 上田俊路 上村平雀 武田帆粒 武田粗歩 中島一風 西尾呼子 西原艶子 西原砂花 早瀬友夫 春木圭一郎 福田多志 前田一枝 美田旋風 山田新風 両川洋々 小林由多香

## 第13回茗人忌川柳大会

ご来会お待ちしております

## うみなり川柳会

鳥取市相生町3丁目204

電話 (0857) 23-4672

暑中御見舞申し上げます

## 川柳塔まつえ

一同

原 長三 松江市大正町四一八

久家代仕男 平田市灘分町一三九〇

金村 青湖 出雲市大津町大曲三九七

恒松 町紅 松江市雑賀町一六八六

舟木与根一 松江市西忌部町二六八一

竹内寿美子 松江市国屋町三八一

松本 文子 島根県八束郡宍道町一区

福岡 芳枝 松江市東忌部町三二四二

浦辺 静江 松江市南平台二二五

安食 友子 松江市本郷町四一二五

佐野木みえ 松江市北堀町九三

柳楽 鶴丸 松江市菅田町二四一九

|   |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |    |    |   |   |
|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|----|----|---|---|
| 武 | 高 | 吉 | 三  | 楠 | 高 | 赤 | 高 | 菊 | 福 | 中 | 児  | 中  | 吉 | 笠 |
| 他 | 部 | 田 | 田  | 崎 | 田 | 木 | 津 | 地 | 元 | 島 | 島  | 原  | 岡 | 原 |
| 一 | 敦 | 治 | つや | 伴 | 昭 | 和 | 三 | 繁 |   | 志 | 与呂 | 比呂 | 美 | 吸 |
| 同 | 子 | 子 | 子  | 子 | 子 | 子 | 郎 | 男 | 稔 | 洋 | 志  | 志  | 房 | 江 |

[illegible]

# 川柳 たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内 静水方

暑中御見舞い

申し上げます

会 副 会  
計 会 長

山 信 石 田 藤 古 古 岩 岡 古 三 森 時 岩 小 山  
内 本 原 村 解 田 田 本 本 谷 宅 井 広 本 島 内  
ほ 房 博 淑 新 静 比 太 文 清 節 不 菁 一 笑 蘭 静  
か 一 子 子 子 造 風 子 虚 晴 水 夫 朽 居 路 子 幸 水  
同

# 日川協長崎大会と五島の旅

奥山美智子



福江空港での一行

六月九日（金）朝からの雨だが、うきつきとした旅心を一杯つめた重いカバンも気にならず、新大阪午前九時半発の「ウエストひかり」で一路博多へ。長崎の地図を広げたり車窓の眺めを楽しみ、お菓子をほはばり、明日の句を考えたりしながら、一行七人（紫香・太茂津・颯云児・三男・メ女・英子さんと美智子）は、それぞれの刻を過ごす。

博多から「かもめ」で諫早へ。バスに乗り換えて小浜温泉に到着。橘湾を見渡す景観のよい宿だった。季節柄、壮観な落日と日の出は見られなかったが、不知火が美しかった。海岸には珍しい「海紅豆」という樹が赤い花を咲かせ、湯煙がたつぷりと噴き上がって旅の疲れを癒やしてくれた。

六月十日（土）朝八時半、待機していたタクシー二台に分乗して長崎へ。約一時間の道のりであったが、小糠雨にけむる雲仙がロマンチックであった。

長崎では眼鏡橋↓崇福寺↓孔子廟↓グラバー邸と市内の名所を見学し、時間の都合で大浦天主堂は素通りして長崎空港へ行く。紫香先生が新阪急ホテル女子寮の寮長をされていた時代、お世話をされた娘さんたちとの十五年ぶりの再会を果たすため、五島へ飛ぶことになった。約三十五分飛んで福江空港に着陸すると、千登子さんが迎えに来ておられ、マイクロバスで福江島内を周遊する。この島にはキリシタンに関する史跡がたくさんあり、福江城跡では広大な池に睡蓮がびっしりと浮き、樹齢八百年という楠が高くそびえていた。数多くある教会の中で、堂崎天主堂とキリシタン資料館を拝観した。明治十二年、フランス人宣教師マルマン神父によって建てられ、後任のベルー神父によって明治三十七年、現在の堂崎天主堂・日本二十六聖人殉教者堂と命名されたという。長く厳しいキリシタン弾圧に耐え抜いた信者の喜びのシンボルで、隠れキリシタンの信念の強さと深さに心を打たれた。

遣唐使船が寄泊したという岬にも立ち寄ったが、強風が吹いてゆっくり眺められなかった。白良ヶ浜海水浴場の白砂をビニール袋に詰めて記念に持ち帰る。美しい椿が咲く頃に来てみたいと思う。最近、この島にベトナム

難民が百人ほど漂着したと聞いたが、新しい異人によってという歴史が塗り込まれてゆくのだろう。

三時間ほど島を巡って民宿「あびる」に着く。夜、大きな石ダイが舟に乗せられて食膳に出され、一同、おいしい海の幸を心ゆくまで賞味した。紫香先生と島の娘さんたちとの思い出話で宿の夜が更けていった。

六月十一日(日) ウグイスのさえずりで夜が明け、窓には島の冷気で雫が垂れていた。朝食の後、福江空港へ急ぐ。空は雲一つない快晴でテラップを踏む足取りも軽やかだ。空から思い出の福江島へ別れを告げる。おもちゃのような飛行機でプロペラが消えてしまふほど回る。広大な空の青と海の蒼が目にしみた。おだやかに風ぐ西海国立公園の海原が鏡のようで、とてもきれいな空を飛べて幸せだと思った。

空港からタクシーで高速道路を突っ走り、全日本川柳大会会場の日昇館へ向かう。約四五〇人が集まった中を、なつかしい方々と会釈を交わす。事前投句と当日課題がはりつめた空気の中で披露された。私たち「七人の侍」のほかに川柳塔関係から奥谷弘朗・小林妻子・羽原静歩・田口虹汀さんの方が参加しておられたが、帰りのエレベーターの中で、思い

がけなく今治の月原宵明さんにもお会いした。ワシントンホテルに荷を置き、夜の長崎を散策、中華街の江山楼で有名な「ちゃんぽん」に舌鼓を打ち、稲佐山の展望台で長崎百万ドルの夜景を楽しむ。遠景の山から眼下の長崎湾にかけてネオンの灯がきらめき、正にダイヤモンドをちりばめたようだった。

六月十二日(月) A組(紫香・諷云児・美智子)は西宮北口句会に出席するため、あわただしくホテルを立ち、英子さんに送られて七時九分の「かもめ」で博多経由で帰阪、残りのB組は、見残した長崎を見物されたが、川柳の取り持つ縁の充実した楽しい旅であった。

### 『夜市川柳』募集(3句)

題 選 者 締切

第3回「遊 ぶ」門脇かずお 8月末

第4回「友」西川けんじ 9月末

第5回「歩 く」但見石花菜 10月末

第6回「首」山本 磔 11月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方

堺 川 柳 会

### 第13回茗人忌川柳大会

とき 8月27日(日) 午前10時

ところ 鳥取市富安

鳥取工業福祉会館(鴻南閣)

鳥取駅南口 徒歩5分

(電話) 23-3181

お 話 兼 題

「童 謡」 阿萬 萬的氏  
「虫」 黒川 紫香選  
「逆 転」 野村太茂津選  
「迷 う」 岩本雀踊子選  
「引 張る」 小林由多香選  
「助 手」 小西 雄々選  
「風」 奥谷 弘朗選  
千原 理瑛選

締切 午前11時30分  
会 費 3500円(作品集・懇親会・昼食含む)  
各題2句・席題なし

投句料 1000円(作品集呈)

当日欠席投句のみの方は、1000円同封で8月15日までに着くようにうみなり川柳会宛投句してください。

〒680 鳥取市相生町3丁目204(森田熊生方)

うみなり川柳会

(電話) 23-4672

# 第25回 路郎忠

## 本社 七月句会

七月四日(火) 午後六時

メンズファッションセンター

七月は「路郎忠」を冠する本社句会とあつて、おはなしは橘高薫風氏。路郎の誕生日が七月十日、川柳のよき理解者であり、『川柳に見る大阪』の共著者で、六月に亡くなった藤沢恒夫の誕生日が七月十二日、ご自身の誕生日はその真ん中の七月十一日という奇しき縁からはじまり、『川柳雑誌』編集部に籍をおき、もっぱら路郎の叱られ役であつた思い出から、「水府にはどこかに柔道を思わせるやわらかさがあり、路郎には剣道を思わせるきびしさがあつた」といふ、作家の目を通して水府・路郎親を描いた藤沢恒夫の一文を紹介し、故人を偲んだ。

また、今月は番傘から亀山恭太幹事長はじめ多数が出席され、森中恵美子氏が席題の選を担当するなど、和気あいあいのふんい気の中に進行、司会からとくに八月六日の水府忌句会へ川柳塔からも大勢、参加することを訴えた。

今月の月間賞は亀山恭太氏が獲得された。

(進行―天笑) (受付―年代・藤子)

(記録―月子・隆二)

出席者―笛生・武庫坊・年代・杜的・冬葉

小林英子・幸・太茂津・藤子・柳伸・寿美・

佳秋・凡九郎・千秀・しげお・颯云児・白溪

子・喜風・紫香・美智子・勝美・メ女・悟郎

月子・天笑・眉水・正坊・歌子・すすむ・柳

影・射月芳・智子・勝晴・栗・三男・満津子

典子・薫風・重人・福本英子・鬼遊・いわゑ

みつ子・利武・章・章久・敏・楓楽・恵美子

狸村・柳安子・安藤寿美子・英壬子・ダン吉

たつお・白兎・文秋・多恵子・柿木英一・甘

平・信治・幹齊・悦郎・東雲・山久・文子・

吸江・隆一・白洋・憲太郎・小路・恭太・緑

八斗録・柳太郎・完次・岳人・頂留子・吐来

恭昌・美代子・昭子・度・シマ子・片上英一

仙吉・寿子・萬的・雀踊子・一二三

### 席題「逆」

小池 しげお 選

逆コース雨の嵯峨野の忘れ物

たつお

世の中を逆さに見てる蜘蛛の糸

紫香

逆転をする一発を持っている

柳伸

逆立ちをしたらすこうし落ち着いた

月子

逆転の一打がドラマめいて伸び

白溪子

薬草の効き目逆さに吊つてある

恵美子

病人に薬のむなど勞られ

太茂津

逆縁の子供に託びる地蔵盆

福本英子

逆の逆読む勝負師の正念場

逆風にはずみをつける下り坂

手負の獅子きつと逆襲するだろ

神様のこぼろびだろ逆転打

男と女逆転劇がはじまるぞ

九回裏大逆転もありました

訃報以後逆さにまわる走馬灯

逆なれば良いのになあ蚤夫婦

逆立ちで歩くと約束させられた

心機一転逆手を使うこともある

逆光になるが一枚撮つておく

逆風へ歩きはじめるとき男

逆上すると自分の傷に触れてくる

満願へ逆さに回る百度石

消費税主婦の逆手が恐ろしい

逆算をして涙の種を拾っている

逆転のチャンスないまま夏が来る

逆風を生き抜いて来た面構え

逆風になつてから知る親の愛

過半数の驕りに逆風吹き荒れる

逆らうと忠犬だつて噛みに来る

民主化へ逆風すさぶ天安門

焦りすぎ逆の考え出てしまふ

逆境にも生き抜いて来た父の背

逆行は御免ふくれる防衛費

逆流に花を咲かせた人生譜

奥さんが先に逝つたら逆ですか

逆のこと言うて気を引く憎いひと

何也得せんのに逆らうのが好きで

信治

勝美

藤子

美代子

白洋

片上英一

楓楽

利武

敏

美智子

笛生

幸

冬葉

杜的

柳影

年代

幹齊

章

いわゑ

射月芳

シマ子

三男

美智子

萬的

笛生

悦郎

緑

千秀

八斗録

逆算をして鈍行の椅子に居る  
逆のこと言つてもわかる妻である  
逆風に負けぬ若さを信じきり  
窓際の判逆さまに押し添ひてあり

席題「唸る」

森中 恵美子 選

うとてたんかうなつてたんか今おわり  
血圧がだんだん上る唸りよ  
美術展唸り通した肩がこり  
唸らせる男に未だ出会わない  
父の日の父唸ってる軍歌集  
四人目も女で唸るほかはなし  
活造り鯛のうめきが聞えてる  
夫の無口少し唸つてみたくなる  
人間のエゴ神様を唸らせる  
ライバルの唸りがこわい棒グラフ  
逆風にあおられ女性票唸る  
唸り節美空ひばりは生きている  
津軽三味海荒れた日はよく唸る  
列島を唸らせているスキャンダル  
年金で唸つてみてもたかが知れ  
くり返す歴史に兵馬俑唸る  
王様の唸りをきいてみましたか  
原爆忌空から唸り降つてくる  
都はるみが唸つてた頃捨てた恋  
獅子の唸りもサーカスは子守唄  
外税へ唸つてばかりいる母で  
点滴の一滴ずつにある唸り  
逆転サヨナラ敵も味方もみな唸り

多恵子 吸江 柳太郎 かげお 天笑 月子 柳伸 いわゑ 正坊 信治 笛生 隆二 典子 山久 藤子 多恵子 鬼遊 歌子 三男 藤子 寿美 美智子 恭太 杜的 福本英子 美智子 天笑

唸るほど見事に咲いた父の花  
浪曲を唸つた父の七回忌  
冷蔵庫が唸つてうさぎ小屋も夏  
唸り風目立ちたがり屋かも知れぬ  
無量寺で唸つた足が軽くなる  
真人間になれと夜半の風唸る  
札束さくさく夏のカラスを唸らせる  
唸り癖ついている犬で気が弱い  
仁王さんの修理仏師を唸らせて  
悪税を叩く輪転機が唸る  
唸り独楽兄もいくさも遠くなる  
風糸の唸りを吾子が誇るなり  
唸らせる術を知つて役者だ  
人間を小さく見せて唸る風  
唸りゴマB29を知っている  
吹雪三日唸つて友の眠る山  
かるい財布でいつも唸っている詩人  
仏さまに唸るはなしをしてあげる

兼題「浜」

春城年代選

砂浜の親子は穴を掘りたがり  
五右衛門がヘドロの真砂数え  
ブラトニッククラブ砂浜に画く頭文字  
不漁続く浜で漁師を捨て切れず  
テトラポット浜に御輿はもう来ない  
言訳も懺悔も落ちている浜辺  
砂浜で童にかえる土踏まず  
押す波に相槌を打つ浜の蟹  
泣きに來た浜憎らしい程に風ぎ

岳人 美代子 恭太 完次 みつお 幹齊 千秀 萬の たつお 柿木英一 柿木英一 甘平 射月芳 かげお 信治 藤子 恵美子 完次 仙吉 杜的 笛生 章 幹齊 射月芳 吸江 完次

やさしさもむなしさも持つ浜の風  
鳴く砂と海の碧さを誇る浜  
傷心を癒す浜辺で貝になる  
浜木綿の闇から一步恋進む  
浜へ出て王様の耳はロバの耳  
落し穴を掘つた浜が消えていた  
寅さんも哀しい時もゆく浜よ  
大漁の浜は一氣に血がたぎる  
霧晴れて男が帰る浜は動悸  
還らない父の記憶がある浜辺  
ローン組む白い浜辺の見える家  
朝撒いた浅蜷にはしやく潮干狩  
砂の哭く浜で二つの影静か  
廃船を焚く砂浜にちちを見る  
浜に泡アツツツカニの自己主張  
くなしりを睨んで浜が満ちて引き  
海女たちの浜の焚火はあけすけに  
埋め立ての浜で拾えぬ波の詩  
この浜で手々噛むいわしとれた日も  
砂浜をころころと夏帽子  
浜辺と松の絆を切った防波堤  
啄木に酔つて浜辺を駆けた頃  
椰子の実のように難民浜につく  
板一枚地獄恐れぬ浜育ち  
八月十五日の浜で泣くのは生き残り  
父の海鍛える浜は岩場だろ  
飽食の浜へ難民船が着く  
韓国の空ビン流れ着く浜辺  
産卵の亀の涙を知る浜辺

いわゑ 恭太 楓来 寿美子 白兎 幹齊 典子 白兎 多恵子 柳宏子 白兎 荒介 章久 完次 楓来 寿美子 隆二 満津子 多恵子 仙吉 悟郎 信治 柳宏子 信治 天笑 雀踊子

鬼界ヶ島流人が泣いた黒い浜  
秋の浜猫がゆつくり歩いてる  
約束のない浜風に翻られる  
甘平 萬 的 年 代

兼題「メロン」 田中正坊選

太陽へ恋してメロン甘くなる  
食べさしのメロンは母が食べている  
代表の顔でベッドへ来たメロン  
瑞 枝

媚びを売る匂いになってきたメロン  
メロン出てひと息ついたフルコース  
柳 伸

加害者のメロンへすこし折れてくる  
デザートメロンは孫がねらつてる  
文 子

飽食の時代メロンも食べ残す  
隣からメロン一切れ届く仲  
八斗 醜

転作のメロンへ雨が降りつつく  
点滴とメロン眺めているベッド  
乾 齊

神妙にメロン切つてる子沢山  
メロン食べるスプーンにすこしスキがある  
美代子

もったいながる母へメロンの値にふれぬ  
病名を告げずメロンを切っている  
福本英子

病人の愚痴を黙って聞くメロン  
髭の手前高価な方にするメロン  
諷云児

寝た切りの母にメロンが熟れている  
七切れにメロンを分けるたしかな眼  
狸 村

ライバルもメロンを買っている見舞  
お見舞のメロンとメロン鉢合わせ  
昭 子

メロンだけ孫のランチへ移動する  
ベッドすこし起こしてメロン食べさせる  
完 次

病人の口にはうまくないメロン  
英壬子 笛 生

貴婦人のように澄ましているメロン  
病室をやさしく包むメロンの香  
高級な顔で並んだ冬メロン  
小林英子

中流の意識でメロン包ませる  
食べ頃を知らず回ってきたメロン  
美智子

メロン食べぬお方もあって会果てる  
減反へメロンで生きるしたたかさ  
歌 子

もったいない顔でメロン食べている  
シャンデリアメロンの好きな銀の皿  
文 秋

メロン畑で風のゆくえを見失う  
仏の日メロンをすくう姉も老い  
勝 美

かあさんの微笑を知っているメロン  
お見舞のメロンが少し喋りすぎ  
重 人

料亭のメロン根回し聞いている  
熟れきったメロンが不倫考える  
楓 楽

中国のはなしは止そうメロン切る  
フルーツの貴族気どっているメロン  
惠美子

兼題「天才」 龜山恭太選

天才のままでひばりは死んでゆく  
天才と言われて重い荷を背負う  
正 坊

天才がどんぶり飯を喰っている  
天才の絵が逆さまに掛けてある  
勝 晴

金借りる時天才に訝えがない  
天才もやっぱり字引き引いている  
小 鹿

五重丸うちの子天才かも知れん  
天才は一人も居らぬ孫七人  
完 次

下駄ばきで出たまま天才もどらない  
天才にたった一人の友がいる  
い わ ズ

天才と狂気三島の死におもつ  
天才へ通天閣の灯が点り  
孫の絵が天才画家に似てきたよ  
英壬子

天才もまず偏差値で測られる  
天才も酒が入ると虎になり  
御 前

嘘つきの天才政治家を志す  
天才が挫折を抜けて丸くなる  
八斗 醜

高卒でプロの四番を打つ大器  
天才と同じ白髪のカラス会  
月 子

B A R B E R の椅子で天才よく眠る  
天才の造った核に悩まされ  
み つ 子

天才も水漬くかばねにしたいくさ  
天才も豊田商事にひっかかり  
太 茂 津

ウィーンの休日シュール像ヨハン像  
長生きをしすぎ天才ボロを出し  
た つ お

触れなば切れる天才のナイフなり  
天才に運命線が短かすぎ  
白 洋

ひまわりを描く天才ではないけれど  
天才の横に居るのがよくしやべる  
白 洋

知恵賢してほしいと天才から電話  
天才でなくても出来る親孝行  
狸 村

天才にお金を貸してそれつきり  
天才は人一倍に母思い  
武 庫 坊

天才でなかりしことはめでたけれ  
雲は天才父の顔母の顔  
信 治

天才は普通の人にあこがれる  
お互いに天才やないよろしいな  
一 二 三

天才が間違っているネジ回し  
天才が間違っているネジ回し  
昭 子

天才の顔がニヒルになつてくる

恭太

兼題「似る」

西尾

葉選

おじいちゃんに似てると嫁は如才なし  
肉じゃがを上手に炊いて母に似る  
ブルドッグ飼つて似てきた顔かたち

恭太  
岳人  
多恵子

兄妹と間違えられた新世帯  
姑に似て陰のある賞め言葉

美代子  
柳影

境遇が似てる仲間の老人ホーム  
子が五人オレに似たのは一人だけ  
木簡に役所は今と似た文句

狸村  
眉水  
完次

先生に似た字を書くようになり  
鬼に似てときに仏に似て恩師

智子  
射月芳

母もまたその亡母に似て苦勞性  
音痴まで僕に似ているから可愛い

楓楽  
小路

丁稚奉公だけは松下さんに似る  
亡妻と同じ叱言を言う娘

甘平  
柳伸

父に似る血をどこまでも嫌いぬく  
似た過去がふたりの歩幅揃わせる

緑良  
千秀

利己主義と短気なところが父親似  
似たような昔があった子の謀反

勝晴  
どんたく

竹人形踊つた姉の背なに似る  
母に似た人から旅の夏みかん

瑞枝  
楠木英一

吉永小百合に似た娘に会える朝の駅  
母に似た杖へ手を貸す交差点

一三三  
柳太郎

似てほしいところは一寸も似ていない  
顔だけは似ても賢兄愚弟なり

敬  
みつ子

傘四本隣もうちも似た暮らし  
ぎつちだけ似て達筆は似てくれず

楠木英一  
千秀

似顔絵へ皺二三本まけてくれ  
伏せてある言葉仏の慈悲に似る

杜的

七癖の二つ三つは父譲り  
似たもの夫婦が寝転んで見る漫画

歌子  
たつお

似顔絵に政治不信が盛ってある  
B型の母娘で少し慌て者

萬的  
柳太郎

そっくりですわねとコロにもないことをいう  
僕に似た犯人がまだ捕まらぬ

白兎  
恭太

円満な家庭にバラがよく似合う  
おばはんの自慢ひばりの声をもち

みつ子  
恵美子

落丁に似た人生にある不安  
他人の空似さつと血が引き血がのぼる

吸江  
年次

ロボットに似た人間が増えている  
女系三代みんな似ている男運

正坊  
恭太

親子とや「タゲイマ」の声間違える  
(清記・楓楽)

楓楽

川柳塔社常任理事会 (7月1日)

▽西尾葉叙勲記念川柳大会の運営全般について最終的に討議。

▽第41回大阪文化祭川柳大会(11月4日)について報告、兼題選者を田中正坊、席題選者を西出楓楽氏が担当することを了承。なお、会費は今回から千円に改定される。

▽9月本社句会を「川村好郎を偲ぶ会」とすることを決定。

▽門谷たす子(西宮市)・小谷美つ千(鳥取市)両氏の同人推薦を了承。

天根夢草川柳集

村合掛

7月1日発行  
B6判・106頁  
¥1,000 (〒210)

発行所 ゆめ書房

〒563-01 大阪府とよの町ときわ台3-4-17  
天根方  
TEL 0727-38-1845

川柳塔唐津支部

暑中御見舞申し上げます

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 山 | 山 | 野 | 岩 | 久 | 山 | 筒 | 仁 | 田 |
| 門 | 門 | 田 | 崎 | 保 | 口 | 井 | 部 | 口 |
| 夕 | 幸 | 旭 |   | 正 | 高 | 朴 | 四 | 虹 |
| ミ | 夫 | 恒 | 實 | 敏 | 明 | 竜 | 郎 | 汀 |

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 後 楽 吟 社

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   | 二 | 河 | 井 | 岩 | 花 | 行 | 荻 | 鈴 | 直 |
| 外 | 宗 | 野 | 上 | 道 | 田 | 吉 | 野 | 木 | 原 |
| 会 | 吟 | 青 | 柳 | 博 | た | 照 | 鮫 | 九 | 七 |
| 員 | 平 | 銅 | 五 | 友 | け | 路 | 虎 | 坡 | 面 |
| 一 |   |   | 郎 |   | 志 |   | 狼 |   | 山 |
| 同 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

暑中お見舞い申し上げます

尼崎  
いくしま川柳会

例会毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尼崎三階  
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎  
おはま川柳会

例会毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五十八  
尾浜公民館

暑中お見舞  
申し上げます

# 会 柳 長

(河内長野市 千代田公民館)

打ちとけて心の窓を開かせる

妹背 明義 千代田台町一八一九

風紋を砂丘に残し去る詩人

奥野シズエ 市町一二九四一一

ライバルも以下同文の中にいる

大西 文次 古野町一三一八

家紋ある甲冑売って今日を生き

岡崎 実 日東町一一二六

馴れぬ手で作る妻への卵酒

柏木 靖子 北貴望ヶ丘四一三

悪い子もよい子も同居する自分

沢田 和子 千代田台町一三一一七

疑問符を少し包んで逢いにゆく

新谷 重子 市町一七七八一七

昆布と豆仲好く炊いて母が好き

田口 吉子 千代田台町六一九

口下手が恋人連れて里帰り

千葉久美男 緑ヶ丘南町四一三一

片思い白衣の天使に叱られる

元浦 修三 千代田南町二九一一

何事かおきれば家紋顔を出す

肥田 ヤス 錦町一五一三一

一人住むそれでも化粧 花菖蒲

水谷 正子 喜多町四七五

女には天使になれる川がある

木太久正一 千代田南町三三一七

うちの娘が愛染かつらのまねをする

山原 昭水 富田林市梅の里一二三一四

好きだから喧嘩しながらついて行く

橋本 弘美 千代田台町一一一八

生命線長きお蔭で今長寿

尾形 敏郎 千代田台町八一四

合鍵を渡したあとの孤独感

川畑いね子 富田林市伏山七三一一〇二

天使のいる部屋へみんなが行きたがる

池 森子 富田林市南大伴町四一一

母の字で田舎の秋が送られる

桜井 莊次 大阪狭山市狭山五二二二三

口下手な三和土に似合う母の下駄

板尾 岳人 富田林市北大伴三二二五



## 西尾 榮叙勲 記念川柳大会

7月9日 なにわ会館

川柳塔社主幹、西尾榮氏の叙勲記念川柳大会が七月九日午後一時から大阪市天王寺区のなにわ会館金剛の間で開かれ、全国各地三五七人が参加した。

大会は橋高薫風副主幹の開会の辞ではじまり、山田良行日本川柳協会理事長が「木杯は文芸関係の最高の榮譽であり、協会にとつても名譽であるとともに喜びでもある」と祝辞を述べ、祝電披露の後、大坂形水氏から記念品、八木千代さんから花束が贈呈された。

つづいて菓主幹が謝辞に立ち、「川柳人を代表して、私がこの光榮に浴したことはひとえに長生きのお蔭であり、これからも川柳における諷刺の精神を失うことなく、みなさんとともにがんばりたい」と語り、いよいよ小出智子さん選『初恋』をかわきりに、事前投句を含めて九題の披露に入った。

各題の天位句は次のとおりで、大会は野村太茂津副理事長の閉会の辞で幕を閉じ、休けいの後、午後五時から同会場で懇親宴が行われたが、まず東野大八氏の発声で幹林、ふあうすと川柳社の田中好啓氏の謡や常任理事全員出演の替歌など、数多くの名演・珍芸が披露され、祝宴を盛り上げた。

猫をいじめて少年淡い恋をする 光森 良  
挨拶がとて重荷の靴を履く 松川 芳子  
慌てると何度もおしきしてしまふ 川上より子  
その日から行方不明の絵が一つ 山川 克子

町内の出世頭は落ちこぼれ 浅野 房子  
枕の下にひとりの旅を入れてある 上島みゑ子  
顔はいつもビックリ箱を持っている 山本 礫  
文学のわかる杯なら受ける 佐藤 藤子  
自分に関係ないとわかつて飲みに出る 野田素身郎

小出智子さんから  
『露の臺』発刊記念として  
金一封拝受いたしました

川柳塔社

# 柳界展望

集録一版・武庫坊

★大阪文化祭第41回川柳大会の打合せ会が6月16日、大阪市役所で開かれ、要項がつぎのとおり決定した。日時は11月4日(土)午前11時から、会場は大阪府中小企業文化会館、会費は今回から千円に改定された。宿題と選者はつぎのとおりで、席題は2題となっている。

「肌」 神前朋義 川柳文学  
「煉瓦」 田中正坊 川柳塔  
「時計」 住田英比古 番傘  
「頼む」 定金冬二 一枚の会  
「潤」 高橋白兔 天守閣  
「最近のニュースから」 柏原幻四郎(瓦版)

★川柳塔まつえ復刊20周年記念大会が6月11日、松江市立婦人会館で66人が参加して開かれ、本社から西尾

栗主幹夫妻、橋高薫風、田中正坊氏らが出席した。大会では、主催者を代表して恒松町紅氏のおいさつに続いて薫風氏のおはなしがあり、「相手」など10題の披露が行われ、栗主幹のユーモラスな「旅」で幕を閉じ祝賀会に移った。大阪から参加した一行は前日、林荒介氏の案内で神魂神社や八重垣神社等に参拝した。

★高鷲亜純追悼句会が7月16日、寝屋川市民会館で開かれ、約80人が参加した。

## ▽刊行△

★芸風書院の『現代川柳選』



集 第5巻(中国九州編)が6月20日、刊行された。定価1800円、申込みは〒113 東京都文京区本郷1-15-4 芸風書院へ。

★「時の川柳」6月号は、第2回時の川柳交歓川柳大会「特集号」として発行。いずも川柳会は「川柳いずも」を「尼録之助先生一周忌追悼川柳大会特集号」として6月18日付で発行。

★現代川柳・藍グループの「藍」は「泉淳夫追悼終刊36・37号」を発行。

★「柳都」6月号で大野風柳主幹が「故高鷲亜純氏のこと」と題して執筆。

★はびきの市民川柳会では10周年記念合同句集「はびきの第4集」を発行。B5判・140ページ・頒価二、〇〇〇円(送料含む)。申込は羽曳野市高鷲8-31-11塩満敏方はびきの市民川柳会へ。

★もくせい川柳会は結成5周年を記念して合同川柳句集「もくせい」を刊行。会

員など50名の570句を取り録。B6判・128ページ・頒価500円(送料実費)。申込は田中正坊へ。

## ▽同人消息△

■林野麴光氏(呉市・本社参事)は目下、九州の別府病院に入院、療養中。横田英詩氏(呉市・同人)からお知らせがありました。

■千原理恵氏(岡山県・本社同人)がこのほど雅号を「理瑛」と改えられました。画数の都合で、瑛の草かんむ

## ▽訂正▲

■7月号の本社句会・兼題「歩く」(80P)の「人妻と歩けば歩調よく揃う」と同(81P)の「三步先歩く妻でよし平和です」の作者は、杜的氏でしたので訂正いたします。

## 新同人紹介

門 谷 たず子

— 栗・薫風・鬼遊推薦 —

小 谷 美つ千

— 紫香・由多香・千代・螢推薦 —

# 各地樹壇

1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。  
毎月25日締切厳守。 担当・玉置重人

## 川柳後楽

井上柳五郎報

ふるさとの名前が消えた地図を買い  
さりげなく白髪なでる父のくせ  
還暦へ夫婦仲良く白髪染め  
白髪が私の人生語ってる  
やせ腰を撫でれば苦勞がよみがえる  
象撫でて違う意見に似た模索  
目で怒り心で撫でる父の顔  
地蔵の顔撫でてバイバイもみじの手  
石橋を叩いて失敗繰り返す  
失敗を繰り返して凡夫老ゆ  
失敗を重ねた過去が今に生き  
失敗談尾ひれがついて風に乘る  
失敗を重ねて積木の塔ができ  
早合点また失敗の轍踏む  
支度部屋椅子で待たせる高島田  
ジパンの若さ気楽な旅支度  
支度などいらぬ裸でかけてこい  
晩成を信じて巣立つ支度する  
病院にこのまゝいたい幹事長

九 坡 照路 浄美 玉水 柳五郎 美代子 美智子 進 紫峰 番茶 義親 哲郎 吟友 青銅 拓治 健一 佐加恵

海底に眠る水爆起こされる  
落書の自作自演に泣くサンゴ  
失敗作の方が世間に評価され

## 聴障川柳

稲田

豊作報

金 吾 秋 月 草 風

パチンコと書いてストレス捨てに行く  
候文で書いた手紙を読み返し  
下り坂ゆっくり来いと言う閻魔

## 川柳東大坂

森下

愛論報

吟 平 邦 人 賛 平

矢印を亡父が残した曲り角  
父さんの矢印急に向きをかえ  
裸電球亡父の姿が藁を打つ  
母ちゃんに陰では父ちゃん負けてるよ  
父は小学 子は高校で孫大学  
父ゆずり僕も左の方がよい  
政局不安に株の動きをにらむ父  
義足の父 色白小柄 山高帽  
孫を見てこれがいつごろオヤジかな  
雑草教育偉大なる愛父を知る  
譲られた父の形見はこの身体  
生真面目に生き父の背が丸い  
父の日も働き通す 子のために  
父がいて母いて子いて平和なり

## 久世川柳クラブ

二 宗

吟平報

シャボン玉誰が吹いても丸く飛ぶ  
噂話鬼が聞いてた昼下がり  
桜には負けじとつつじ山を染め  
十七人の孫に忙しい祝い金  
日本の最上の味握り飯  
田舎から土橋が消えて赤い橋  
こぬか雨好んで傘と街に出る  
一坪の庭で十種の花が咲き  
老残の欲平成の木を植える

秀 香 山 人 志 重 伊 久 栄 ふさこ 江 山 半 仙 美 恵 子 保 恒 甫 正

津軽弁応接室へ通される  
喧嘩か尋ねられて津軽弁  
弘前の訛やさしく津軽弁  
津軽弁毛蟹の顔になって来る  
津軽弁で嫁ぐタレント羨まし  
津軽弁鼻濁音で柔らかし  
津軽弁上野の山にこだまする  
津軽弁水割りにして歌舞伎町

## 川柳塔あおもり

波多野五楽庵報

退院も間近い葉飲む窓辺  
花東に愛のカードがそえてある  
たかがカード安い命を占われ  
老いの身に不用のカードすすめられ  
トランプのエースに僕のきずがある

元 紀 百 合 枝 慶 三 美 子 頂 留 子 雅 士 庸 佑 章 久 孤 舟 勝 美 しんじ 柳 宏 子 公 一 晋 吾 喜 風

叶 つとむ 喜久江 五楽庵 ただお 善保 一花 和香子

津軽弁が似合う真冬の頬かぶり  
井戸端の会議がはずむ津軽弁  
ライバルの度肝を抜いた津軽弁  
標準語とこ吹く風と津軽弁  
上京のロビーの隅に津軽弁  
訥訥として分らない津軽弁

# 城北川柳会

神夏機典子報

腹の子がこを蹴ったと嬉しそう  
まて貝がすばやくもぐる砂の穴  
サッカが好きて蹴るのはお手のもの  
砂のよう恋愛結婚くずれおち  
ルンルンと親の意見も蹴ってゆく  
焼酎にかえられもせず消費税  
蹴りあげた石が自分にはね返る  
蹴ったあと女房相手にしてくれず  
今更に言葉の綾のむずかしさ  
大陸に消しても消えぬ過去がある  
子の成長今年ラストの鯉のぼり  
スランプも蹴とばし明日へ前進す  
蹴りつける力嬉しい育児帖  
コツコツと刻む明治の古時計  
砂山に五月の風が恋をする  
もう金庫番せず眠れる青木さん  
蹴った話が少し尾を引く雨続く  
顔見ると言えぬ言葉が出る電話  
糸車蹴らねばならぬ時もあり  
背を向けて妥協の声を待っている  
砂上棲閣はたちの夢を育てよう  
童心の乳房が熟れた早い春  
老害と言われて詮のない政治

彩人 花進 實 島 甲吉 春雄 よし子 輝子 とみ子 きみ子 新一郎 ふみ 閑石 登美子 公一 市郎 静子 温子 静歩 文子 敏子 達子 テルミ 典子 白峰 純子 倫子

強敵に五分の魂ぶつつける  
新緑に酔えば一瞬刻止まる  
双房へ女の歴史ひそませる  
サイレンに暴走族が蹴散らされ  
洪水が運んだ砂利が使えそう  
野の草に埋もれて在す石仏

# 川柳塔からつ佐志教室 浜本 義美報

未だ死ぬぬ鋸も鉋もよく切れる  
俺のデートを妬く雷神の暴れよう  
ライバルと五時から友に戻る酒  
三代をまだまだ生さる鯨尺  
姑の手の痛みが続く梅雨走る  
ねだられて財布は軽く身は重し  
琴の音を馬も聞いている想夫恋  
条件を言って就職駄目にする  
乱伐に天の怒りか人を呑む  
冷房の利きすぎている老いの肌  
責任を持たぬ言葉は軽く吐き  
五月雨に蓑を知らない農婦居り

# 静岡市川柳塔同好会 永倉 僕川報

脈をとる女医に心も見透かされ  
やさしさの陰で女は勝負する  
全員でビンタくらった日の悲哀  
億の金寄付する人と捨てる人  
第六感五黄の寅をビタリ当て  
あの世では使えぬ金を孫にやり  
今だから話せる過去の古い傷  
金を出す話はみんな逃げて行く  
暇人が噂の種を蒔いている

満津子 きくゑ 史風 秀夫 午郎 右近 紀一 百万両 三枝子 冬子 順子 治幸 茂坊 万亀子 ふさ子 紫泉 ちよ 義美 弧秀 晃授 猛士 金吾 正雄 たまき つね きん

下げ足らぬ頭を垣根へ打つ痛さ  
留守番を犬よりましと頼まれる  
街角で家出と分かる顔に合い  
揚げ足を取られバランス崩される  
ダイヤはめ土地成金が指飾り  
二次会の仲間気の合う恐妻家  
美人ではないが飾らぬ暖かみ

# 三幸川柳教室

桜井

居眠りの子役抱えた舞台裏  
忠実に役を守って嫌われる  
緞帳が再び上がる役冥利  
役どころ心得ているかすみ草  
代役の胸にそぐわぬバラの花  
望遠鏡逆さに覗くから孤独  
逆風が女神になった優勝旗  
逆立ちをしたたら明日が見えるかも  
逆境に母という名を捨てたい日  
尻上がり孫と逆さに見る夕日  
町石を逆に数えて坂おける  
鴉追う策は与作に問うける  
策士だと知って無念の涙のむ  
金策がついてちよつり気がゆるみ  
すんなりと乗った振りする妻の策  
楽天家に見せて心で青写真  
シナリオに明日の策が書き足せず  
キュービットの策略にのる春の宵  
やんちゃ坊主他人の前では借りた猫  
別れたらもう他人よと強いこと

まつゑ 静代 千代 久子 房江 僕川 義美 重次 桂香 靖子 高夫 保州 孝子 晏 和子 英美子 朱夏 鉄治 千枝子 千秀 三千子 (中)幸子 結実 かなめ 又好 玉枝 天耕

久しぶり他人行儀で息子が帰る

他人ごとのように頼みを聞くあなた

他人から見れば齢には不足なし

目くばせに他人ではないものを見た

他人には優しく見えるわが夫

家裁出て元気でやれという別れ

受かつて落ちてでもよろし他人の子

智水庵

みね

幸子

カヅミ

愛子

純子

利子

智加恵

正子

高代

ふみ

玲子

寿々子

恵子

重弥

とも子

花子

千春

朗子

瑞枝

より子

富美子

やえ

てい子

無理すれば釘はすねて曲つて

岸和田川柳会

植山

武助報

八重子

富志子

希久志

さよ子

武助

天笑

ダン吉

ひで

こう

通彦

一弥

すみえ

喜久子

浪速子

狸村

甘平

初太郎

月子

久保

正敏報

虹江

四郎

義美

ちよ

ふさ子

高明

朴竜

久保

正敏報

虎江

四郎

義美

ちよ

ふさ子

高明

朴竜

タミ

### 佳句地10選 (前月号から)

久保 正敏選

淹壺の渦から出られない落葉

冬の絵にやがては消える朱をそそぐ

千羽目に近い鶴ほど頼られる

生きる欲あつて日向に出ない苦

焼酎の酔いが憎んでいる政治

神様の返事のような虹が出る

貌のない男ばかりが続く街

止り木の無口は世辞を聞いてない

童顔の戦友甦る基地の雲

お母さん風邪をひいたかまだ起きぬ

煩惱を洗ってくれるカーネーション

文化とはテーブルの経を巻き戻す

柳泉尾

吉川

寿美報

菜の海で思い出すゴッホ脈の乱れ

連休を慰めるに来る雨蛙

退社ベルうるむネオンの雨酒場

霧雨にバラうなだれて何思う

八方美人自分のカラー出せぬまま

申告書紙一枚にある重み

パートとは紙より軽い身分なり

生き死に契りも別れ紙一つ

紙人形濡れて哀れな人生よ

風呂敷の出番なくした紙袋

満洲子

敦子

三世

眉水

治子

雄々

盛桜

鬼遊

薫風

白漢子

幸夫

小五孝弘

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

幸夫

窓際で余生楽しむさくら草

灯を消した窓を覗いた春の月

早朝の出窓に雀のお客様

窓開けて夫の漁船待つ夜明け

一言が心の窓を開かせる

良き日なれ念じて聞く朝の窓

窓や戸を閉めては開く口げんか

空気で水でも太るユアサイズ

嫁さんと空気のようになれるまで

この分じや今に空気が税がつく

風は音空気が匂い雲は形

こないない空気を知らぬ地下の街

ライバルと同じ空気を吸っている

それ以上言うゝと空気が重くなる

日の丸弁当日本史詰めて消えて行き

腰弁のきこりの歌が耐える

弁当の味を嘗めてる妻楊子

人生と同じ紙にもウラオモテ

生花展別の世界にある空気が

日の丸弁当二度と戦に子はやらぬ

### 京都塔の会

松川

杜的報

物言えは医者薬がまた増える

泣き顔も亡母に似てきたなとおも

躑躅燃え笛飯のうまい里

高野槇亡夫へ土産に山下る

久留米がすり一番似合つ姉でした

人生はドラマ私は通行人

跨がない溝がだんだん深くなる

ばたんから紫らんに変わる乙訓寺

撫で牛に見つめられてる天満宮

みつ子

義一

伴子

白水

洋子

美津子

三子

はつ子

恵美

文子

靖子

シメ子

弘子

美代子

和子

トミ子

しげお

敏

美南子

寿美

乙訓寺修業大師と巡り合う

歌碑立派菅公さんの若みどり

下積みの芯は地獄も驚かぬ

どの芯も主張持つてる皿回し

心棒がはずれて夫婦面白い

お茶づけさらさらそんな夜食を禁じられ

さりげなく謀反を抱く花の芯

核心には触れずに眼鏡拭いている

帯芯が丁度かたさの形見分け

アカシヤの花がこぼれてまぶしい太陽

寶石のまぶしき指に似合わない

信仰の目には菩薩がまぶしすぎ

母の日の母に花束まぶしすぎ

脱皮する蝶にまぶしい花時計

洗い髪さらさらとかさおぼろ月

文句などさらさら言わぬ目が怖い

さらさらと流れのようなお付き合い

さらさらと砂は心をほぐし合う

さらさらの砂が反逆ころもみる

三代目だんだん芯が薄れかけ

すらすらとスケッチ太い芯で書く

### 川柳大販

中原比呂志報

妥協して親馬鹿打つ手打って居り

花好きで貧乏知らにまで好かれ

金運の重さを知らぬ俺の背な

土地の値が上がつたです資産税

子か孫の代に実がなる杭を打つ

柏手を打って願いを置いてくる

後釜はけじめ浄化で揉める国

打つノミが命授けた眠り描

芳子

静江

求芽

ただし

葉子

英子

萬子

文子

女子

白漢子

飛鳥

正坊

杜江

孝江

諷云児

達子

美智子

美穂

いさむ

紫香

屋上の遊園地が孫の天国で

枝ぶりをほめて頑固をやわらげる

走り梅雨次はどなたが総理ナノ

会津つばが汚れた椅子はお断り

胸の花三十余年は内助の功

栄転も左遷も花束で見送られ

忠告は聞かぬ娘のイヤリング

間違ひもあつて算盤人間味

税込みと便乗値上げ澄まし顔

竹やんが退けば株価が跳ね上る

打たれても忍の一字でうそをつく

花道を今日定年という主役

仏壇の花が枯れてる罰あたり

花売りの声聞こえそう石畳

リクルート枝の重みで幹が折れ

胸の花萎れて公約忘れ去り

### 八尾市民川柳会

飯田

悦郎報

言いつは秘書に聞いてとその場逃げ

大臣の椅子が汚職で値を下げる

大臣の妻も英語の一夜漬け

追及をかわす大臣の二枚舌

新米の大臣商社の餌にされ

大臣に折れる言葉のないバツジ

坂道の途中で姿勢立て直す

決断をする気にさせた男坂

女坂嫉妬の鬼とすれ違つ

坂みれば転がる癖の斬られ役

次の世も妻に押される坂だろう

これからの坂を夫婦で考える

雑草でやがて売られる牛が寝る

天平

鉄心

凡九郎

敏

一步

酔舟

しげお

希久志

正之

本蔭棒

司

雅栄

笑風

幸一

三千雄

比呂志

しんじ

美津留

喜風

頂留子

寛然坊

悦郎

庸佑

とみ

柳宏子

憲太郎

章

一高

浩一郎



年代

保藏 義嗣 弘治 六浦 十四郎 澄子 昌子 白漢子 定人 歌子 佳秋 紫香 向西 美智子 美智子 敏之 美代子 夢之助

弘

六浦 十四郎 澄子 昌子 白溪子 定人 歌子 佳秋 紫香 向西 美代 美智子 諷云児 敏之 女 美代子 夢之助

夢之助 美代子 敏子 風云里 美智子 美智子 向西 紫秋 佳秋 歌人 定人 白溪子 昌子 澄子 十四郎 六浦 弘治 義嗣 保藏 敬 武庫坊 靜夢 美智子 敬 年 園步 年代

欠点も長所もあつて話しいい

### 川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

### 川柳塔まつえ

恒松

叮紅報

醉昆布の味を占めてる君が好き  
戦争を知らない人が旗憎む

目標へ迫る一步は音高く

武庫坊

道順を聞いた相手も旅の人

緑良

### 川柳ささやま

遠山

可住報

代仕男

丸すぎて高い座席に落ちつけず

光代

ライバルも苦しいだろうのぼり坂

正坊

五月晴れノルマ果せと万歩計

金之助

ひと言で足りる威厳が父にある

武雄

父さんの席は大樹のてつぺんだ

由多香

春の夢拾ひ集めて詩にする

エキオ

父の顔思い出しつつお経読む

美智子

才能を信じて渡る丸木橋

美つ千

陽を集め七彩の橋夢を織る

つや子

紙とベン父に一合あればよい

瑞穂

才能に溺れて人も木も見えず

桂子

干からびた愛へ尋ねる片思い

富美

土壇場で父の一言甦る

凡太

帳尻を合やす才能だけは持ち

静恵

おんなです火種あるうち燃えんかな

テル

危機迫る保護色という神の加護

照子

梅干しがだんだん甘くなる世相

雨学

種播いた貸農園にでかい夢

とみ子

死期迫り夫も優しい顔になり

登志代

どん底でもらう涙に味がある

薫風

純行に乗り換へ余生まだ燃やす

百合子

身に迫る思慕へ切り込む孤児の悲

静代

許されて空気の味のすばらしさ

寿美子

一か八乗るかそるかへかける夢

ヒサ子

狭いともいわずに友が寄つてくれ

忠雄

横顔にホクロがひとつありました

千代

魂を売って哀しい飯の種

千代子

狭いとこ無理に通したあとの味

紀美子

一日のスタート蛇口から貰う

千鹿

種牛で用が済んだら肉にされ

貞子

金魚鉢の狭さへ琉金馴らされる

公子

未来図はお釈迦さまにも見て貰う

和美美

魂を売って哀しい飯の種

越山

しよっぱなから男に狭い門がある

紀久子

長女の未来二女の未来は考えぬ

房子

うれしくて噂は風に乗ったまま

可住

狭い国空間利用考える

萬的

未来際おんなを離れない蛇神

蘭幸

川柳だけはら

森井

最高の席で背中がむず痒い

信子

思想とはべつ頂上に立てた旗

とみお

小さい字の本もよみたい二年生

青居報

欠席の顔を一日しまいいこむ

裕美

旗を出し今日も元氣と老夫婦

静水

鳥はいない自由に空を飛び回る

小四郎

譲られた席に欠伸がおいてある

輝子

鐘の音を聞きたくもよし夫婦旅

米子

おかあさんへびのおしりはどこにある

保裕

気が向けばおおいで席は空けてある

正博

語るもよし語らぬもよし夫婦旅

完司

会者定離噛みしめ父の髭を剃る

青居

末席で幹事は酔えぬ眼を配り

豊太

旅人のままで心の紐を解く

好啓

ひとつこの面を外してから眠る

蘭幸

その席に寒い男の首がある

信秋

一人旅無縁のとこかないとこへ

文子

真赤なトマトが欲しくて苗を買う

節夫

女生徒に首席好かれる目鼻立

天彦

逃げて行く相手でない手をつなぎ

鶴丸

お年寄り使わぬ金を持ちたがる

清水

招待をしたのに席が埋まらない

稚代

宇宙旅行ババノラマだ汚すまい

青湖

大人めくちよつと気どつたユニホーム

清水

特別席庶民のくらしなど見えぬ

紫香

ウインドで旗を立ててるBランチ

友子

労働歌もう唄わない種を蒔く

栄恵

代仕男

叮紅

変哲もない石ころに氣を取られ  
願望と見榮で囲んだアンケート  
さりげない善意に出合ふ牡丹花  
亡母の聲聞こえて今日も恙無し  
男手がなくて思案が長過ぎる  
余生がわずかペンを持たずに居られない  
方舟に乘れずともよし今を生く  
魅せられた花は自分の彩でぬる  
音痴でも指名されたら逃げられぬ  
眠れない夜のワインはグツと飲む  
牡丹花よ愛の極みと咲きはこり  
早足になって四十路が暮れてゆく  
口止めを守り通して下駄を履く  
チャンスさえあれば飛びたい籠の鳥  
和顔愛語そのままに父旅立ちぬ  
般若心経そらんじる頃旅おわる  
ストライクめつたに出来ない始球式  
(遺句) 昼夜の別なく快眠が続く幸  
訃報がつく若葉が目にしみる  
ストレスに拍車をかける雨つづく

倉吉川柳会

渡辺

昔句報

俊夫 静佳 喜久恵 麻代 浪子 喜美子 伸子 一枝 愛子 ふさ枝 康子 笑子 一路 博子 淑子 静風 新造 シゲヨ 房子 比呂子 寿朗 秋草 千代子 よしえ 喜美子 満春 康志 さつき はるお

親指にごめんなさいと謝らす  
物を言う指が五本のなかに居る  
約束へ熟柿が一つ落ちてきた  
約束を守る指切りならしうよう  
貰うものあるから議員やめられぬ  
毎日の約束ですと陽がのぼる  
親切を貰い過ぎてはいませんか  
浮気などしない約束キー切る  
約束をいっばいつけた紙袋  
人差し指は他人を殺す指になる  
いろいろな言葉を焚いてひとりの夜  
もらいものすこし賭絡の匂いする  
九本でも十一本でも困る指  
平等なカタチで貰う陽のめぐみ  
目印になるからノート灰にする  
目印はさすがに源氏螢です  
貰うつもりで大風呂敷を持ってゆく  
目印に歓迎門を建てて置く  
猫の子じやあるまいに嫁貰いはなれ

南大阪川柳会

中川

滋雀報

京子 みなと 雄々 かつみ 秋人 亜弥 螢 やえ 御前 ゆり子 荒介 秋女 瑞司 瑞枝 次男 石花菜 千代 独歩 苦句 藤子 信治 寿美 新造 慶三 千梢 度 文秋 章 正好

死の谷を覗く死ぬ気はないけれど  
外面の良いのがピアノから帰る  
外面を飾るボタンをかけちがいく  
うわべだけ愛想笑いを添えておく  
外面にたとわれチャンス逃がすはめ  
外面はアツケラカンの一本氣  
外面がとてもしやさい鬼が来る  
影武者の吐息きこえる闇の底  
午後三時の吐息を聞いているコケシ  
病人の耳が吐息を聞きとがめ  
宝石店軽い吐息で通り過ぎ  
歓声と吐息飛び交う甲子園  
吊籠が税の愚痴飲む小商い  
飲み過ぎて話ぐるぐる回り出し  
反省をせぬやけ酒は罪の色  
お茶を飲む作法もあつて京の宿

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

曲 hands 作二郎 滋雀 頂留子 勝美 公一 楓子 柳宏子 トミ子 岩久 章佐 庸佑 柳伸 喜風 好栄 はるみ 蔵栄 ヒデ子 智重子 かつ子 聖子 鈴江 悦良 北斗 博利 清泉 白汀

南海川柳会

飯田 悦郎報

大切にしたい組織の和と絆

大切な人だと思ふ別れ道

大切にされて爺ちゃんばけくる

ぶっさらばう言葉の中にある好意

すぐ好きと喋るオウムを持て余し

好き嫌い許さぬ母の夕の膳

地方から今年も新茶母の愛

梅地下で地方の匂い嗅いでいる

故里が同じ地方でうまが合い

宅急便地方の味を近くする

市場には地方から来た魚跳ねる

不器用に暮し原則し知らず

たて前の原則論になり真味

腹八分守りとおした四面楚歌

原則の中に本音も顔を出し

暴走車捕らえば車体の部分変え

子を褒めて叱る部分を貯めている

検察も掘り返せない一部分

部分的に調べられて悲しい眼

川柳塔とつとり

岩原 喬水報

暮らし向き上向いただけ情が冷え

背信の背なを冷たい目がたたく

身に覚えなない人形が釘打たれ

人形になった姑なら慈しむ

人形を抱いておんなの腹話術

人形のように見合いはかしこまり

弁当のおかずを分ける仲の良さ

腰弁で採した嫁にいびられる

多可志 圭一郎 艶山 喬水 新風 一枝

母のない子の弁当が覗かれる  
出世には遠き弁当詰め続け

初当選ビリでも笑顔こぼれそう

浪人にふれず入学祝つてる

無実の身祝つてくれる空青い

お祝いを冷やかに見る顔もある

川柳藤井寺

高田美代子報

金女 嫌いと言えは嘘になる

名をなせば苦勞話に箔が付き

有名になって本家や元祖出来

嘘ばれた夜は独酌我慢する

紫陽花になれず一色守り抜く

花活けて淋しき隠すのも女

花園がほしい都会の鳩時計

スラスタと出た嘘叱る脇の汗

種切れの嘘へ信州の叔母死なせ

うそも方便つかねばならぬ事もある

連休は庭の手入れをやっただけ

涙で誓う男の嘘をまた信じ

かくれんぼは鬼はとくに帰ってた

タレントに似ていて得も損もする

閑魔しか判らぬ嘘が多すぎる

花散つてみどりの私語が騒がしい

チャップリンのロマンに嘘は生きている

嘘を言う真面目な顔を見つめてる

四季の花絶やさぬ母が居てくれる

指切りの母の小指に嘘はない

ポリグラフより正確な母の目よ

仲人の嘘で結ばれ共白髪

罌粟の花散つて女の隠しごと

俊路 帆雀 友夫 呼風 砂山 旋風 志洋 三郎 吸江 治子 隆二 比呂志 繁美 須美 敦子 昭子 与呂志 美房 寿美子 末一 伴子 正枝 婦美枝 信子 政代

無人駅今雑草の花盛り  
神様のげんこつだった事故だらう

日焼けより白髪かくしの春帽子

草に寝て五月の天に吸われゆく

奴 湯豆腐心が揺れる独り膳

山若葉簾はサツキ燃えている

雑踏の中で孤独に気付かない

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

魔法使いの主宰もついに手をあげる

買ひもせぬ春の衣裳をみな覗き

信号を待つ私も春の顔

年金の暮しへ二兎は狙えない

四コマの漫画の中でけつまずき

追伸に温い言葉が添えてある

失言を気にせぬ人で頼りなし

お国のためだ我慢しろよ消費税

父の日も朝寝が出来ぬ参観日

身は軽し役目は重し一円貨

野心家が君のためだと思にきせ

一道を極めた人の深い顔

満ち足りぬ心を抱いて灯の街へ

玄関に吾輩づらの猫がいる

悪人が寄つて後継首相決め

美しく見せる角度に花飾る

一句でよい想いだけの野心作

雷の父にもあった泣きどころ

替え部品無い党部品だけの党

いざ鎌倉母は鬼にも蛇にもなる

方円の水の陸さに任せよう

休日が増えて予算を狂わせる

作秀 和子 雅美 彩 和美 初枝 美代子 巡歩 早苗 寿美子 雄々 雀踊子 紫泉 たつみ 紫映 白峰 原兆 梅朗 典子 温子 宗光 螢 邦俊 柳風 善政 節子 妻水 喬水



無理無体政治漫画が受けてます

泳げない夫婦の鯉がキッスする

美談の碑青葉の蔭によく似合う

勇氣ある言葉に無理を引っこめる

泳ぎ抜いて波の高さには触れず

見栄張った無理が財布にこたえる

カード手にするといついつい無理をする

あの人が美談の主と後で知り

無理な線前へ行った戻り

ちよつと無理はいくらだった好きな人

河童にも泳ぎ切れない淵がある

泳がせて置けばそのうちぼろ出そう

無理してもビールのように飲めぬ水

泳いでるようにごまかす鯉のぼり

### むらくも川柳句会

藤井

明朗報

梅雨晴れの鮎を投網の目がねらう

役柄は問わない夫の健やかさ

役柄がつけば器量もついてくる

本当は少し混じっている噂

梅雨末期工事現場があわて出す

人気役者その役柄は汚れ役

雲一つ残して梅雨の中休み

晩酌が楽しみ父の唄が出る

お早うの声に楽しむ朝がくる

雨降りのぬかぬか園児の声はしやし

サイレンは近火とわかる騒ぎよう

慈雨であり豪雨ともなる梅雨末期

### 川柳高知

川竹

松風報

公園の別れだんだんドラマめき

幸泉

美津枝

東雲

春子

為子

良江

照子

楓子

仙吉郎

綾子

光子

みつ子

登志美

いつを

鬼遊

明報

正朗

芳子

鶏子

秀子

義良

巡歩

幸夫

梅園

幸子

三津江

明朗

峰雪

どちらともとれる返事にまだ迷い

あじさいの花にあずけた愛一つ

葉桜になって鼻風邪未だぬけぬ

早乙女の足跡そのままだに実り

負けてから助言聞いてもう遅い

大会の助言者ばかりの時が過ぎ

扁平足亡夫が残した道しるべ

足跡もない生涯を土に生きた

足跡を辿り大師の徳に触れ

自分史へ筋書き少し変えるベン

犯人は猫歴然と五ツ紋

### 川柳後楽

井上柳五郎報

意味のない笑い不気味な貌となる

苦しみを笑いに変えて生きる術

潮時を違えた笑いで場がしらけ

若さとはいいなコロコロよく笑い

美女百態刺の中からウインクス

図に乗った雑魚に刺が突きささり

おとぼけのうまい女の小さな刺

嫌な役罪滅しに買って出る

罪を喰い罪を吐いてやめ己が口

MMC二桁多くてやめにする

匙加減一つで決まる採点表

採点は極の中で指を折る

アンケート採点厳しく書いておき

人生の採点えん魔がしてくれる

ミス選ぶ裸身へ審査のたのしみ眼

お茶汲みもう採点をする男の目

婿採点老眼鏡ちよつと下げただけ

法の網くぐり抜けても罪は罪

竹萌

千恵子

一求

和郎

恒子

功子

朱坊

佳風

菊野

松風

青銅

玉水

博友

浄美

照路

桃風

健一

金吾

吟平

佐加恵

進

拓治

秋月

たけ志

柳五郎

草風

美智子

義親

### 小出智子川柳句集

## 『路の臺』

体裁 A5判・一六八頁(美装)

頒価 二、〇〇〇円

申込 川柳塔社事務所または

小出智子氏へ

発行所 川柳塔社

滝水にうたれて流す千の罪

### サークル檸檬

藤田 泰子報

哲郎

おもちゃ箱遊んでくれる人待つ

不意の雨大きな虹に拍手する

虹色に光る真珠にあこがれる

全山のみどり萌えたつ花火なり

遊びにもしんどの年になりました

目の奥に海にかかりし長い虹

封筒の中から虹がとび出した

緑にも濃淡があり山茂る

七色の虹に灰色僕に見える

### 川柳塔用箋(二冊二〇〇円)

送料が変りました。

一冊二五〇円・二冊三六〇円

※数量がまとまれば、ゆうパックにする方が大分、お得です。

# 8 月 各 地 句 会 案 内

|                       | 日 / 時 お よ び 題                    | 会 場 と 投 句 先                                                                       |
|-----------------------|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 尼 崎<br>いくしま           | 4 日(金)午後 1 時から<br>続く・帽子・自由吟      | サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分<br>〒661 尼崎市南清水11番 1 号 田淵定人<br>句会費 300円 投句料 62円切手 3 枚        |
| 川 柳 塔<br>まつえ          | 5 日(土)午後1時半から<br>弱 点・水 着・似 る     | 松江市和多見町 慈雲寺番神堂<br>〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅<br>句会費 300円 投句料 300円(62円切手可)               |
| 川 柳 塔<br>わかやま         | 6 日(日)午後 1 時から<br>叩く・宝・多数・玉      | 近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前<br>〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津<br>句会費 500円 投句料 62円切手 5 枚            |
| 八尾市民<br>川 柳 会         | 10日(木)午後 6 時から<br>帽子・飲む・背中・半額    | 八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ<br>〒581 八尾市弓削町南 2-141 飯田悦郎                                    |
| 西宮北口<br>川 柳 会         | 14日(月)午後 1 時から<br>点・癖・自由吟        | 西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩 5 分<br>〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代<br>句会費 300円 投句料 62円切手 4 枚   |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯 の 花 | 17日(木)午後 1 時から<br>覚悟・許す・ゴシップ・自由吟 | 高槻市民会館305号室 阪急高槻徒歩 5 分<br>〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島鳳云児<br>句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題 2 句 |
| 富 柳 会                 | 17日(木)午後 1 時から<br>紐・開く・久し振り      | 富田林市中央公民館<br>〒584 富田林市南大伴353 池 森子                                                 |
| 南 海<br>川 柳 会          | 18日(金)午後 6 時から<br>盲点・小形・符号・活用    | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分<br>〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲                              |
| 南 大 阪<br>川 柳 会        | 19日(土)午後 6 時から<br>鉢・間・矢・落        | 寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米<br>〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋<br>句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚      |
| 川 柳<br>ねやがわ           | 20日(日)午後 1 時から<br>背中・気力・好物・自由吟   | 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前<br>〒572 寝屋川市春日町 6-9 高田博泉<br>句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚   |
| もくせい<br>川 柳 会         | 21日(月)午後 1 時から<br>昔・ビール・敗れる・自由吟  | 豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩 5 分<br>〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番5-801 田中正坊                           |
| 川 柳<br>東 大 阪          | 26日(土)午後 6 時から<br>汗・波・やさしい・代官    | 東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣<br>〒577 東大阪市菱屋西 5-6-23 桑原喜風<br>句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚   |
| 駒つなぎ<br>川 柳 会         | 28日(月)午後 6 時から<br>干す・無事・勇気・欲しい   | 寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米<br>〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸                            |
| ※堺川柳会は今月お休みです。        |                                  |                                                                                   |

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(郵券可)、各題 3 句以内

原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

# 高鷲歪鈍追悼 本社8月句会

日時 8月7日(月) 午後6時  
会場 メンズファッションセンター3階  
中央区内本町1-1 電06・941・1918  
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし  
兼題 「報いる」 黒川 紫香  
「たしか」 津守 柳伸選  
「詩」 塩満 敏選  
「立派」 里小路 小選  
西尾 栞選

席題 2題 当日発表 各題3句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。  
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。  
投句料310円(62円切手5枚)同封のこと。

## 本社9月句会 9月4日(月)

兼題 「川」「村」  
「遍歴」「珈琲」  
川 柳 塔 社

小出智子句集  
『路の臺』発刊記念句会  
とき 8月13日(日) 午後1時  
ところ なにわ会館金剛の間(東)  
兼題と選者(各題3句)  
「帽子」 西出 楓葉選  
「一日」 谷垣 史好選  
「玄閑」 金井 文秋選  
「美味しい」 中尾 藻介選  
「昔」 西尾 栞選

会費 五百円  
主催 川柳塔社

## ●募 集●

10月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選  
水煙抄(10句) 黒川 紫香選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
茴香の花(3句・女性) 小出智子選  
「窓」 松川 杜的選  
課題吟(5句) 「結ぶ」 稲葉 冬葉選  
「時計」 田口 虹汀選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

11月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選  
水煙抄(10句) 黒川 紫香選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
茴香の花(3句・女性) 小出智子選  
「糸」 桜井 千秀選  
課題吟(5句) 「高い」 辻 文平選  
「灯台」 榎本 吐来選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

定価 六百元(送料56円)  
半年分三千八百円(送料共)  
一年分七千五百円(送料共)  
一九八九年七月二十五日印刷  
一九八九年八月一日発行

編集兼 西尾 栞  
印刷所 藤原 童心 社  
〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室  
発行所 川柳塔社  
電話 〇六六元一六九一四番  
振替口座大阪81-333六八番

# 西尾 栞 叙勲記念川柳大会 事前投句「自分」入選句

来賓・先輩並びに選者方の玉句

有難うございました

(50音順)

自分史を出します秘書は筆が立つ  
自分には過ぎた女房と皆が言う  
はしやいでる自分に自分嫌になる  
自分だけ耐えてきた気の老夫婦  
もうひとりの自分が酒を飲みたがる  
億ションの哀れ自分で鍵を開け  
ノアの箱舟に自分を仕舞い込む  
ばかな奴めと自分にも言いきかす  
余は満足そんなカラオケ聞いてあげ  
玉葱の皮をむいている自分の手  
睡蓮が自分の化身だとしても  
敗走記わたしの半生記を晒す  
自分のことだけを思っている鏡  
ピンボケの写真が自分史に似合う  
煩惱の渦に溺れている自分  
自分からやる誰もせぬ掃除

岩井 三窓  
有働 芳仙  
大坂 形水  
大矢 十郎  
奥山 晴生  
梶川雄次郎  
片岡つとむ  
金井 文秋  
龜山 恭太  
北畑 金治  
橘高 薫風  
木野由紀子  
小出 智子  
小林由多香  
久家代仕男  
志水浩一郎

自分との対話静かに石の庭  
定年や自分の上に妻がいる  
子の語尾に自分が見えた恥ずかしさ  
兵隊の哀れは自分としか言えず  
好きでない自分とお茶を飲んでいる  
本当の自分を見失う鏡  
自分だけは別や別やと言いきかす  
生かされて自分と妥協してしまう  
水鏡踊るピエロは僕だった  
朱を入れて仏と自分の距離にする  
晩年の幸せ自分史を飾る  
仏より自分の都合に手を合せ  
自分自分と功七級の父がいる  
も一人の自分が翹べとけしかける  
自分だけいい子になったかたつむり  
釣り糸に自分が掛かることもある  
自分との闘い自分で決めたこと  
この人は自分をしっかり持っている  
酒が不味い自分に負けたせいだろう  
あせるまい自分ひとりの世ではない

住田英比古  
田中 好啓  
玉野可川人  
東野 大八  
中尾 藻介  
中田たつお  
西田柳宏子  
野村太茂津  
浜野 奇童  
波多野五楽庵  
藤井 明朗  
藤村 女  
保木 寿  
本田恵二朗  
三井 醉夢  
八木 千代  
山内 静水  
山本 礫  
山本 翠公  
米沢 暁明

# 入選 (1011句)

ゼンマイが背中中で自分では巻けぬ  
 自分にも勝てぬ男が何を言う  
 わたくしを飾る言葉を撰って朝  
 汗拭いてふいて自分をとり戻す  
 自分では老いを認めぬ白髪染め  
 おだやかな自分を釈迦の御前に  
 うっかりといやな自分が出てしまふ  
 不器用な影と一緒に生きてゆく  
 うちの犬自分は犬と思てない  
 ほとけ道歩いて許すのは自分  
 時々痛みで自分取り戻す  
 ええかっこしてる自分に寒くなる  
 自分を知って戦に紅を引く  
 均等法 靴は自分のだけ磨く  
 自分とは何か考えてるロゲン  
 沈黙考自分の殻を見るラッシュ  
 自己主張過ぎて自分を見失う  
 B面の顔は自分だなどと思う  
 自分との闘いでしたガン告知  
 これからの自分を思う朝の粥  
 自分から「懺悔してる」と言い出した  
 芥子の花自分の罪は知らぬげに  
 自分史の節目節目に人の恩  
 三面鏡右も左も自分なり  
 自分では何もできないお父さん

都倉 求芽  
 田中 隆二  
 林 荒介  
 古川 一高  
 山口 美穂  
 中原 颯人  
 原 さよ子  
 高杉 鬼遊  
 桜井 千秀  
 片岡 湖風  
 牛尾 緑良  
 丸山よし津  
 稲葉 冬葉  
 越村 桔梢  
 吉岡 美房  
 津守 柳伸  
 浅野 房子  
 半井 甘平  
 杉森 節子  
 和田維久子  
 天正 千梢  
 寺沢みど里  
 堀江 光子  
 西口いわゑ  
 田中 正坊

大阪城描く自分の日曜日  
 気がつけば自分の彩が嫁にしむ  
 二位にいる自分を信じまだ抜かず  
 居職の父自分の腕を信じてる  
 影だけは自分の味方と信じてる  
 欲のない自分を妻が見捨てない  
 自分だけルール守って馬鹿にされ  
 羅針盤自分について来いと言う  
 高齢化医師も自分の脈をみる  
 お茶漬にやっとな自分をとり戻し  
 自分にはきびしい姑でお人好し  
 自分より器用な人と手をつなぐ  
 やつとこさ自分の顔に慣れてきた  
 自分から弱音吐けないブリマの座  
 自分の中に好きと嫌いがいて困る  
 足跡が自分のものでホッとする  
 一徹な自分憐れむのも自分  
 余白には素直な自分描くことだ  
 自分から言えぬ良い事悪い事  
 弥陀の前で自分に還る花明り  
 躓いて自分の面につけかえる  
 生き急ぐ自分が見える船着場  
 ご自分でなさいと愛の変わり様  
 自分には負けたくない芸の幅  
 耳病んでやっとな自分を抱きしめる  
 けんめいに自分の殻を割っている  
 自分史のペンは戦が遊び

堀口 欣一  
 野坂 なみ  
 小西 雄々  
 佐藤 藤子  
 松川 杜的  
 辻 白溪子  
 若宮 武雄  
 松川 芳子  
 横田 英詩  
 谷垣 史好  
 赤川 菊野  
 石垣 花子  
 新家 完司  
 福井 桂香  
 松本 元江  
 高橋千万子  
 上田 佳秋  
 林 かつ絵  
 山川 克子  
 橋本衛門七  
 山本憲太郎  
 神平 狂虎  
 榎本 吐来  
 竹森 雀舎  
 田頭 良子  
 光井 玲子  
 藤井一二三

本當の勝利は自分に克つことだ  
 手鏡が自分の隙をついてくる  
 自分史の美点に触れぬ茄子の花  
 自己流で貫き通す父の城  
 自分史へ古傷一つ伏せて置く  
 自分からやめる政治家などいない  
 邪な自分を自分が許せない  
 靴ぬいで自分を主張して座る  
 自分では気付かぬ癖で嫌がられ  
 娘の中に自分みつけた日の安堵  
 生かされて日々を自分のものとする  
 自分では美人と思う水鏡  
 雑踏の中に自分の影がない  
 苦勞性自分で言うて世話が好き  
 子の中に嫌な自分を見つけ出し  
 神様にもろた自分が軽すぎる  
 もう一人の自分が自分をあざ笑う  
 自分史の中に見事な切れ役  
 自分史を書くカルチャーへ通つてる  
 自分史を虐めて自分が満足し  
 自分に克つタッタそれだけの事なのに  
 自分という人は宇宙で自分だけ  
 気がつけば自分自分と言うていた  
 ブランコを降りて自分を取り戻す  
 饒舌が自分を縛る縄となり

福元 稔  
 西浦 小鹿  
 板倉あおい  
 宮前 秀子  
 青木 惜春  
 氏林 洋敏  
 吉川 寿美  
 中原 汲香  
 保西 岳詩  
 高橋 節美  
 渡辺 独歩  
 板尾 岳人  
 上村 和子  
 今西 静子  
 柿花紀美女  
 河野 青銅  
 福浦 勝晴  
 阪本 高士  
 堀端 三男  
 園山多賀子  
 宮本かりん  
 北山 悟郎  
 神谷凡九郎  
 真喜内 實  
 大路 美幸  
 阪本 国公  
 山本希久子

自問自答自分も少し磨かねば  
 自分だけを信じて歩幅しかとふむ  
 いとおしい自分と思うしまい風呂呂  
 御自分は如何貉が言ってます  
 今日からは自分ひとりの米を研ぐ  
 逆らわぬ夫へ自分から折れる  
 自分史に誇る夫婦の愛がある  
 肩書きが取れて自分の顔になる  
 右顧左眄自分の影を見失い  
 自分とのたたかい目下禁煙中  
 単身赴任自分ひとりをもち余し  
 自分から溶けていくのか角砂糖  
 自分にはそれが取り柄のお人好し  
 目分量やっぱり自分には甘い  
 嫁姑自分かくして今日も暮れ  
 影はもう自分で自分が掴めない  
 ベストセラー自分がはじめになつてきた  
 月光に自分をさらし写経する  
 自分にむけ強くなれよと鞭を打つ  
 自分だけ頼り太洋の一人旅  
 無位無冠自分の影をいとおしむ  
 記念写真先ずは自分を確かめる  
 瀬戸際に自分の力ほとばしる  
 自分だけ知ってる短所にて悩む  
 その結果自分に戻るブーメラン  
 照る日くもる日自分の心ままならず  
 自分なり演じ続けたシェイクスピア

辻川 慶子  
 吉岡きみえ  
 玉置 重人  
 池田 淑子  
 秋山シメ子  
 里 小路  
 板野 美子  
 椎江 清芳  
 木本 朱夏  
 向田桜羊子  
 阿萬 萬的  
 松本 文子  
 坂野はつこ  
 勢理客トミ子  
 山崎 君子  
 石倉美佐子  
 柳楽 鶴丸  
 澤田 千春  
 田中 亜弥  
 佐野 白水  
 米田 恭昌  
 秋元 てる  
 服部 朗子  
 飯田 悦郎  
 楠 昭子  
 内芝登志代  
 木山 雄幸

されど男自分独りが御しきれず  
 いつの日か消える自分の背番号  
 何にでも自分免許が口を入れ  
 受話器置き自分の立場考える  
 ライバルは自分心に言い続け  
 腹立てて泣いた影ある自分史よ  
 自画像のポケットベルが鳴り止まぬ  
 夕暮を自分一人の月見草  
 合わせ鏡私の裏の裏を見る  
 昨日とは違う自分を見る鏡  
 折返し点で自分が見当らぬ  
 皿洗い自分史のトーン高くなり  
 自分可愛さその場しのぎの嘘をいう  
 こんなくしよと思う自分を戒める  
 冷静に自分の足元じつと見る  
 余生なお自分の影を温める  
 自分より姉が美人でまだひとり  
 自分では憶けていないと思う惚け  
 身の上話聞いて自分と置きかえる  
 知りすぎて自分に甘くなってくる  
 自画像の画布を繕う彩を選ぶ  
 自分だけなどと思っていた不覚  
 とても真面目に自分の穴を掘っている  
 自分でも呆れるほどの下手な嘘  
 自分史の愈々佳境四十坂  
 仙人の髭自分史に栄えている  
 自分でも嫌な自分と好きな僕

寺尾百合子  
 清水悠貴女  
 藤田頂留子  
 山口三千子  
 坂部紀久子  
 伊藤 定子  
 驚見 章  
 菊池トミエ  
 奥田みつ子  
 川見 絹子  
 牧浦 完次  
 岩佐ダン吉  
 春城 年代  
 春城武庫坊  
 太田 幸枝  
 恒松 町紅  
 上島みゑ子  
 舟木与根一  
 神夏磯典子  
 奥山美智子  
 吐田 公一  
 町田 達子  
 河瀬 芳子  
 川島颯云児  
 坪田 紅葉  
 二宗 吟平  
 近藤 一途

昨日も今日もバックミラーに自分の顔  
 おぼろ月二十の自分取り戻す  
 知らんまに自分の梓にはめている  
 自分史のページにタマも入れてやる  
 占いに凝って自分を見失う  
 自分史の流れを変えた夜の電話  
 古希過ぎてやっと自分が判りかけ  
 福寿草自分の意地はあたたかし  
 自分から言うのも変だが今日の幸  
 自画像の美容整形うまくなり  
 これからは垢ぬけのした馬鹿になろう  
 自分とは一体この世の何だろう  
 愛すべき敵は自分の胸で飼う  
 肩書がとれて自分を取り戻す  
 正義感自分の位置を棒に振り  
 自分自身の甘えに気付く挫折の日  
 自分だけいい子に何時もなりたがり  
 横槍に自分のリズム崩さない  
 大自然自分を守る義を与え  
 葉漬けの自分をさとらせはしない  
 ショーウィンドーに写った自分を笑つとく  
 紫陽花のなかにかくれている自分  
 ウィンドに映る自分を見たショック  
 楽屋風呂自分の顔になつて来る  
 孤独にもある幸せを自慢する  
 消去法自分が消える日を思う  
 大切な自分が鏡の中にいる

羽原 静歩  
 人見 翠記  
 芳地 狸村  
 新 正子  
 北山 青珠  
 高田 律子  
 深日 白光子  
 那須 鎮彦  
 北 勝美  
 平松かすみ  
 小野 楠曠  
 高須賀金太  
 井上 信子  
 門谷たず子  
 寺井 東雲  
 田中 みね  
 吉田 笑女  
 池田寿美子  
 桑原 喜風  
 柴田英壬子  
 垂井千寿子  
 辻 一弘  
 桑田砂輝守  
 古川覚然坊  
 萩原 夏絵  
 安平次弘道  
 松村迷観子

川柳莫迦そんな自分を認めてる  
自分だけいい子になってピアノ弾く  
言い訳をする時自分を信じてる  
スランプを抜ける自分を信じきる  
逆立ちをすれば自分がよく見える  
自分ばかり責めて哀しい若さです  
四面楚歌自分の笛をまだ信じ  
自分の事がけて笑っている自分  
夫婦です自分が歩幅合わせます  
矛先を自分に向ける年の功  
湧いて出た幸に自分を失い  
不惑から自分の色の一つきり  
自分の敵は自分食べたいものがある  
忍の字を自分自身に言い聞かせ  
空想の世界で自分を遊ばせる  
自分史の四季には花が咲いてない  
自分史の終章飾る音楽詩  
自分では白と思つて居た鴉  
曼荼羅に自分を問うてる山の寺  
女です揺らく自分を知っている  
自分だけ一等席にすわる人  
終焉は自分の顔で安らかに  
自分だけ行かねばならぬ道を撰る  
自分なりの自画像やせたままでよい  
横車自分の意見ばかり積む  
母さんは自分のことは後まわし  
オギノ式とかに自分は異議がある

渡辺 菩句  
岩田 三和  
児島与呂志  
八木 芳水  
梶原サナエ  
宮崎 菜月  
井上柳五郎  
木村富美子  
久谷まこと  
松本はつ子  
田口 虹汀  
西川 和子  
米田 鉦平  
阿部喜久江  
錦織 文子  
上西 幸子  
渥美 弧秀  
中北 幸子  
江口有一朗  
西原 艶子  
津村八重子  
丁坪サワ子  
中塚 遊峰  
珍奇源次郎  
中川ヒサ子  
中島 正博  
鶴久百万両

小説の中に自分を置いて見る  
泣き止まぬ児に自分まで泣けてくる  
齢だなあ本当の自分が見えてきた  
悪玉の動く自分が許せない  
今のうちに自分の方から話しく  
自分から飛び込む虫になつてみる  
自分ひとつ捨てると真実見えてくる  
気の弱い自分を愛が打ち砕く  
ブレーキの効かぬ自分をもて余す  
自分なりに納得したのでまた迷う  
自分の事は自分でして墓地さがし  
口癖に自分はと言う兵のしみ  
この鼻が自分に一番似合つてゐる  
ふところの薄いとこも自分に似  
自分の顔やから刺つたり生やしたり  
失敗をするたび自分らしくなる

佳吟 (三六句)

にぎりめし自分に負けることはない  
自分勝手も八方美人も嫌いです  
他人を知り自分を知って退くとする  
バカバカバカ厭な自分に投げつける  
もう一人の自分励ます本を購う  
ジャンプして自分の影をたしかめる  
責任をとらぬ自分を困らせる  
自分だけよい子になろうと貢する  
自分だけいい子になつてゐる狸  
ああ定年自分の影にけつまずき

堀江敬吉郎  
清野 こう  
二宮喜久雄  
倉垣 恵美  
菅井とも子  
住田 天端  
笠原 吸江  
松原 寿子  
宮園射月芳  
楠 美子  
金本不二夫  
平本 雅士  
松本今日子  
大澤三四子  
河内 天笑  
河内 月子  
小島 蘭幸  
千原 理瑛  
河井 庸佑  
西川 景子  
林 瑞枝  
来住タカ子  
土橋 螢  
山添 眉水  
宮口 笛生  
岩本雀踊子

虚しい日自分ひとりを苛め抜く

自分史を書く4Bの程の良さ

思い直して捨てた自分をまた拾う

自分から美男子なんて言えますか

自分史のページめくると血が匂い

もう一人の自分を見つめている六十路

のひらに自分の熱い息を吐く

まず自分あとは野となれ山となれ

プライドに振り回されている自分

神々と酒を酌む自分の森がある

糠床をまぜてただけの自分かも

我輩は自分勝手な猫である

自分との戦いだから負けられぬ

四こまの漫画自分と同じ夢

一言が多い自分を責めている

思うてた自分と違うことがある

自分でも働きすぎと思う蟻

自分だけは百まで生きる飯を食う

アヒルの子自分の姿見ぬことだ

吾子は今日自分の足で陽に立てり

自分から話してくれた親子風呂

もう一人の自分とはすぐ妥協する

自分ではしっかりしてゐるらしい女

等身大の自分に出逢うた風の街

負けず嫌いの自分にはもう飽きた

無人駅で下りで自分を取り戻す

山田 高夫

福本 英子

西山 幸

松田壮之助

両川 洋々

大塚 節子

後藤 正子

奥谷 弘朗

小林 妻子

池 森子

島村美津子

片上 英一

樫谷 寿馬

松崎 幸子

平井 照子

岸野あやめ

田形 美緒

宮崎シマ子

高田美代子

柿木 英一

森田 華子

安藤寿美子

高田 博泉

西出 楓楽

中原みさ子

榎本 信治

## 十 秀

太陽へ自分を飾る術もない

いつの日も舞台の袖にいた自分

神様の失敗作としての自分

団らんに自分一人がおじやま虫

開き直ってほんとの自分見て貰い

自分から和解に誘う茶の心

自分のこと自分で出来るありがたさ

自分らしく生きておりますかすみ草

バス停からだんだん自分のかおになり

自分なりの解釈をして争わず

## 七 客

どنگりの転がる中にいる自分

自分には自分のペースとろろ汁

自分より優しい朋友を持っている

けだものの自分と出会う水たまり

澄みきった水で自分を晒したい

気がつけば火の粉をあびていた自分

自分とは正反對の姉が居り

彼が出るなら自分も出よう参議員

自分なら犯さないとはいえませんが

自分に関係ないとわかって飲みに入る

自分ですすみましたと長女次女

軸

天

地

政岡日枝子

西桐よしほ

山本 慶三

森下 愛論

松井かなめ

宮西 弥生

本間満津子

藤田 泰子

山本ひよこ

小林トメ子

山本 半銭

遠山 可住

川上より子

児玉 歌子

青戸 田鶴

吉原 紅月

奥田 良子

藤岡 花梢

納 糸葉

野田素身郎

西尾 栞

## Ⅱ 編集後記 Ⅱ

☆西尾葉主幹の受章記念川柳大会は盛會裡に終ることが出来、ご支援の各位に心からのお礼を申します。

☆女性コーナーの「尚香の花」の選者、小出智子さんの句集「露の墓」は目ざましい売れ行きの様子。出版記念句会は、葉主幹の大会と同じ部屋で開催されることとして、この方のご協力もよろしく。

☆俳風柳多留廿六篇研究は今月号で終ります。論講担当の諸先生に深甚の謝意を表し、今後再度のご指導をお願いします。九月号からの古川柳研究は「柳籠裏三篇研究」が新たに発見されますのでご期待下さい。

☆七月の路郎忌句会で柳話を担当した私は、路郎先生と六月十二日に亡くなられた作家の藤沢恒夫先生の思い出を話した。単なる個人の思い出に偏したことを後悔したが、「人は志を持つことが大切だ」と言いたかったのである。志というた

大袈裟だが、私にも目標があった、私がそうであったように、私も若い作家の登用に心掛け、力を尽くしたのだったが、スミーズには運ばれていない。それが、

川柳の体質なのである。☆六月二十六日、写真家の岩宮武二氏が死去された。代表作「佐渡」をはじめ、「ラダック曼荼羅」などの写真集は著名で、大阪芸大写真学科長としての教育者であつた。行年六十九歳。

☆戦後間もなく結核を患い肋骨七本を切除し、胃潰瘍の手術もされた半人前の体は私とそっくりで、三千五百米から四千米を優に越すヒマラヤの峠を越えて酸素ボンベを使いながら撮影された作品には魂魄が宿り、おどろおどろしい異相異形の神仏は、見る者を睥目させて止まず、私の貧しい詩心に屢々活を入れてくれた。

☆伊丹三樹彦氏の写真の師だ。「夕月夜ちちはことにはるかな」。「向日葵やからからまはす摩尼車」

☆暑中見舞い広告、昨年を凌ぐ格別のご支援に対し深謝申し上げます。(薫)

▼お月さんごんねんながら負けました(須崎豆秋)。敗戦記念日の八月十五日が今年もやって来る。歳月は向うから来るのか、こちらから行くのかわからない。待つていてもその時にならないと出会えないし、忘れていてもその時が来れば出会える。これを書いている

六月の二十三日は、沖繩の敗戦記念日である。沖繩では「県慰霊の日」として摩文仁の平和祈念公園で、県主催の沖繩全戦没者追悼式が開かれる。関係者にとつては、本土の敗戦記念日より

も感慨深いものがあるところ、想像に難くない。毎年その日を休日にしてはいたが、国としては廃止する意向らしい。戦争をしたのがお上であり、戦争犠牲者の霊をなぐさめる休日をとるあげようとするのもお上である。翌二十四日、美空ひばりさん死去。二十五日、尾上松緑氏死去。そして林

芙美子氏の「放浪忌」でもあった。そのどれもが悲しいことで、かわり方によつて心の傷の深さもいろいろである。人生とは悲しみと親戚らしい。

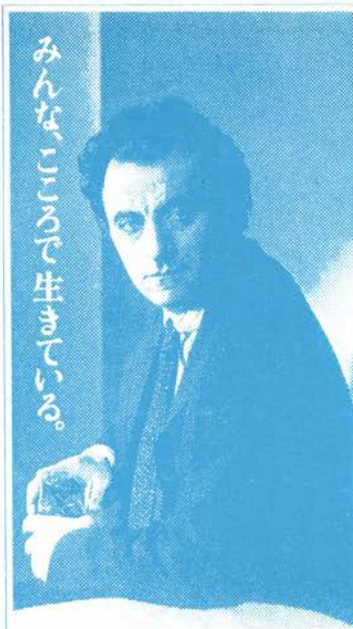
▼テレビの深夜映画で、イタリア映画「自転車泥棒」を観た。吹き替えのない日本語の字幕入りだがそれなりの味わいがある。読むのがわずらわしいが熱心に終りまで観た。「何とかなるもんさ死ぬ時以外は」こんな素晴らしい台詞を今まで二度ほど観ている気がつかなかった。

(き) ☆「巴里祭 仏蘭西革命二百年」——一七八九年七月十四日は、パリの市民たちが当時、政治犯の収容所であつたバステイーユ要塞を占拠した日である。フランスでは毎年、この日を共和国記念日として祝う。巴里祭とは日本人が命名したもので、夏の季節ともなつており、「濡れてうれし少女が匂ふ巴里祭」の句がある。そして今年は、そのフランス革命の二百年とあつて、さ

まざまなイベントがくりひろげられ、サミットもひらかれた。

★「近代史は、一七八九年にはじまる」とは、旧制中学校時代、西洋史(當時はそのいう学科名であつた)の教師のことばだが、今もなお、私の耳の底にこびりついている。そのころは、あまり深くも考えなかったが、戦争という暗い谷間をへて、戦後、あらためて世界史をひもとき、その意味を知ることでできた。

★フランスの国旗は青・白・赤の三色旗で、革命の理想であつた自由・平等・友愛をあらわしており、それほまた、人類共通の願いでもある。だからこそ、その旗は美しい。しかしこの長い期間に、人類はどれだけその理想を実現することができたのだろうか。近代化を旗印とする中国で、自由と民主主義を求める学生・市民を武力で弾圧した天安門の惨劇をどう見るべきか、中国を愛する一人として、憤りを禁じ得ない。(正)



ウイスキーの決め手は、モルトです。

1976年酒税改正によりお値上げした

新価格3,750円

容量750ml(希望小売価格(消費税込))

(旧価格5,000円) 新酒は20歳未満に飲ませず

SUNTORY  
WHISKY  
ROYAL

MIXTURE OF FINEST SELECTED MALT WHISKY SUNTORY LIMITED



5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店  
なんば高島屋百貨店  
泉北高島屋百貨店  
京都高島屋百貨店  
阪神百貨店  
松坂屋百貨店  
そごう百貨店  
京阪モール店

サンプラザ中之島店  
サンストア淀屋橋店  
アベノ近鉄百貨店  
上本町近鉄百貨店  
東大阪近鉄百貨店  
奈良近鉄百貨店  
京都近鉄百貨店

なんば新川店  
淀のまち店  
ドーチカ店  
南海難波駅店  
国鉄大阪駅店  
梅田大丸百貨店  
堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551